猪名川町

猪渕遺跡

－新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県城）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成28(2016)年3月

兵庫県教育委員会

猪渕遺跡

兵庫県文化財調査報告　第485冊　平成28年3月

兵庫県教育委員会

27教①1-019A4

猪名川町

猪渕遺跡

－新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 28(2016)年 3 月

兵庫県教育委員会

猪名川町

猪渕（いぶち）遺跡

－新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 28(2016)年 3 月

兵庫県教育委員会

猪渕遺跡　遠景（東から）

猪渕遺跡　遠景（北から）

猪渕遺跡　全景（北から）

華南産灰釉陶器四耳壺

例　言

1　本書は、川辺郡猪名川町猪渕に所在する猪渕遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は、新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴うもので、西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所（平成26年度までは、兵庫工事事務所）の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3　調査の推移

猪渕遺跡の調査は周辺の分布調査の開始から本発掘調査の終了まで、平成10年度より平成25年度に亘っており、その詳細は第１章にあげた。本報告書に直接関わる確認調査・本発掘調査は以下の通りである。

（発掘作業）

確認調査　平成23年11月10日～平成24年３月９日
実施機関：兵庫県立考古博物館
工事請負：（株）小東組

確認調査　平成24年12月6日～平成25年３月15日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
工事請負：（株）司興業

本発掘調査　平成24年12月6日～平成25年3月15日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
工事請負：（株）司興業

本発掘調査　平成25年12月１日～平成26年３月14日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
工事請負：（株）浜津組

（出土品整理作業）

平成26年４月１日～平成27年３月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

平成27年４月１日～平成28年３月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4　本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　西口圭介（第３章以外）が当センター整理技術嘱託員柏原美音の補助を得て、行った。

5　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

6．その他の記載項目

・調査成果の測量は、電子基準点神戸北・箕面・猪名川及び２級基準点　神５－２・神５－３・神６－１を使用し、座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第Ⅴ系に属する。

・本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

・空中写真測量は、平成24年度は（株）アコード、平成25年度は（株）八州に委託した。

・遺物写真撮影は、（株）クレアチオに委託した。

・本書の図版１「遺跡の位置」は、西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所（平成26年度までは、兵庫工事事務所）提供の1/2,000都市計画図（計画路線入り）を縮小して使用した。

・現地の遺構実測は、調査員と調査補助員が行った。

・遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県まちづくり技術センター嘱託員が行った。なお、遺跡は北向き斜面に存在するため、遺構図版の作成に際し、南を天にするものがある。

・本遺跡の地形環境については立命館大学非常勤講師　青木哲哉氏に現地にてご教示いただき、本報告書の第３章として玉稿を賜った。

・土坑墓の炭化物ついて、放射性炭素年代（AMS測定）を（株）加速器分析研究所に依頼した。

・出土木製品の樹種同定については（株）パレオ・ラボに依頼した。

・発掘調査及び報告書の作成にあたっては下記の方々・機関より資料提供・御指導等をいただいた。記して感謝の意を表すものである。（敬称略）

青木哲哉・青木美香・池田征弘・岡田章一・渡辺　昇・猪名川町教育委員会

目　次

本文目次

第１章　はじめに …… (1)
第２章　本発掘調査の成果 …… (5)
第３章　猪渕遺跡の地形 …… (37)
第４章　まとめ …… (39)

表　目　次

表１　確認調査トレンチ一覧 …… (2)
表２　出土遺物観察表Ⅰ …… (33)
表３　出土遺物観察表Ⅱ …… (34)
表４　出土遺物観察表Ⅲ …… (35)
表５　出土遺物観察表Ⅳ …… (36)
表６　中近世墓地跡土坑一覧（２区） …… (41)
表７　中近世墓地跡土坑一覧（３区） …… (42)

本文挿図

第１図　下層断ち割りトレンチ …… (38)

図版目次

図版１　調査地点位置図
図版２　遺構全体図
図版３　遺構平面図詳細図Ⅰ（中世集落）
図版４　１－Ⅰ区　古代～中世集落
図版５　１－Ⅰ区　各土層断面
図版６　１－Ⅰ区　水溜遺構・埋甕・焼土坑・掘立柱建物跡
図版７　１－Ⅱ区　中世前期の屋敷地
図版８　掘立柱建物跡SB2001
図版９　木棺墓SX2003・土坑墓SX1004
図版10　１－Ⅱ区　土坑群
図版11　１－Ⅱ区・3区　土坑・溝
図版12　遺構平面図詳細図Ⅱ（中近世墓地）
図版13　中近世墓　A～C群
図版14　中近世墓　D・E群
図版15　３区　南壁土層断面図
図版16　２区　中近世墓Ⅰ
図版17　２区　中近世墓Ⅱ
図版18　２区　中近世墓Ⅲ
図版19　２区　中近世墓Ⅳ
図版20　３区　土坑Ⅰ
図版21　３区　土坑Ⅱ
図版22　出土土器Ⅰ
図版23　出土土器Ⅱ
図版24　出土土器Ⅲ
図版25　出土土器Ⅳ
図版26　金属製品Ⅰ
図版27　金属製品Ⅱ
図版28　石製品・石造品
図版29　木製品Ⅰ
図版30　木製品Ⅱ

写真図版目次

巻頭図版１　猪渕遺跡　遠景（東から）・猪渕遺跡　遠景（北から）
巻頭図版２　猪渕遺跡　全景（北から）・華南産灰釉陶器四耳壺

写真図版１　航空写真（国土地理院）
写真図版２　遺跡遠景　空中写真Ⅰ
写真図版３　遺跡全景　空中写真Ⅱ
写真図版４　１区　全景
写真図版５　１－Ⅰ区　土層・遺構Ⅰ
写真図版６　１－Ⅰ区　遺構Ⅱ
写真図版７　１－Ⅱ区　全景・掘立柱建物跡
　　SB2001
写真図版８　１－Ⅱ区　SB2001柱穴
写真図版９　１－Ⅱ区　土葬墓
写真図版10　１－Ⅱ区　土坑群
写真図版11　１－Ⅱ区・３区　区画溝・土坑
写真図版12　１－Ⅱ区　溝・畠跡・鋤跡
写真図版13　２区　全景
写真図版14　２区　遺構Ⅰ
写真図版15　２区　遺構Ⅱ
写真図版16　２区　遺構Ⅲ
写真図版17　２区　遺構Ⅳ
写真図版18　２区　遺構Ⅴ
写真図版19　３区　全景・遺構Ⅰ
写真図版20　３区　遺構Ⅱ
写真図版21　下層断ち割りトレンチ
写真図版22　出土土器Ⅰ
写真図版23　出土土器Ⅱ
写真図版24　出土土器Ⅲ
写真図版25　出土土器Ⅳ
写真図版26　出土土器Ⅴ
写真図版27　金属製品Ⅰ
写真図版28　金属製品Ⅱ・石製品
写真図版29　石造品
写真図版30　木製品

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

猪渕遺跡は、新名神高速道路（旧称　第二名神高速道路）箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴い明らかとなった遺跡である。

兵庫県土木部建設課より依頼を受け、平成10年度に神戸市北区神戸市JCT（仮称）～川西市の区間について兵庫県教育委員会が分布調査を行い、遺物の散布を認め、№11地点・№12地点とした。この調査結果を端緒として更に２度の分布調査を行い、№24地点（南側斜面）を加えた３地点について、平成22年度以降、西日本高速道路株式会社関西支社兵庫工事事務所（当時）からの依頼により５度の確認調査を行った。その結果、埋蔵文化財が包蔵されることが明らかとなり、猪渕遺跡とした。なお、№24地点については一時向イ墓地遺跡としたが、最終的には猪渕遺跡に統合した。

上記の確認調査結果を受け、平成24年度（平成24年９月27日付　関兵工第918号）・平成25年度（平成25年９月10日付　関兵工第956号）により本発掘調査を実施した。

第２節　各調査・整理作業の経過と概要

〔分布調査〕

遺跡調査番号　980063

所在地　　神戸市北区・宝塚市・川西市・川辺郡猪名川町

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　調査第2班
池田正男　吉識雅仁　西口圭介　池田征弘　松野健児　佐々木俊彦　戸田真美子

調査期間　　平成10年５月６日～５月13日

調査面積　　約1,300,000㎡

概　　要　平成10年５月６日～５月13日に対象路線内、施工対象範囲約1,300,000㎡について分布調査を行い、猪名川町猪渕地区では、埋蔵文化財が包蔵される可能性が高い地点としてNo.11・No.12地点が見つかった。

遺跡調査番号　201055

所在地　　川辺郡猪名川町猪渕から宝塚市切畑

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部　調査第２課　別府洋二・山上雅弘

調査期間　　平成22年５月20日

調査面積　　111,000㎡

概　　要　工事用道路予定地を中心に調査を実施した。

遺跡調査番号　2011064

所在地　　川辺郡猪名川町猪渕

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部　調査第２課　西口圭介

調査期間　　平成23年４月12日

調査面積　　2,000㎡

概　　要　　路線内及び周辺から一石五輪塔・石仏を発見し、№24地点とした。加えて本地点は斜面地に一石五輪塔が散乱していること、また、調査対象地の外側を含め、所々に平坦面が存在し、一部でごく最近まで供養を継続していた墓（調査区南側石組み遺構）が存在すること、加えて「猪名川町史」編纂に伴う墓地調査において字「高山」所在の墓地として集成されていることから、中世から近世にかけての墓地遺跡が存在すると認識された。

〔確認調査〕

平成21年度より７次の調査を行った。各トレンチの位置は図版１参照。概要については一覧表にまとめた。

表１　確認調査一覧

新トレンチ名	調査番号と地区名	調査期間	旧トレンチ名	幅（m）×全長（m）	遺構	遺物	時期	立地と状況	備考
1			T１	1.3×3.0				扇状地裾出現	削平
2	2010241（No.12）	20101118	T２	1.7×3.5		瓦器	遺物は中世前期	扇状地裾出現	
3			T３	1.4×4.0		土師器細片		扇状地裾出現	削平
4			T４	0.7×2.0				扇状地裾出現	削平
5	2010287（No.12）	20110218	T５	1.5×4.0				撹乱土出現	
6			T６	1.0×2.0				扇状地砂礫	
7			１T	1.0×20.0				尾根上	大半が削平
8			２T	1.0×30.0	ピット・土坑・焼土坑	瓦器・土師器	中世前期・後期	包蔵期・扇状地	谷部堆積・湧水
9			３T	1.0×35.0	溝	細藻井青磁	中世後期	扇状地	大半が削平
10			４T	1.0×10.0	溝	土師器細片		扇状地裾	
11	2011234（No.11）	20111110～20120309	５T	1.0×40.0	溝・ピット	瓦器・土師器・瀬戸美濃天目椀・青磁	中世前期・後期	遺構面・扇状地	削平
12			６T	1.0×5.0		瓦器	遺物は中世前期		削平
13			７T	1.0×20.0	ピット			扇状地裾・谷部	削平
14			８T	1.0×30.0		土師器・須恵器	遺物は中世前期	谷部	削平
15			９T	1.0×10.0		白磁・須恵器	遺物は中世前期	扇状地	削平
16			19T	1.0×20.0	溝	須恵器捏鉢・瓦器・土師器・丹波焼	中世前期・後期		削平
17			10T	1.0×10.0		土師器	遺物は中世前期	扇状地裾出現	削平
18			11T	1.0×30.0		土師器細片・丹波焼・焼土	遺物は中世	扇状地裾出現	削平
19			12T	1.0×20.0		土師器皿片	遺物は中世前期	扇状地裾出現	
20	2011234（No.12）	20111110～20120309	13T	1.0×20.0		瓦器・土師器	遺物は中世前期	扇状地裾出現	尾辺に一石五輪塔
21			14T	1.0×20.0		瓦器・土師器	遺物は中世前期	扇状地裾出現	一石五輪塔散乱
22			15T	1.0×15.0		土師器	遺物は中世前期	扇状地裾出現	
23			16T	1.0×20.0		須恵器片		扇状地裾出現	
24			17T	1.0×5.0				扇状地裾出現	
			18T	欠番					
25			１T	2.0×20.0	土葬墓・造成面	土師器皿片	16 世紀	北向き斜面山裾	
26			２T	1.0×5.0				北向き尾根	
27	2011257（No.24）	20111110～20120309	３T	2.0×3.0	土葬墓		16 世紀ヵ	北向き斜面	
28			４T	1.0×9.0	土葬墓・平坦面	土製品	16 世紀ヵ	北向き斜面	
29			５T	2.0×4.0	平坦面・土坑	土師器皿・備前焼・五輪塔	16 世紀	北向き斜面	
30			１T	1.5×2.0		須恵器片・炭	遺物は中世前期	土壌層	
31			２T	2.0×2.5		土師細片		土壌層	
32	2012058（No.12 他）	20120528	３T	2.0×2.0					
33			４T	2.0×2.5		陶磁器			近世以降
34			５T	1.5×2.0				砂礫層	
35			６T	2.0×2.5				砂礫層	
36			T－１	2.0×10.0	焼土坑				
37	2012155（No.11）	20121206～20130319	T－２	1.0×1.7	焼土坑				
38			T－３	2.0×7.8					
39			T－４	1.0×7.0	造成面				

〔本発掘認調査〕

遺跡調査番号　2012154

所在地　　川辺郡猪名川町猪渕

事業者名　　西日本高速道路株式会社関西支社兵庫工事事務所（当時）

事業名　　新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事

担当者　　西口圭介・菅澤敏弘

期　　間　　平成24年12月６日～平成25年３月15日

面　　積　　１区　1,808㎡

遺跡調査番号　2013119

所在地　　川辺郡猪名川町猪渕

事業者名　　西日本高速道路株式会社関西支社兵庫工事事務所（当時）

事業名　　新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事

担当者　　渡辺　昇・西口圭介・門田論佳・菅澤敏弘

期　　間　　平成25年12月１日～平成26年１月14日

面　　積　　２区　1,854㎡　３区　418㎡

概　　要　　南から張り出す220m級の支尾根の北向き斜面とその山裾を開墾した水田部分から構成されている。

2012年度はその内の水田部分を調査対象としており、１区とした。更に南側の山麓から流れでる沢筋を挟んで、東側の調査区をⅠ区、西側の調査区をⅡ区と細分した。

Ⅰ区は18世紀代に水田を造成した際に山裾を大きく切り崩しており、平安時代中期の土器、鎌倉時代の柱穴群、室町時代以降の石組み水溜遺構、石垣、丹波焼埋め甕を検出した。

Ⅱ区は比較的削平が少なく、鎌倉時代の建物跡・墓跡・畠跡・溝跡を調査した。

以上の結果から、１区及び後述する2013年度調査の３区の一部を、中世前期を中心とした集落遺跡と認識し、次章において、「中世集落遺跡の調査」として説明する。

これに対し、2013年度は２区・３区と呼称して山裾・北向き斜面・支尾根先端を調査している。２区と３区の間には谷部(沢筋)があり、東側を２区、西側を３区とした。３区の斜面下方が昨年度調査した１－Ⅱ区である。

２区は急斜面であるが、中央部と調査区外南側に僅かな平坦面が存在する。その平坦面とそれに隣接する斜面を中心に遺構は築かれている。墓の可能性のある落ち込み・土坑36基、溝２条とピットを検出した。

３区は、地形は２区に比べると緩やかである。墓の可能性のある土坑・落ち込み19基と溝３条を調査した。溝の中で東西方向に走る２条は鎌倉時代の遺物を出土しており、１区の溝と共に屋敷地を区画すると考えられる。ゆえに、緩斜面に走る２条の溝については中世集落遺跡の一部と捉え、それ以外は、２区の遺構とともに、次章において、「中近世墓地の調査」として説明する。

〔整理作業〕

出土遺物の整理については、平成24年度・平成25年度（本発掘調査時）に遺物洗浄を実施し、その他は平成26年度に接合補強・実測・復元・保存処理を、平成27年度に製図・トレース・レイアウトを実施した。

平成26年度

調査担当者　　西口圭介

整理保存課　　菱田淳子・長濱誠司・岡本一秀

接合補強・復元　　島村順子・嶺岡美見・上田沙耶香・小野潤子・藤池かづさ・石田典子・沼田眞奈美

実　　測　　宮田麻子・佐々木響子・寺西梨紗

保存処理　　今村直子・藤尾裕子・吉村あけみ・桂　昭子・佐々木愛・梶原奈津子

平成27年度

調査担当者　　西口圭介

整理保存課　　菱田淳子・長濱誠司・岡本一秀

製図・レイアウト　　柏原美音・門田論佳・河合たみ

第２章　本発掘調査の成果

第１節　中世集落遺跡の調査

１．１－Ⅰ区の概要と層序（図版４・５　写真図版４）

１－Ⅰ区は中世屋敷地の外側にあたる。調査前の地形は、ほぼ１枚の水田であり、現況の標高は約101ｍ、北側（下段）の水田との間に約1.5ｍの落差がある。この水田造成は、近世に始まる。18世紀代に水田を造成した際に山裾を大きく切り崩し、前面に盛り出して石積みを造っている（石列遺構）。この水田造成によって近世以前の健常な遺構面は乏しい。遺構面の標高は101.6ｍ～100.6ｍである。

平安時代中期の谷地形と土器、鎌倉時代の掘立柱建物１棟と柱穴群、中世末期から近世にかけての焼土坑、石組み水溜遺構、石組み溝、丹波焼埋め甕を検出した。

堆積層序は、現耕作土・近現代の盛土の下に近世耕土（暗灰黄色土）があり、近世耕土は斜面を切り出した盛土（黄褐色盛土　黄褐～オリーブ褐砂）上に形成されている。その下には中世前期の包含層（オリーブ褐色土）が堆積する。中世前期包含層の下には旧谷地形が残り、その最上層の凹部からは平安時代中期頃の土器が出土している。

２．１－Ⅰ区の遺構

（掘立柱建物・柱穴群）

調査区の西半部から掘立柱建物跡を１棟復元した（SB2002）。周辺には建物として復元できなかった柱穴が37個あり、更に多くの建物が存在したと考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ2002（図版６　写真図版５）　１－Ⅰ区西寄りにおいて検出した。埋没した旧谷部の西肩に位置する。桁行方位をＮ40°Ｅにとる側柱建物跡である。桁行南北３間（4.50ｍ）・梁行東西２間（3.00ｍ）、床面積13.50㎡の規模である。建物の柱間は、1.50ｍ前後が基本である。東桁行きの柱穴は２か所検出出来なかった。削平を受けたものと考えられる。柱穴は円形を基本とし掘方径50cm、深さは約70㎝である。建物内の柱穴は棟支えの柱穴と考えられる。柱穴からは土師器皿３・瓦器椀片１・２が出土している。柱穴の遺物から鎌倉時代と考えられる。

（石組み水溜遺構・土坑・焼土坑）

石組み水溜遺構ＳＫ1003（図版６　写真図版６）　１－Ⅰ区中央において検出された石組みを伴う水溜状遺構である。近世盛土によって埋没している。形状は北東半が一部拡張された逆Ｌ字形を呈している。拡張された北半部にコの字の石組みを持ち、南半には土坑底に格子状に丸太材を敷いている。土坑の規模は、長軸4.15m・短軸は拡張部で3.25ｍ、南半で短軸2.45ｍ、深さ0.7ｍを測る。石組み部分は一辺50㎝ほどの石材を横積み、一部縦積みに２段から３段で積み上げ、内法長辺1.90ｍ・短辺0.95ｍ・高さ0.70ｍを測るコの字形の石組みを造り上げている。南側は開放されているが、石材が散らばっており、丸太材を基礎に南壁が存在していた可能性が高い。この石組み部分は、南半の土坑を拡張もしくは造り直して出来た可能性が考えられるが詳らかではない。遺物は納をあけた角材などＷ１～Ｗ６が出土している。遺構の時期は、形態と層序から中世末から江戸時代初期と考えられる。本遺構は近世水田を造り出す盛土（黄褐色盛土）によって埋没しており、近世水田に伴う石垣（石列）や、一時期石列に取りついていたと考えられる石組み溝SD1004に先行する。平安時代の谷部肩に開けられ、湧水すること、同

様の遺構が広根遺跡Ｈ地区においても検出され、水溜遺構と考えられることから、本遺構も水溜遺構と判断した。時期は、中世末期から江戸時代に入る可能性が高い。SK1005と切り合い新しい。また、南隣を東西方向に流れるSD1004底からも水溜遺構状の凹部が検出されている。

土坑ＳＫ1005（図版４）　１－Ｉ区中央において検出された長軸2.5ｍ以上・短軸1.3ｍ以上・深さ0.4ｍ以上の長楕円形土坑である。SK1003と切り合い先行し、SK1003によって損壊されている。遺物は出土していない。

焼土坑ＳＫ1002（図版６　写真図版６）　１－Ｉ区中央南よりにて検出された。確認調査時に検出されており、中世前期の包含層の上面から掘り込む。不整な五角形を呈し、規模は長軸約110㎝、短軸85㎝、深さ約50㎝を測る。土坑底は丸みをもつ。３層に堆積は分かれ、１層は炭化物・焼土が混じる。２層はにぶい褐色粗砂混じり細～中砂、３層は暗褐小礫混じり細～中砂である。土師器鍋４・土錘５が出土している。土師器鍋４は13世紀であるが、遺構自体は中世後期と考えられる。２区中近世墓地跡に関わる火葬址の可能性がある。

近世水田に伴う遺構（埋甕・石組み溝・石列）

埋甕ＳＫ1001（図版６　写真図版６）　石組み溝SD1004が埋没した上から掘り込んでいる。円形の掘り方に丹波焼甕３を据えている。掘り方径約75㎝・深さ約45㎝を測る。土坑底は丸みを帯びる。推定復元される甕は高さ約82㎝を測り上半部が地面上に露出していたと考えられる。遺構の時期は中世末から近世と考えられる。

石組み溝ＳＤ1004（図版４・５　写真図版６）　調査区西端から東西方向(N60°Ｗ)に走り、石列に取りつく。幅1.10ｍ～幅2.70ｍ・深さ約30㎝・検出全長15ｍを測る浅い皿状の溝である。堆積層の１～７層は石列が伴う溝の埋土。８～13層はそれ以前の素掘り溝の埋土と考えられる。土器８～12・41が出土している。遺構の時期は16世紀～17世紀代と推測される。この溝は、層中央に長50㎝前後の石材が列状になっており、西溝肩に一部護岸を施していたと考えられる。東端北肩の石材は弧を描いて石列が巡る段に取りつくことから、当初は石列部分で流末が解放されていたと考えられる。但し、開口部に多量の石材が転落していることから推して、最終的には溝が埋没し、石列によって溝は塞がれたと考えられる。

石列遺構（図版４　写真図版４）　１－Ｉ区が位置する上段水田と北側の下段水田の間には現況で約１ｍの落差をもつ石垣が築かれていたが、掘削の結果、更に古い石積み（石列）が検出された。石列は段落ちに沿って南北方向に、一辺40㎝前後の石材が１段もしくは２段に積まれている。この石列は黄褐色盛土（整地土）に伴うものである。石列は最も外側を走る石列１が良く残っているが、石列１の背後に部分的に石材が並ぶ部分があることから、上段の水田を北側に拡張し、石列を積み替えた可能性が考えられる。更に、SK1003に隣接して卜字形に石列が存在する部分があることから更に古い石積みが存在した可能性が高い。石列１の残存長は約12ｍ・残存高さ約50㎝、北北西（Ｎ25°Ｗ）に走り、暗灰色礫混じり粗砂によって埋まる。石列の裏込め（黄褐色土）からは中世の遺物と共に17世紀代の唐津・須佐唐津焼が出土している。このことから本遺構は18世紀頃に造られたと考えられる。また、SD1004北側の石敷も水田拡張に伴うものと考えられる。

（平安時代中期の谷地形）

ＳＤ2003と谷地形（図版４　写真図版５）　調査区中央を西から東へ流れでて、猪渕川へと注ぎ込む小河川であったと考えられる。１－Ｉ区西端から細い溝SD2003として始まり、大きく膨らむが、下段水

田の造成によって消失する。東南東（N° 78 W）に走る。検出全長16 m・SD2003部分の幅約0.5 m、流末部分の幅約5.5 m以上・深さ1 mを測る。にぶい黄シルト混じり細礫が堆積する。遺物は土師器甕51・土師器羽釜52・土錘53・須恵器壺54・須恵器杯55・須恵器椀56が出土している。時期は概ね9世紀～10世紀代と考えられ、上面に厚く黒褐色土（中世包含層）が被覆する。

3．1－Ⅱ区及び3区北半部の概要と層序　（図版7）

1－Ⅱ区及び3区の北半部からは中世前期の遺構・遺物が出土している。調査前の地形は高低差のある上下2段の水田と山麓北斜面からなっており、調査前の標高は約100 m～約105 mである。

本調査区は、1－Ⅰ区と比べ削平がやや少なく、中世の遺構が残存していた。遺構面の標高は104 m～100 mである。鎌倉時代の建物跡1棟・畠跡・墓跡2基・土坑群・溝跡を調査した。溝跡の内、東西方向に走る3区のSD02・SD03と、1－Ⅱ区東端を南北に流れるSD2021・SD2022は概ね直交しており、建物跡・墓跡・畠跡・土坑群を囲み区画する屋敷地周りの溝と考えられる。

堆積層序は、現耕作土・近現代の盛土の下に近世耕土（暗灰黄色土）があり、その下には中世前期の遺物包含層（オリーブ褐色土）が堆積する。この点は1－Ⅰ区と同じであるが、中世前期の遺構面下からは地山が出現する。

4．1－Ⅱ区及び3区北半部の遺構　屋敷地の調査

（掘立柱建物跡）

掘立柱建物1棟が検出されている。

掘立柱建物跡ＳＢ2001（図版8　写真図版7・8）　1－Ⅱ区中央西よりにおいて検出した。桁行4間（9.6 m）・梁行4間（8.6 m）、桁行方位をN 50° W、床面積約82.56 ㎡を測る大型の総柱建物跡である。柱間は、桁行1間は北1間が2.28 m、3間が2.44 mを測る。梁行きは概ね2.2 m前後である。柱穴は円形を基本とし掘方径25 cm～40 cm、深さは約30 cm前後である。図示できる出土遺物はないが、建物形状から鎌倉時代の掘立柱建物跡と考えられる。

（土葬墓　土坑墓・木棺墓）

土葬墓2基が検出されている。

土坑墓ＳＫ1004（図版9　写真図版9）　土坑墓と考えられる。SB2001南隅に近接して検出された。北端を近世以降の水田造成によって失っている。主軸をN 26° Eにとり、SB2001とは並行しない。

墓坑は、浅く楕円形に掘り更に内部を長方形に深く掘削していたと考えられる。土坑底は平坦であるが、側面は緩やかに内湾する。また、南西隅はやや傾斜をもつ。外側の法量は長軸1.35 m、短軸0.61 m、深さ20 cm、内側の長方形掘方は長辺1.06 m前後の規模であったと考えられる。

墓坑上、中央よりやや南寄りに、全長約40 cm × 幅25 cm × 高さ20 cmの自然石が下面を水平にして据えられている。標石と考えられる。標石の下には瓦器椀が埋納されている。標石はN 52° Eに軸をもつ。埋土は2層に分かれ、内側には主に暗褐～褐色小礫まじり極細砂、外側にはにぶい黄褐色小礫まじりシルト質中～極細砂が入る。

遺物は土師器小皿片57・瓦器椀58・須恵器捏鉢片59が出土している。また、炭化物が出土している。瓦器椀58は副葬品である。時期は12世紀後半である。SK1004はSB2001に近接しており屋敷墓の可能性がある。土坑底が丸みを帯びること、平面・断面において棺痕跡を見出せなかったことから、長方形に掘り込んだ土坑墓と考えられる。

墓坑内より出土した炭化物について、（株）加速器分析研究所において放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測

定）を実施したが、暦較正年代 726 ～ 867calAD を示し、副葬された瓦器椀の年代観とは整合しなかった。

木棺墓ＳＸ 2003（図版９　写真図版９）　削平が激しいが木棺墓である。沢筋の西側、溝 SD2021・SD2022 の東側に位置し、並行する。

墓坑は不整な隅丸台形を呈する。全長 1.80 m・幅 1.20 m前後・断面は浅い皿状を呈し、残存する深さ 16 ㎝を測る。地形に合わせ、土坑底は北へ向かって傾斜を持つ。

木棺は南小口が開き、中央付近が内側へ歪む長方形の棺痕跡が検出された。全長 1.16 m・幅 0.68 m ～ 0.57 m、深さ 9 ㎝を測る。主軸をＮ 28°　Ｅにとる。棺内にはオリーブ褐礫混じり砂が入り、掘方埋土は暗灰黄からオリーブ褐礫混じり砂が入る。

棺内より瓦器椀 61・62、青磁碗 63 及び白磁碗片、鉄釘Ｍ 13 が出土しているが、棺に伴うか否かは不明である。区画溝 SD2021・SD2022 に近接しており屋敷墓と考えられる。SD2023 とは切り合い新しい。出土土器及び SD2023 との先後関係から時期は 13 世紀代と推測される。

（土坑　苗床状土坑群・土坑・落ち込み）

苗床状土坑群ＳＫ 2005 ～ＳＫ 2015（図版 10　写真図版 10・11）　SD2020・畠区画と SD2021 に挟まれた空間に SK2009 を除く SK2005 ～ SK2015 の 10 基の土坑を検出した。形状は円形を呈し、径 50 ㎝～ 80 ㎝、深さ 10 ㎝～ 20 ㎝を測り、灰黄褐砂を主として埋土としている。各土坑の埋土がほぼ同じであり、土坑底に凹凸があり安定しないものがあること、SK2011・SK2012 など下半が植物根の影響によって地山を土壌化させた可能性があるもの（黄褐小礫混じり極細砂）が含まれていることから、植物が密集して植えられていた可能性を考えている。ここでは苗床状土坑群と仮称しておく。時期は不明であるが、区画溝と畠跡の間に集中しており、周辺遺構と同時期の可能性が高い。

土坑ＳＫ 2016（図版 10　写真図版 11）　苗床状土坑群の北側から検出した円形土坑である。径 65 ㎝・深さ 35 ㎝を測る。土坑の断面形状はＵ字形である。埋土はオリーブ褐小礫混じり砂を埋土としている。土坑内より瓦器椀片が出土している。時期は周辺遺構と同時期の可能性が高く、鎌倉時代と考えられる。

土坑ＳＫ 2018（図版 11　写真図版 11）　SK1004 の西側に近接する。楕円形を呈し長軸 0.52 m・短軸 0.44 m・深さ 5 ㎝を測る浅い皿状の土坑である。にぶい黄褐細礫混じりシルト質中～細砂を埋土とする。図示できる遺物は出土していない。

落ち込みＳＸ 2001（図版 11　写真図版 11）　SD2017 の西側にある不整な卵形の浅い皿状落ち込みである。長軸 1.38 m・短軸 0.95 m・深さ 5 ～ 10 ㎝を測る。にぶい黄褐小礫混じり中～細砂を埋土とする。図示できる遺物は出土していない。

（溝　屋敷地を区画する溝ＳＤ 2021・ＳＤ 2022　３区ＳＤ 02・ＳＤ 03、畠跡、その他の溝）

Ⅱ区東端には、南西から北東に走る溝が２条（SD2021・SD2022）あり、鎌倉時代の土器が出土している。これが東側の沢筋と共に、建物跡・畠跡・墓跡を含めた鎌倉時代の屋敷地の東側を限っていたと考えられる。また、３区では標高 104.2 m付近に東西方向に走る SD02・SD03 が検出されている。ここからも鎌倉時代の土器が出土している。この溝が屋敷地の南側（山側）を限っていたと考えられる。

溝ＳＤ 2021（図版 7・11　写真図版 11）　調査区東端から検出した。SD2022 と切り合い新しく、南西から北東方向（N45°　E）に走る検出全長 8.6 m、幅約 1.20 m・深さ 25 ㎝、浅いＵ字状の断面形状をとる。主に暗灰黄シルト質極細砂混じり小礫が堆積しており、土師器小皿 67・68、土錘 69、瓦器椀 70、瓦質脚付き羽釜が出土している。形状・土器から、鎌倉時代の屋敷地の区画溝と考えられる。断面観察から２～３度掘り直されている。SD2007 及びその西隣（SD2009 の南側）の畠区画跡、SD2005、SD2006・

SD2020・SD2016と直交する方位をとる。

溝ＳＤ2022（図版7・11　写真図版11）　調査区東端から検出した。SD2021と切り合い先行する。南西から北東方向(N33°　E)に走る。流末は蛇行し沢筋へと方向を変えている。検出全長9.5ｍ、幅約25㎝・深さ30㎝、Ｖ字状の断面形状をとる。埋土は２層に分かれ、下層には暗灰黄シルト質極細砂混じり小礫が、上層にはオリーブ褐小礫混じりシルト質極細砂堆積している。溝内からは瓦器椀71・72が出土しており、鎌倉時代の屋敷地の区画溝と考えられる。SD2009～SD2015・SD2018・掘立柱建物SB2001と直交する。

溝ＳＤ02　３区（図版7・11　写真図版11）　３区中央東端から検出した。SD03と並行し、北西から南東方向（N64°　W）に走る検出全長3.0ｍ、幅約0.55ｍ・深さ17㎝、Ｕ字状の断面形状をとる。粗砂を含むオリーブ褐シルト質極細砂を埋土とし、土師器小皿80～83、土師器皿84が出土している。遺物から鎌倉時代の屋敷地の区画溝と考えられる。

溝ＳＤ03　３区（図版7・11　写真図版11）　３区中央東端から検出した。SD02と並行し、北西から南東方向（N61°　W）に走る。検出全長2.2ｍ、幅約0.40ｍ・深さ13㎝、Ｕ字状の断面形状をとる。粗砂を含むオリーブ褐細砂～極細砂を埋土とする。図示できる遺物は出土していないがSD02と切り合い同様の形態をとることから鎌倉時代の屋敷地の区画溝と考えられる。

畠跡（図版7・11　写真図版12）　建物SB2001の背後（山裾）において数条の鋤跡や畠の区画が検出されている。鋤跡の向きは２種類ある。建物との間に段差が生じているが、近世以降の水田造成によると考えられる。

SD2009～SD2015・SD2018は掘立柱建物SB2001と並行する走行をもつもので、幅約15㎝～20㎝、深さ約3㎝～5㎝、約20㎝の間隔を空けてＮ53°　Ｗ前後に走る。苗床状土坑群西側の畠区画についてもほぼ同じ向きをとる。これらはSD2022と直交した向きをとる。対して１－Ⅱ区の北壁際に走るSD2007及びその西隣（SD2009の南側）の畠区画跡、SD2005、SD2006・SD2020・SD2016についてはやや北へ走行を振り、Ｎ45°　Ｗ前後に走る遺構である。SD2005の北側に並行する落ち込み列（波板状凹凸面）も畔などの痕跡と考えられ、同じ方位をとる。これらはSD2021と直交した向きをとる。

これら２種の方位をとる溝等の遺構は主に畠作の痕跡と考えられる。

遺物はSD2005から瓦器椀片が出土している。埋土は被覆する中世前期包含層と同一層と認識でき、中世前期の溝である可能性が高い。また、その他の溝も中世前期包含層下から概ね検出されている。

その他の溝（図版11　写真図版12）　SD2008・SD2019・SD2024の断面をあげた。これらの溝は鋤溝の痕跡と考えられるが、詳細は不明である。

第２節　中近世墓地跡の調査

１．２区の概要　（図版 12　写真図版 13）

２区は１－Ⅰ区の南側斜面の調査区である。現況は雑木林、標高 121 m～ 101 mの間が対象である。この斜面は、北側に張り出す東西２本の尾根とその間をつなぐ浅い谷地形から成り立っている。そして、上方へは標高 165 mまで続き、さらに上部は宅地化され、旧地形は消失している。開発以前は標高 220 m前後の尾根となっていた。

斜面には人為的な造成も加えられており、大きく、標高 108 m付近（上段）と標高 106 m付近（中段）、そして１－Ⅰ区を含む標高 101 m付近（下段）に段状の地形変化がある。これらの内、上段の地形変化は後述する中近世墓地の造成に伴う小規模な削平と考えられるが、中段については近世墓地の造成と近代の果樹栽培、下段については先述した様に近世以降の大規模な水田造成によるものと考えられる。

２区では溝２条（SD01・SD02）のほか、土坑・落ち込み・石組みを計 46 基検出した。これらの遺構は SX と表示した。この内、SX01 は火葬址である。また、SX11・SX34 についても火葬址の可能性があるが、骨片は認められなかった。それ以外の多数は土葬墓と考えられる遺構である。SX04・SX08 下層・SX12・SX35・SX36 は方形プランを持ち、方形の座棺と思われる。これに対し SX02・SX03・SX17・SX19・SX21・SX28・SX31・SX43 は円形プランを持ち円形の座棺（早桶）と考えられる。SX02・SX03 の上部には一石五輪塔が散乱しており、SX21・SX31 には集石が認められ、更に SX21 には人骨が遺存していた。これら以外に SX20・SX39・SX09・SX16・SX42・SX18 は長方形を指向しており、なかでも SX09・SX20 では土坑底に腐植土が溜まることから木棺墓あるいは土坑墓の可能性が考えられる。また、長方形の土坑に近い規模の長楕円形土坑 SX23・SX24 についても土坑墓の可能性が考えられる。SX26 は円礫で「ヨ」形に配しており、墓域か上部構造が存在する基礎部分かと思われる。

遺物は、出土量は少ないが、上段～下段の主に斜面に堆積する黒褐色土・砂礫あるいは中段の暗褐砂礫及び下段の SX26 から土師器皿、瓦器椀・土師器鍋・羽釜片・丹波焼壺片など中世の土器が一定量出土している。これらの土器は 13 世紀～ 15 世紀代の時期にわたる。また、上段～下段にかけて唐津焼皿、肥前系染付広東碗・瀬戸焼染付碗など近世前期から近現代にかけての陶磁器が出土している。

出土土器から２区斜面が中世前期から近代にかけて長く使用されていたことが判明した。

今回検出できた中近世の墓跡は旧地形に大きく影響を受けていたと考えられ、東から、東尾根上に造られているＡ群、東尾根の西斜面に沿って造られるＢ群、東西尾根間の谷部に造られたＣ群、西尾根上に造られたＤ群にグルーピングすることが可能である。また、各群はそれぞれ、位置関係から小群に細分することが可能である。Ａ－１群等、枝番号を付け記述してゆく。

２．２区の遺構

Ａ群　（図版 13　写真図版 14）

北北東に延びる東尾根上に立地する火葬址を含む土葬・火葬址群である。上段に位置する SX01～SX07 及び SX07 周辺のピット群より構成されるＡ－１群と、中段に位置する SX13・SX14・SX21・SX37 より構成されるＡ－２群に分れる。

Ａ－１群

ＳＸ 01（図版 16　写真図版 14）　標高 109.20 m前後、尾根東斜面寄りに検出されている。東半部は消失し、形状・規模は判然としない。残存長約 49 cm・幅 50 cm・深さ 14 cmを測る。断面形状は丸底である。

長さ0.8 mの楕円形に近いプランであったと考えられる。上層には暗灰黄中砂・下層には黒褐細砂が堆積し、土坑底・壁は強く焼け、幅3 cm前後に被熱による赤化が見られる。土坑内からは火葬骨が少量出土している。人骨の同定はしていないが、火葬址（火葬土坑）と考えられる。時期は不明である。

ＳＸ02（図版16　写真図版14）　標高109.40 m前後、尾根上から検出されている。径80 cm～90 cm、深さ90 cmを測る円形の土坑である。径20 cm前後の自然石が落ち込む。また、土坑の背後を径1.6 m前後の三日月状にカットしている可能性がある。土坑上半では、上から灰黄褐細砂・黒褐細砂、黄褐極細砂が堆積する。土師器小皿片が出土しているが細片である。上部に一石五輪塔・地輪が散乱しており、土葬墓（早桶ヵ）と考えられるが、土坑底は丸い。一石五輪塔から中世末期～近世の土葬墓と考えられる。

ＳＸ03（図版16　写真図版14）　標高109.90 m前後、尾根上から検出されている。SX02の西隣に位置する。長軸70 cm、短軸60 cm、深さ15 cm前後を測る楕円形の土坑である。土坑底は凹凸をもつ。土坑内には褐粗砂混じりシルト質極細砂が堆積する。土坑内からは土師器細片のみで図示できるものは出土していないが、上部に一石五輪塔が倒れており、中世末期～近世の土葬墓の可能性が高い。

ＳＸ04・ＳＸ05・ＳＸ06（図版16　写真図版15）　標高108.50 m前後、尾根上から検出されている。SX02・SX03の北西に位置する。SX04～SX06は切り合う。SX06→SX04→SX05の順に掘られ、不整形な状況で検出されている。SX04は長辺1.1 m以上1.5 m以内、短辺1.1 m、深さ15 cm前後を測る方形あるいは長方形の土坑である。土坑底は平坦である。SX05は長軸1.30 m、短軸85 cm、深さ20 cmを測る菱形の土坑である。土坑底は浅いU字形を呈する。SX06は長軸2.2 m、短軸1.2 m以上、深さ20 cmを測る不定形の土坑である。土坑底は浅い皿形となっている。SX04はにぶい黄褐シルト質極細砂、SX05は黒褐シルト質極細砂、SX06は暗褐シルト質粗砂混じり極細砂が堆積する。SX05より古寛永通宝が出土した以外、遺物はない。形状からSX04～SX06は方形座棺あるいは長方形棺の墓坑の可能性がある。何れも時期は不明である。

ＳＸ07（図版16　写真図版15）　標高110.00 m前後、尾根上から検出されている。SX02・SX03の西側に位置する。長軸60 cm、短軸40 cm、深さ10 cm前後を測る泥滴形の土坑である。断面形状はU字形で、褐シルト質極細砂が堆積する。土坑内から図示できるものは出土しておらず、時期は不明である。周囲のピット群と同様の性格の可能性がある。

ピット群（図版13）　SX07周辺を中心にSX02周辺（標高では、110.50 m～109.50 m）にかけて11個のピットが検出されている。径30 cm～40 cm、深さは概ね10 cm程度、深いもので25 cmである。柱痕跡を確認したものがなく杭跡と思われる。

Ａ－２群

ＳＸ21（図版16　写真図版15）　標高104.50 m前後、尾根上にあたる地点から検出されている。中段の造成によって上部を削平されていると考えられる。径1.30 m、深さ95 cmを測る円形の土坑である。土坑底は平坦である。土坑上半では、上から褐シルト質極細砂～細砂・褐シルト質極細砂が堆積する。頭蓋骨など土葬人骨が出土しており、近世の座棺土葬墓（早桶）と考えられる。

ＳＸ13（図版16　写真図版15）　標高104.80 m前後、尾根上にあたる地点から検出されている。中段の造成によって上部を大幅に削平されている可能性がある。SX37と切り合い新しい。長軸80 cm、短軸70 cm、深さ13 cmを測る楕円形の土坑である。中央に一辺15 cm～30 cmの板石が集まっている。断面形状は浅い皿形である。土坑内には褐色細砂が堆積する。図示できる遺物はなく、時期・性格は不明である。

ＳＸ37（図版16）　標高104.80 m前後、尾根上にあたる地点から検出された。中段の造成によって上部を大幅に削平されている可能性がある。SX13と切り合い古い、長軸2.50 m、短軸1.20 m、深さ10 cm

を測る楕円形土坑である。断面形状は浅い皿形である。図示できる遺物はなく、時期・性格は不明である。

ＳＸ 14（図版 16　写真図版 15）　標高 105.10 m前後、尾根上にあたる地点から検出されている。中段の造成によって上部を大幅に削平されている可能性がある。SX37 の西隣りに位置する。長軸 1.40 m、短軸 1.00 m、深さ 10 ㎝を測る、長軸を等高線と平行にとる楕円形の土坑である。断面形状は浅い皿形である。土坑内から図示できるものは出土していない。時期・性格ともに不明である。

Ｂ群　（図版 13　写真図版 13）

北北東に延びる尾根西斜面に沿って造られる土葬墓群である。Ａ群の西隣りに位置する。土葬墓は、大きく上段に位置する SX08・SX10・SX38・SX39 及びこれらを囲むコの字状の造成より構成されるＢ－１群と、更に西側に位置する SX09・SX40 ～ SX43 より構成されるＢ－２群、中段にいたる斜面に単独で位置する SX12（Ｂ－３群）、中段に位置する墓のうち北東寄りにある SX15 ～ SX18 とやや西寄り北側する SX19・SX20 及び墓群を区画した可能性の高い SD02 から構成されるＢ－４群からなる。

Ｂ－１群

標高 108.50 m前後に東西方向に並ぶ土葬墓群である。斜面をコの字に掘削し、平場を造成している。東西 8.5 m・南北４m以上、南側では 1.5 mの高さを造り出していた。この区画内より風空輪（S13）が出土している。

ＳＸ 08（図版 16　写真図版 16）　標高 108.30 m前後、最も東側から検出された。２基の土坑が切り合う、もしくは当初の土坑の一部を再度掘削した状態で検出されている。新しい土坑（上層の土坑）は歪形を呈し、長軸約 76 ㎝・幅 62 ㎝・深さ 25 ㎝を測る。断面形状は丸みを帯びた箱形である。これに対し当初の土坑（下層の土坑）は不整な隅丸方形もしくは不整な円形であった可能性が高く、長軸約 1.20 m・幅 1.14 m・深さ 12 ㎝を測る。上層の土坑には黄褐細礫混じりシルト質極細砂・明黄褐色シルト質粗砂混じり極細砂が上・中層に堆積し、土坑底には、焼土の可能性があるにぶい黄褐色シルト質極細砂が堆積している。土坑内からは上下層ともに図示できる遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 10（図版 16　写真図版 16）　標高 108.40 m前後、SX08 の西隣りに、長軸を等高線に平行して位置する。２基の土坑が切り合った、あるいは当初の土坑の一部を再度掘削した状態で検出されている。新しい土坑（上層の土坑）は三角おむすび型を呈し、長軸約 68 ㎝・短軸 54 ㎝・深さ 50 ㎝を測る。断面形状は丸みを帯びた箱底である。これに対して当初の土坑（下層の土坑）は不整な隅丸長方形を呈していた可能性が高く、短辺の一方を上層の土坑によって損壊している。長辺 1.05 m以上 1.3 m以下、短辺約 60 ㎝・深さ６㎝を測る。上層の土坑は、上から灰黄褐細砂・黒褐細砂、黄褐極細砂が堆積する。土坑内から図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 38（図版 16）　標高 108.60 m前後、SX39 の東側に並んで位置する。長軸 70 ㎝、短軸 60 ㎝、深さ 18 ㎝前後を測る楕円形の土坑である。断面形状はＵ字形である。土坑内から遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 39（図版 16）　標高 108.60 m前後、長軸を等高線に直交し、SX38 の西側に並んで位置する。長辺 1.30 m～ 1.65 m、短辺 1.08 m、深さ 20 ㎝前後を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面形状は浅いＵ字形である。形状から土坑墓と考えられるが、図示できるものは出土していない。

Ｂ－２群

Ｂ－１群の西側に位置する。標高 108.50 m～ 111.0 mに東西方向に並ぶ長方形の土葬墓と円形の土坑から構成される。

ＳＸ 09（図版 17　写真図版 16）　標高 109.0 m前後、長軸を等高線に平行し、SX40 の南側に位置する。長辺 1.40 m～ 1.50 m、短辺 1.00 m～ 1.10 m、深さ 45 ㎝前後を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面形状は箱形である。オリーブ褐シルト質細砂～極細砂を主に埋土とし、土坑底面には腐植土が残る。図示できるものは出土せず時期は不明である。土坑底に腐植土があり、木棺墓と考えられる。

ＳＸ 40（図版 17）　標高 108.50 m前後、長軸を等高線に直交し、SX40 の北側に位置する。長軸 1.00 m、短軸 64 ㎝、深さ 10 ㎝前後を測る涙滴形の土坑である。断面形状は浅いＵ字形である。土坑内から図示できるものは出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 41（図版 17）　標高 108.50 m前後、長軸を等高線に平行し、SX40 の西側に位置する。長軸 70 ㎝、短軸 54 ㎝、深さ 48 ㎝前後を測る卵形の土坑である。断面形状はＵ字形である。土坑内から図示できるものは出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 42（図版 17）　標高 109.30 m前後、長軸を等高線に平行し、SX09 の西側に位置する。長辺 1.20 m～ 1.35 m、短辺 80 ㎝～ 85 ㎝を測る不整な隅丸長方形の土坑である。土坑底は傾斜し、約 10 ㎝の深さで検出されるが、斜面上部から底面までは約 50 ㎝を測る。断面形状は浅い皿形である。遺物は出土していない。時期は不明であるが、土坑墓と考えられる。

ＳＸ 43（図版 17）　標高 110.40 m前後、長軸を等高線に平行し、SX42 の西側に位置する。長軸 1.00 m、短軸 85 ㎝を測る不整な俵形の土坑である。土坑の南肩からの深さは約 30 ㎝を測るが、北肩は傾斜に沿って流れており、残りは良くない。底面は平坦である。図示できるものは出土していない。時期は不明であるが座棺土葬墓と考えられる。

Ｂ－３群

ＳＸ 12（図版 17　写真図版 16）　中段にいたる斜面に単独で存在する。標高 107.0 m前後、長軸を等高線に直交する。長軸 1.60 m、短軸 1.48 m、深さ 20 ㎝前後を測る隅丸方形もしくは不整な楕円形の土坑である。断面形状は浅い皿形で、底面は斜面に合わせ傾く。オリーブ褐色細砂を埋土とする。土坑内からは土師器甕片 94 が出土しているが、形状からは座棺土葬墓の可能性がある。

Ｂ－４群

Ｂ－３群の北側に位置する。標高 105.70 m～ 105.20 mにかけて東西方向に並ぶ長方形・方形の土葬墓と円形の土坑から構成される。

ＳＸ 15（図版 17　写真図版 16）　標高 105.30 m前後、SX16 の東側に位置する長軸 70 ㎝、短軸 54 ㎝、深さ 6 ㎝前後を測る三角おむすび形の土坑である。断面形状は浅い皿形である。図示できる遺物はない。

ＳＸ 16（図版 17　写真図版 16）　標高 105.30 m前後、長軸を等高線に直行し、SX40 の西側に位置する。長軸 1.20 m、短軸 1.00 m、深さ 22 ㎝前後を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面形状は船底形である。土坑底には黒褐色極細砂が堆積する。上層には暗灰黄細砂・暗褐細砂・オリーブ褐細砂が堆積する。図示できるものは出土していないが、埋土から土坑墓と考えられる。

ＳＸ 17（図版 17　写真図版 16）　標高 105.25 m前後、SX15 の北側に位置する。長軸 68 ㎝、短軸 62 ㎝、深さ 10 ㎝前後を測る楕円形の土坑である。断面形状は浅い皿形である。図示できる遺物はない。

ＳＸ 18（図版 17　写真図版 16）　標高 105.50 m前後、長軸を等高線に平行し、SX44 の西側に位置する。長軸 1.30 m、短軸 80 ㎝、深さ 8 ㎝前後を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面形状は浅い箱形で底面は平坦である。土坑底には暗褐細砂が堆積する。近世の道具瓦以外遺物は出土していないが、形状から土坑墓と考えられる。

ＳＸ 44（図版 17） 標高 105.45 m前後、SX18 の北西隅に位置する。長軸 40 ㎝、短軸 38 ㎝、深さ 12 ㎝前後を測る不整円形の土坑である。断面形状はＵ字形である。図示できるものは出土していない。

ＳＸ 19（図版 17　写真図版 16） 標高 105.50 m前後、SX20 の東側に並んで位置する。長軸 1.22 m、短軸 1.15 mを測るかまぼこ形の平面形をもつ土坑である。土坑内には更に長軸 86 ㎝、短軸 84 ㎝を測る洋ナシ形の窪みがあり、全体の深さは 16 ㎝前後を測る。土坑上層には黄褐細砂が堆積し、中央の洋ナシ形の窪みにはオリーブ褐シルト質極細砂が堆積する。図示できるものは出土していないが、形状と規模から座棺墓の可能性がある。

ＳＸ 20（図版 17　写真図版 17） 標高 105.50 m前後、SX19 の西側に並んで位置する。長辺 1.35 m、短辺 1.08 m、深さ 22 ㎝前後を測る不整な隅丸長方形の土坑である。断面形状は壁が垂直に落ちる箱形である。土坑の上層には黄褐細砂・暗灰黄細砂・オリーブ褐細砂が堆積する。土坑底面には黒褐細砂（腐植土）が堆積する。図示できる遺物はないが、土坑底に腐植土があり、土坑墓もしくは木棺墓と考えられる。

ＳＤ 02（図版 17　写真図版 17） SX20 の背後から西側に、東西方向（Ｎ 85° Ｗ）に走る。検出全長 6.35 m、幅約 35 ㎝～ 60 ㎝・深さ 8 ㎝、浅いＵ字状の断面形状をとる。極細礫を含む黄褐シルト質極細砂を埋土とする。図示できるものは出土していない。近世の墓地の区画溝と考えられる。

Ｃ群

北北東に延びる東西尾根間の谷底部分に造られる土葬墓群である。Ｄ群の東側に位置するが、尾根上のＤ群とは離れている。土葬墓は、大きく中段に位置する SX22・SX23・SX24・SX25・SX45 及びこれらを囲むコの字状の掘り込みより構成されるＣ－１群と、下段にいたる斜面に位置する SX11・SX29 から構成されるＣ－２群からなる。

また、Ｃ群に近接する遺構として、調査区南側石組み遺構がある。当初、この遺構（墓）は本線用地の外側に位置していたため調査対象としなかったが、平成 25 年度の調査途中に当地点に付帯工事の計画が生じ、急遽調査対象となった遺構である。ＳＸ 27・ＳＸ 28 と共に節の後半で述べる事とする。

Ｃ－１群

標高 106.4 mから 106.1 mに東西方向に並ぶ土葬墓群である。このうち、SX23・SX45 の周囲にはコの字に斜面を掘削し、区画を形成した痕跡が確認されている。東西約 3 m・南北 1 m以上、南側では 10 ㎝前後の落差をもつ。

また、SX22 についても東西長 1.5 m以上・南北 0.8 m以上の掘り込みがあり、更に西隣にも同規模の掘り込みが確認されている。

SD01 は中段平坦面の山側を画する溝である。掘削時期は不明である。墓群とあまり近接せず、近代の造成に伴う可能性が高い。平坦面の傾斜変換点に沿って SX24 の背後から西側（Ｎ56° Ｗ）に約 17 m走り、西端において約 2 m北側へ屈曲する。幅約 60 ㎝・深さ 10 ㎝内外の浅いＵ字形を呈する。

ＳＸ 23（図版 18　写真図版 17） 標高 106.20 m前後、長軸を等高線に平行し、SX45 の西側に位置する。長軸 1.30 m、短軸 68 ㎝、深さ 6 ㎝前後を測る不整な長楕円形の土坑である。断面形状は浅い皿形で底面は平坦である。土坑底には黄褐細砂～極細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していないが、形状から土坑墓と考えられる。SX45 と共にコの字形の掘り込みをもつ。

ＳＸ 45（図版 18） 標高 106.20 m前後、SX23 の東隅に位置する。長軸 62 ㎝、短軸 56 ㎝、深さ 20 ㎝前後を測る不整円形の土坑である。断面形状はＵ字形である。図示できる遺物は出土していない。SX23 と共にコの字形の掘り込みをもつ。

ＳＸ 22（図版 18　写真図版 17）　標高 106.10 m前後、SX23の北側に位置する。背面に掘り込みをもつ、長軸 65 ㎝、短軸 46 ㎝、深さ 8 ㎝前後を測る三角おむすび形、断面形状は浅い皿形の土坑である。図示できる遺物は出土していない。

ＳＸ 24（図版 18）　標高 106.40 m前後、長軸を等高線に平行し、SX23の西側に位置する。長軸 1.50 m、短軸 0.80 m、深さ 31 ㎝前後を測る不整な長楕円形の土坑である。断面形状はU字形で、一部中位に段をもち、２段墓坑を持っていたと考えられる。図示できる遺物はない。形状から土坑墓と考えられる。

ＳＸ 25（図版 18　写真図版 17）　標高 106.50 m前後、長軸を等高線に平行し、SX24の西側に位置する。長軸 1.22 m、短軸 95 ㎝、深さ 8 ㎝を測る楕円形の土坑である。断面形状は浅い皿形である。図示できる遺物は出土していない。時期・性格は不明である。

Ｃ－２群

中段から下段にいたる標高 105.2 mから 102.5 mの斜面に位置する遺構群である。SX11・SX29、後述する石組み遺構 SX27 から構成される。火葬址と考えられる SX11 以外について性格は不詳である。

ＳＸ 11（図版 18　写真図版 17）　SX29の南西側、標高 105.20 m前後に位置する。地山面より上層に営まれた焼土坑である。土坑の斜面下半部は流れて消失しており、残存する規模は長軸 1.16 m、短軸 90 ㎝、深さ 10 ㎝を測り、形状は不整な台形状を呈している。断面形状は浅い皿形であるが斜面下端は屑がない。土坑下半には炭屑が堆積し、一部焼土が残っている。土師器皿・瓦器椀片が出土しているが図示はできない。時期は不明であるが、形状から火葬址の可能性がある。

ＳＸ 29（図版 17）　SX11の北東側、標高 104.5 m～ 103.5 m前後に位置する。東西長軸 1.94 m、南北短軸 1.42 m、深さは北端で約 20 ㎝を測り、形状は不整な卵形である。土坑底は斜面に沿って傾斜し、断面形状はＶ字である。図示できる遺物はなく、時期・性格は明確ではない。倒木跡の可能性がある。

Ｄ群

北北東に延びる西尾根上に立地する土葬墓・火葬址群である。Ａ～Ｃ群とは大きく距離を取って位置する。上位に位置する SX32 ～ SX36（Ｄ－１群）と、中位に位置し西の沢筋に向って造られた石組み遺構 SX26（Ｄ－２群）、下位にある SX30・SX31・SX28（Ｄ－３群）に分けることができる。

Ｄ－１群

西尾根上の標高 118.4 mから 111.0 mにかけて直線的に SX35 ～ SX32 が位置し、尾根上より少し西斜面寄りに SX36 が営まれている。

ＳＸ 36（図版 18）　標高 116.0 m前後、尾根上より少し西斜面寄りに位置する。長辺 1.25 m、短辺 1.05 m、深さ 45 ㎝を測る隅丸方形の土坑である。断面形状はやや丸みを帯びた箱形である。図示できる遺物は出土していない。時期は不明であるが、形状から方形木棺の土葬墓の可能性が考えられる。

ＳＸ 35（図版 18）　標高 118.50 m前後、長軸を等高線に平行し、尾根の最上位に位置する。長軸 1.40 m、短軸 1.20 m、深さ 32 ㎝を測る不整な隅丸台形の土坑である。断面形状は箱形である。図示できるものは出土していない。時期は不明であるが、形状から SX36 と同じ方形木棺の土葬墓の可能性が考えられる。

ＳＸ 34（図版 18　写真図版 17）　標高 116.30 m前後、SX35 の北側に位置する。山側に円弧状の掘り込みが検出されている。斜面側については流れて消失している。残存する規模は東西 1.50 m、南北 60 ㎝前後、深さ 30 ㎝を測る。断面形状は皿形であるが斜面下端は屑がなく判然としない。図示できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。円形の土葬墓の可能性も考えられるが、被熱の可能性が報告されており、火葬址の可能性がある。南端の深さ約 50 ㎝の楕円形ピットの性格については不明である。

ＳＸ 33（図版 18　写真図版 17）　SX34 の北側、標高 115.0 m～ 114.5 m前後に位置する。東西長軸 1.60 m、南北短軸 1.15 m、深さは南端で約 80 cmを測り、形状は不整な米粒形である。土坑底は平坦で、断面形状は箱形である。北肩は流れて大半が消失している。本土坑の埋土から確認調査時に土製鳩笛 103 が出土している。近世の土葬墓と考えられる。

ＳＸ 32（図版 19）　標高 111.00 m前後に位置する。長軸 1.40 m、短軸 1.26 m、深さ 60 cmを測る不整な隅丸台形の土坑である。断面形状は箱形である。北肩は流れて大半が消失し 15 cmほどの深さとなっている。図示できる遺物は出土していない。時期は不明であるが、SX35・SX36 と同じく方形木棺の土葬墓の可能性が考えられる

Ｄ－２群

ＳＸ 26（図版 19　写真図版 18）　標高 106.8 m前後、中位に位置する。斜面部分を開削し、東西長約 9 m、南北幅約 3.5 mの矩形の平場を造りだしている。SX26 はその平場の中央に位置し、西の沢筋に向って造られた石組み遺構である。東西長 2.90 m・残存長南北 1.70 m・地表高 20 cm前後の規模を測り、径 20 cm前後の亜角礫を並べた石組みである。内側に 3 条の石列及び集石が認められる。また、南斜面際に東西 1.50 mの石列が存在し、両者の間が溝状になっていたと考えられる。被覆土からは図示した瓦質擂鉢 95・丹波焼擂鉢 96 に加え、摩滅した多数の土師器羽釜（兵庫津遺跡編年羽釜形Ⅰ類、13 世紀後半）、須恵器甕、16 世紀後半の丹波焼甕、近代陶器などが出土している。これらの多くは上方から流入したものと考えられ、SX26 自体の時期・性格ともに不明である。本遺構は近世墓の周囲を区画する石組みとも考えられるが、具体的な埋葬施設は検出できなかった。

Ｄ－３群

Ｄ群が造営される西尾根の先端に位置する。

ＳＸ 28（図版 19　写真図版 18）　標高 103.00 m前後、SX31 の東側に位置する。土坑は新旧 2 基の土坑より構成されている。SX28a は長軸 94 cm・短軸 76 cm、深さ 50 cm前後を測る俵形の集石土坑である。断面形状は箱形である。土坑内には径 10 cm～ 20 cm前後の亜角礫が多量の陶磁器とともに投入されている。SX28b が埋没後、その窪みの一部をゴミ穴として掘り込んだものと考えられる。SX28b は径 1.20 m・深さ 1.30 mを測る円形の土坑である。筒形に掘り込まれ、土坑底は平坦である。SX28b は、下半は褐灰細砂～小礫によって埋まり、上半は黄褐中砂から粗砂によって埋まっている。SX28a からは多量の近代陶磁器が出土しており、SX28b 上層からも多量の近代陶磁器や土師器羽釜片が出土している。SX28a は 20 世紀中頃に埋められたと考えられ、SX28b は座棺（早桶）土葬墓として幾分先行する。形状から推して近世から近代の墓の可能性が高い。

ＳＸ 30（図版 19　写真図版 17）　標高 102.40 m前後、SX31 の北隣に位置する。土坑内に径 40 cm前後の自然石が座る。長軸 65 cm、短軸 45 cm、不整な楕円形の土坑である。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 31（図版 19　写真図版 17・18）　標高 103.10 m前後、SX28 の東側、SX30 の南隣に位置する。土坑上面に径 20 cm前後の自然石を 15 cm前後の高さに盛り上げている。長軸 1.0 m、短軸 85 cm、深さ 1.10 m前後を測る不整円形の土坑である。断面形状は深いU字形である。丹波焼甕片 100 が出土している。掘方の形状からは近世の座棺（早桶）土葬墓と考えられる。

その他の石組み遺構（図版 19　写真図版 18）

ＳＸ 27（図版 19　写真図版 18）　標高 102.50 m前後、SX11 の北、SX29 の西側に位置する。東西に約

2ｍ前後延びる石組み（石列）遺構である。径20㎝前後の亜角礫を使用している。土師器羽釜97・瓦器椀98が出土している。性格は不明である。下段際にあり斜面の土留めに伴う遺構の可能性がある。

ＳＸ46（図版19　写真図版18）　SX26より更に下方、標高102.80ｍ前後に位置する石組み遺構である。北東方向に、径25㎝～50㎝の自然石を延長約2ｍ前後に並べている。出土遺物はなく、時期・性格は不明である。沢筋に対する護岸の可能性がある。

調査区南側石組み遺構（図版19　写真図版18）　標高112ｍ前後に位置する石組み墓である。斜面谷側に石列を組み、平坦面を造り出し、背後のスペースに一石五輪塔・五輪塔を据えていたと考えられる。一石五輪塔3基（Ｓ5・Ｓ9・Ｓ10）、五輪塔（Ｓ14・Ｓ15・Ｓ16・Ｓ17）の残欠が散乱している。前面の石列は全長約1.80ｍ、一辺20㎝～30㎝の自然石を並べている。奥行は1ｍ程度である。石造物以外の出土遺物はない。本石組みは近現代まで供養されていたが、近世以降の石造物は現存していない。森田千鶴がまとめた『猪名川町の墓制』（森田1985）には、当地に『室町期の集墳跡無縁墓』があると記録されており、この石組みが該当する可能性がある。

３．３区南半部の概要と堆積層序　（図版14・15）

３区の地形は南西側にある尾根の北東傾急斜面と、急斜面と沢筋の間に形成された扇状地からなっている。急傾斜部分は近代の植林などの造成によって改変され、大きく中央に段差が造られている。中世前期の屋敷地区画溝は更に下位にあり、区画溝が通るあたりまでが、旧地形の山裾であったと考えられる。それ以下の部分は比較的緩斜面（扇状地）となっており、中世前期の屋敷地内となる。

３区南半（斜面）の堆積層序は、現表土の下に2～3層に分かれる黄褐色礫混じりシルト質極細砂があり斜面上部から供給される流土である。遺構面はその直下より出現しＥ群の遺構が検出されている。これに対して、3区北半（扇状地）の堆積層序は、現表土の下に黄褐色礫混じりシルトがあり、これは南半と同じく斜面上部から供給される流土である。その下には土壌層（茶褐色シルト混じり礫）が堆積する。この層は北側の1－Ⅱ区のオリーブ褐色土（中世前期の遺物包含層）に対応する。遺構面はその直下の黄褐色砂礫面上である。遺構はピットが検出されている。

３区の遺構は、溝SD01・SD02・SD03・ピット以外は2区と同様に土坑もしくは焼土坑から構成されている。このうち北半にある溝SD02・SD03については1－Ⅱ区とともに中世屋敷地の遺構としてすでに述べた。ここでは主に南半の土坑もしくは焼土坑について述べる。

土坑・焼土坑は、2区では形状、人骨・石造品の存在から、その多くが中近世の墓・火葬址と推定できた。対して3区では人骨・石造品が出土しておらず、積極的に墓・火葬址と断定する根拠はない、しかし、沢筋を挟みながらもほぼ同様の立地に同様の形状の土坑・焼土坑が複数のグループに分かれて検出されていることから、調査時から中近世墓地遺構と判断され、その可能性がある。本稿では、3区南半部の遺構群を便宜的に2区のＡ～Ｄ群に対してＥ群として記述してゆく。3区南半の遺構群の性格付けについてはひとまず保留することをお許し願いたい。

Ｅ群

Ｅ群の遺構群は尾根北東向き斜面の上位・下位・扇状地に分かれて分布しており、計21基の土坑が検出された。これらの土坑は、更に斜面上位にあるSX02～SX05・SX14と下位にあるSX01・SX06～SX13・SX15・SX16、更に下方の緩斜面（扇状地）にあるSX17～SX19に分けることができる。

更に各土坑群は小さなまとまりごとにグルーピングが可能である。斜面上部にあるSX02～SX05・SX14をＥ－1群、下部にあるSX06・SX07をＥ－2群、SX01・SX08をＥ－3群、SX13・SX15・

SX16をE－4群、SX09～SX12をE－5群、緩斜面にあるSX17～SX19・SX22をE－6群とする。

E－1群

3区の最も上位にある標高109.50m～107.50m前後に位置するSX02～SX05・SX14をE－1群とした。東向き斜面の最上部に位置し、他にピット、SD01がある。

SX03・SX14（図版20　写真図版19）　斜面を掘り込み、東に開くSX03の土坑底よりSX14が検出されている。

SX03は大型の土坑として検出されているが、元々は、SX14を含めた複数の土坑の切り合った姿であったと推測される。即ち、SX14とその西側にSX14とほぼ同規模の土坑が切り合って存在しており、加えてSX14の東側には炭化物を底面にもつ土坑が存在していた様である。これらの土坑はSX14の下半部を残して、崩落・埋没したと考えられ、大きな土坑SX03と円形土坑SX14として検出されている。

SX14は径1.35m～1.40mを測る不整な円形もしくは隅丸方形の土坑と考えられる。深さはSX03の肩から約70cmを測る。SX14の西側には径1.6m・深さ1m程の円形の土坑が存在したと考えられる。また、SX14の西側のSX03底からは炭化物がまとまって検出されており、幅1.2m以上の土坑が存在したと考えられる。

SX03は崩落した土坑全体の規模を示すもので、全長3.1m以上・幅約2m。深さ1m以上の不定形な土坑として検出されている。暗灰黄極細砂と黒褐極細砂～細礫が互層に堆積しており、これらは南西斜面側（山側）から流れ込んだ流土である。図示できる遺物は出土していない。

両者の性格は不明であるが、SX14は筒形に掘削されており、円形もしくは方形の土坑墓（もしくは座棺墓）であった可能性がある。加えて炭化物の存在から火葬墓が存在した可能性が指摘されている。

SX04（図版20　写真図版19）　標高108.80m前後、SX14の南側に位置する。長辺78cm・短辺60cm・深さ約15cmの不整な隅丸方形土坑である。底部は丸底である。土坑上半には暗褐細砂～中砂、下半には黒褐細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

SX05（図版20）　標高108.10m前後、SX04の南東側に位置する。長軸1.30m・幅70cm前後・深さ約15cm前後の不整な勾玉形の落ち込みである。底部は皿状で、地形の傾斜に沿って傾く。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

SX02（図版20）　標高109.0m前後、SX03の北側に位置する。SX21と切り合い新しい。長軸1.60m・幅84cm前後・深さ約85cm前後の不整な楕円形の土坑である。土坑底は地形に沿って傾斜を見せる。断面形状は箱形である。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

SX21（図版20　写真図版18）　標高109.0m前後、SX03の北側に位置する。SX02と切り合い古い。長軸1.15m・幅65cm以上・深さ約5cm前後の不整な楕円形の土坑である。断面形状は浅い皿形である。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ピット群（図版14）　SX04・SX05の周辺を中心に標高では、109.00m～107.50mにかけて、5個のピットが検出されている。径30cm～40cm、深さは概ね10cm程度、深いもので15cmである。柱痕跡を確認したものがなく杭と思われる。

SD01（図版20　写真図版19）　SX03・SX08の間を南北方向（N9°W）に走る。検出全長3.65m、最大幅約1.0m・斜面上部からの深さ70cm、浅いU字状の断面形状をとる。暗灰黄細砂～中砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。本溝はSX03の中層と同一層で埋没していることから、同時期に開いていた可能性が高く、性格は沢筋から尾根上へと続く山道の痕跡（凹部）である可能性が高い。

E－2群

標高106.6ｍ前後、沢筋に近接するSX06・SX07をE－2群とする。

ＳＸ06（図版20） 標高106.6ｍ前後、SX07と切り合い古い。径1.25ｍ深さ約5㎝前後の円形の土坑である。断面形状は浅い皿形である。焼土を伴っている。図示できる遺物は出土していない。時期・性格は不明であるが、焼土の存在から火葬址の可能性がある。

ＳＸ07（図版20　写真図版19） 標高106.6ｍ前後、SX06と切り合い新しい。長軸1.30ｍ・短軸1.10ｍ・深さ約5㎝前後の楕円形の土坑である。断面形状は浅い皿形である。土坑の縁部分は幅5㎝ほど被熱により赤変する。土坑の上半にはオリーブ褐細砂が堆積し、土坑底には炭層が全面に広がる。土師器細片以外遺物は出土していない。時期・性格は不明であるが、焼けており、火葬址の可能性がある。

E－3群

標高107.0ｍ前後に位置するSX08・SX01をE－3群とする。

ＳＸ08（図版20　写真図版19） 標高107.0ｍ前後、SD01の北側に位置する。南北長1.40ｍ・東西幅1.20ｍ以上・深さ約20㎝前後の不整な円形もしくは多角形の土坑である。断面形状は浅い皿形である。土坑には黄灰・黄褐色を中心としたシルト質極細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ01（図版21　写真図版20） 標高107.0ｍ前後、SX08の北側に位置する。径45㎝・深さ約5㎝前後の円形の土坑である。断面形状は極く浅い皿形である。土坑にはオリーブ褐粗砂混じり細砂～極細砂が堆積する。上面には焼土を含む。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明であるが、炉あるいは火葬址の可能性がある。

E－4群

標高106.5ｍ前後に位置する。SX13・SX15・SX16をE－4群とする。

ＳＸ13（図版21　写真図版20） 標高106.70ｍ前後、SX16の西隣に位置する。SX15と切り合い新しい。径75㎝～78㎝・深さ15㎝前後の不整な円形の土坑である。断面形状は浅い箱形で、底面は平坦である。最上層に15㎝×25㎝の板石が水平に入っている。土坑内には黄褐極細砂・細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明であるが形状から円形土葬墓（早稲）の可能性がある。

ＳＸ15（図版21　写真図版20） 標高106.70ｍ前後、SX16の西隣に位置する。SX13と切り合い古い。長軸1.40ｍ・短軸1.20ｍ前後、深さ25㎝前後の不整な卵形の土坑である。断面形状はU字形で、底面は丸みを帯びる。土坑上半に黒褐極細砂、下半にオリーブ褐極細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ16（図版21　写真図版20） 標高106.70ｍ前後、SX15の東隣に位置する。確認調査（2015155）によって検出した焼土坑である。トレンチによって土坑の東肩を若干損壊している。現状での規模は、長軸1.12ｍ・短軸1.00ｍ前後、深さ23㎝前後の不整な宝珠形の土坑である。断面形状はU字形で、底面は丸みを帯びる。土坑上半にオリーブ褐シルト質極細砂、下半に黄褐粗砂混じりシルト質極細砂が堆積する。また、土坑底から土坑壁に沿って薄く被熱（赤変）し、炭を含む。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

E－5群

E－4群の北西側、約3ｍ離れ標高107.3ｍ～105.5ｍにかけて東西（上下）方向に並ぶSX09～SX12をE－5群とする。

ＳＸ 09（図版 21　写真図版 20）　標高 107.30 m前後、SX10の南側に位置する。径 75 cm前後、深さ 17 cm前後のおむすび形に近い不整な円形の土坑である。断面形状はU字形で、底面は丸みを帯びる。土坑上半に灰黄褐細砂、下半に黒褐細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 10（図版 21　写真図版 20）　標高 107.20 m前後、SX09の北側に位置する。谷側の肩は流れ残りが悪い。径 50 cm前後、深さ 17 cm前後のおむすび形に近い不整な円形の土坑である。断面形状はU字形で、底面は丸みを帯びる。土坑内には褐細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 11（図版 21　写真図版 20）　標高 106.50 m前後、SX109の東側、SX12の西側の傾斜面に位置する。谷側が流れ全体に残りが悪く、形状・規模ともに不明な土坑である。残存する形状は不整な長楕円形、断面形は浅い皿状である。残存する規模は長軸 94 cm・短軸 43 cm前後、深さは山側から土坑底まで約 30 cm前後を測る。土坑内に褐シルト質細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 12（図版 21　写真図版 20）　標高 105.70 m前後、SX11の東側、傾斜面に位置する。長軸約 90 cm・短軸約 75 cm・深さ 12 cmを測る、おむすび形に近い不整な楕円形の土坑である。断面形状は浅いU字形で、底面は丸みを帯びる。土坑内に黄褐小礫が堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

Ｅ－６群

標高 104.4 m～ 103.5 mにかけて、緩斜面にあるSX17 ～ SX19・SX22をＥ－６群とする。これらの土坑は概ね炭が堆積する。また、SX18・SX22は被熱している。

ＳＸ 17（図版 21　写真図版 20）　標高 103.70 m前後、SX11の東側、傾斜面に位置する。径約 50 cm・深さ 10 cmを測る、不整な円形の土坑である。断面形状は浅いU字形、底面は丸みを帯びる。土坑内に炭化物を含む黒褐細砂が堆積するが被熱は認められない。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 18（図版 21　写真図版 20）　標高 103.80 m前後、SX17の東側、SX22の南側に並行して位置する。長軸約 2.94 m・短軸約 1.06 m・深さ 14 cmを測る、不整な長楕円形の焼土坑である。断面形状は皿形で、底面は平坦である。土坑底は北壁を中心に若干被熱痕（赤変）が認められる。土坑内には炭（黒中～細砂）が多く堆積する。肥前系染付蓋・瓦質羽釜鍔片が出土している。染付は 18 世紀代と考えられる。

ＳＸ 19（図版 21　写真図版 20）　標高 107. 30 m前後、SX18の南側、傾斜変換点に位置する。長軸約 1.05 m・短軸約 1.0 m・深さ 15 cmを測る、不整な洋梨形の土坑である。断面形状は浅いU字形で、底面は丸みを帯びる。土坑下半を中心に炭（黒中～細砂）が多く堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

ＳＸ 22（図版 14）　標高 103.5 m前後、SX18の北側に、並行して位置する。確認調査（2012155）において検出した（旧 SX01）。全長 1.70 m・幅 95 cmの不整な長方形の焼土坑である。土坑壁に沿って被熱した赤色と炭層が認められる。遺物は出土していないが、位置関係からSX18と同時期と考えられる。本土坑は確認調査時には上面検出にとどめ、本発掘調査時に消失していたため詳細は不明である。極浅い残存状況だったと考えられる。

第3節　遺　物

1．土　器（図版22～25　写真図版22～26）

1－Ⅰ区出土土器（図版22～24　写真図版22～24）

1・2はSB2002の柱穴から出土した。1はP2027から出土した瓦器小椀である。浅く内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内面には横方向のヘラミガキが残存する。外面体部にはユビオサエを施す。2はP2029（SK2017）より出土した土師器小皿である。ユビオサエ整形を行い、強いヨコナデによって口縁部は外反し端部は肥厚する。内面は緩やかに内湾する。底部外面は板目状圧痕をナデ消している。

3は柱穴P2028より出土した瓦器椀底部である。断面三角形の高台を貼り付けている。

4はSK1001に埋め置かれた丹波焼甕である。体部中位を欠落しているため、正確な器高は不明である。口縁部は短く外反し、水平に拡張する。15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

5・6はSK1002から出土した。5は土師器鍋である。口縁部はやや開き、端部は外方へつまみ出される。口縁部と胴径をほぼ同じくし、胴径は下半にある。体部外面には平行タタキを施し、内面はヨコハケの後ナデ調整を施す。13世紀代である。6は土錘である。一端にユビオサエ痕が顕著である。

7～12はSD1004から出土した。7～10はSD1004に投入された集石間から出土している。7は土師器小皿である。ユビオサエ整形を行い内面及び外面口縁部はナデ調整を施す。比較的堅緻に焼成されている。8は菲筒底の美濃灰釉陶器皿である。内面・断面に煤が良く付着している。16世紀代である。9は瀬戸・美濃系天目椀である。口縁端部は短く屈曲する。内面口縁部下に浅い段が見られる。10は須佐唐津と考えられる無釉陶器擂鉢である。ボウル状の底部・体部に強いロクロナデを施した口縁部が付く。端部は内側に巻き込み、頂部は丸味を帯びる。体部外面には粘土紐の継ぎ目痕が残る。内面にはヘラ描きによる1本引きの擂り目が施される。17世紀前半と考えられる。11は信楽焼擂鉢の口縁部下の破片と考えられる。1単位8本以上の櫛引の擂り目を施す。胎土に長石を多く含む。16世紀代である。12は無釉陶器鍋である。口縁部は短く立ち上がり、丸く肥厚し外面に張り出す。頸部下外面には横方向のタタキを施し、内面には強いユビオサエ痕が残る。非常に硬質に焼成される。16世紀前半もしくはそれ以降の丹波焼と考えられる。

以下は、盛土前面の石積み（石列遺構）・盛土（整地土）・中世包含層（黒褐色土）出土土器をまとめ、器種ごとに図示した。

13～19は土師器小皿である。13は黄褐色盛土中から出土した土師器小皿である。口縁部は短く外方へ開き端部は丸く収める。ユビオサエ整形を行い、口縁部はヨコナデ、底部内外面はナデ調整を施す。14は黒褐色土中から出土した土師器小皿である。厚目の底部から短く外方に開く口縁部をもつ。底部と口縁部の境は明瞭である。15は黒褐色土中から出土した土師器小皿である。平坦な底部に外反する短い口縁部をもつ。底部はユビオサエによって整形し、内外面ともにナデ調整。口縁部は強いヨコナデによって外反し、底部外面の境に稜をもつ。16は焼土坑SK1002の下層から出土している土師器小皿である。SK1002に伴うか否かは判然としない。平坦な底部に外反する短い口縁部をもつ。底部はユビオサエによって整形し、内外面ともにナデ調整を施す。やや内湾気味の短い口縁部をヨコナデで造り出し、底部外面の境に稜をもつ。17は黄褐色整地土から出土している土師器小皿である。平坦な底部に外反する短い口縁部をもつ。底部はユビオサエによって整形し、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部はやや内湾

気味の短い口縁部をヨコナデで造り出し、底部外面の境に稜をもつ。16と類似するが胎土は粗い。18は黄褐色整地土（層下半）から出土した手捏ね成形の京都系土師器小皿である。丸みを帯びた体部から強いヨコナデによって口縁部は外反する。口縁端部は尖る。19は黄褐色整地土から出土した手捏ね成形の京都系土師器小皿である。凹凸のある平底から丸みを帯びて体部は立ち上がり、強いヨコナデによって口縁部は外反する。内面は体部と底部の境が大きく窪み、円圏が出来ている。16世紀代と考えられる。

20は土師器羽釜口縁部である。機械掘削時に出土した。やや内傾気味に立ち上がり、口縁端部は内傾した面をもつ。外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整を施す。兵庫津遺跡編年羽釜ＡⅠ類、13世紀後半代と考えられる（岡田ほか2004）。

21～25は土師器鍋（甕形の土製煮炊具）である。21は黄褐色整地土（層上半）から出土した土師器鍋である。口縁部はやや開き、端部は外方へつまみ出される。端部上面は強いヨコナデによって凹む。体部外面にはタタキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施す。兵庫津遺跡編年甕形Ⅰ類、13世紀後半代と考えられる。22は黒褐色土中から出土した土師器鍋である。21と同じ形態をとるが、法量は若干大きい。23は黒褐色土中から出土した土師器鍋である。外面は斜め右上がりのタタキ調整を施し、口縁部にも若干、タタキ痕跡が残る。21と同形態である。24は黒褐色土中から出土した土師器鍋である。外面は平行タタキ調整を施す。21と同形態をとるが、法量は大きい。25は黒褐色土中から出土した土師器鍋である。口縁部は直立し、端部は小さく外反する。体部外面は平行タタキ調整を施す。

26は黒褐色土中から出土した土錘である。

27～31は瓦器椀を挙げた。概ね中世包含層から出土している。

27は黄褐色土上から出土した瓦器椀である。内外面すべてに炭素が吸着する。焼成はやや甘い。口径に対し、器高はやや低く1/3を切る器形である。底部内面は丸い。底部から口縁部へ内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。底部には断面三角形の輪高台が貼付される。内面見込みには平行文の暗文が施され、体部下半から口縁部端にかけて横方向（あるいは円圏状ヵ）に暗文がなされている。内面口縁部端から外面口縁部はヨコナデが施される。体部外面はユビオサエ後ナデ調整を施している。橋本編年和泉型Ⅲ－２期、13世紀前半と考えられる（橋本2009）。28は南北セクション②から出土した瓦器椀である。内外面すべてに炭素が吸着する。焼成は堅緻である。口径に対し、器高は約1/3の器形である。底部内面は平坦。底部から体部へは内湾気味に立ち上がり、強い２度のヨコナデによって口縁部は外反、口縁部下に稜を生じている。口縁端部は角頭に近く稜をもつ。底部には断面台形の輪高台が貼付される。内面見込みには平行文の暗文が施され、体部下半から口縁部端にかけて円圏状に暗文が施されている。内面口縁部端から外面口縁部はヨコナデが施される。体部外面はユビオサエ後ナデ調整を施している。和泉型Ⅲ－１期、13世紀前葉と考えられる。29は集石群下層の黒褐色土中から出土した瓦器椀である。内外面すべてに炭素が吸着する。焼成はやや甘い。口径に対し、器高はやや低く1/3を切る器形である。27に類似しており、底部付近から口縁部へ内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内面は平行文の暗文が施され、体部から口縁部端にかけて円圏状に暗文がなされている。和泉型Ⅲ期、13世紀代と考えられる。30は黒褐色土中から出土した灰白色の瓦器椀である。暗文を除き、内外面全体に炭素が吸着していない。器形は杯状で、真っ直ぐラッパ形に開く体部・口縁部をもち、端部は内向きにつまみあげられている。底部は丸味を持つと考えられるが明確ではない。高台裏の窪みは浅く、断面台形の高台が底部と体部の境に付されており、腰が張らず、椀形の丸みを持たない。口縁部外面はヨコナデ、内面は端部直下より円圏状にヘラミガキを施し底面から体部下半にかけて鋸歯文が施されている。外面体部

はユビオサエ痕が顕著である。14 世紀に入る製品と考えられる。31 は黒褐色土中から出土した瓦器椀である。白磁皿に近い器形をもつ。底部は平坦、器高は低く、丸みを帯びた体部から口縁部は外方へ直線的に開く。口縁端部は丸く収める。断面三角形の高台を貼付する。内外面、高台裏まで炭素は吸着している。ユビオサエ整形痕が体部外面に残る。口縁部内外面はヨコナデ、内外面のヘラミガキは摩滅のため調整は不明である。和泉型Ⅲ期、13 世紀代と考えられる。

32 は黄褐色整地土（層下半）から出土した瓦質羽釜である。短めの鍔が水平に張り出し、その端部は丸い。口縁部は立ち上がり、３本の凹線が巡る。端部上面には強いヨコナデによって面を持ち、内側端部はつまみ上げられる。内面はヨコハケ調整を施す。小破片であるため、傾きについては不明確であり、口縁端部上面が水平の場合、口縁部は内傾し、鍔は若干上方を向く。兵庫津遺跡編年羽釜形Ⅱ類の場合、14 世紀後半から 15 世紀前半の時期が考えられる。

33 は黒褐色土中から出土した平瓦片である。側面の一部が残存する。表面には布目、裏面にはタタキ痕が残るが、２次焼成を受け、全体に摩滅が激しく、調整は不明である。

34・35 は須恵器捏鉢である。34 は黄褐色整地土上面から出土した須恵器捏鉢口縁部片である。片口部分が残る。外方へ直線的に開く体部にやや肥厚する口縁部をもつ。口縁部端はつまみ上げられ、外側面は丸味をもつ。内面にヘラ記号がある。兵庫津遺跡編年東播系須恵器鉢Ｃ１類、13 世紀後半の時期が考えられる。35 は黒褐色土から出土した須恵器捏鉢片である。心持ち内湾気味に立ち上がる体部、口縁部端はつまみ上げられ、外側に面をもつ。端部内面は強いロクロナデによって窪む。体部内面には左上がりの板ナデが粗く施される。兵庫津遺跡編年東播系須恵器鉢Ｂ３類、13 世紀前半の時期が考えられる。

36 は須恵器甕の口頸部である。なで肩の肩部に外反する短めの口縁部をもつ。端部は外反気味につまみ出される。肩部以下には左上がりの格子タタキが右回りに施される。内面には強いナデ痕が残る。

37 は黄褐色整地土と上層の近世耕作土から出土した丹波焼短頸壺である。なで肩の肩部に屈曲する短めの口縁部をもつ。端部内面には強いロクロナデによって沈線をもつ。内外面に鉄釉がかかり、外面・口縁部内面は、その上をオリーブ灰の自然釉が覆う。外面には線刻（草花カ）文がある。

38 は黄褐色整地土（層上半）から出土した須佐唐津と考えられる無釉陶器擂鉢である。ボウル状の底部から体部にかけて残存する。体部外面には粘土紐の継ぎ目痕が若干残る。内面はよく摩滅するが、ヘラ描きによる１本引きの擂目が施される。17 世紀前半と考えられる。

39 は唐津焼皿である。石列遺構より出土した。灰釉と白濁釉が内外面に掛かり、高台部分のみが露胎である。見込みには段がみられ、砂目痕が３か所残る。高台は低い台形に削り出され、兜巾が残る。17 世紀前半と考えられる。

40～47 は輸入陶磁器を挙げた。40 は黄褐色整地土から出土した龍泉窯青磁蓮弁文碗である。鎬は甘く、幅広い蓮弁が片切彫りで表現され、13 世紀代と考えられる。41 は SD1004 埋土の比較的上層から出土した龍泉窯青磁雷文帯碗である。片切り彫りで雷文が表現されており、蓮弁同士が交差している。42 は黄褐色整地土から出土した龍泉窯青磁底部である。碗もしくは皿底部の破片である。高台畳付きと高台裏は露胎である。草花文の除刻を見込みに施している。周囲を打ち欠き印地打ちに再利用されている。43 は石列遺構背後の黄褐色整地土から出土した青磁皿底部である。高台畳付きと高台裏は露胎である。44 は石列遺構下の黄褐色整地土から出土した白磁皿底部である。内外面に施釉し、内面のヘラ切りが顕著である。外面は釉をヘラ状の工具で薄くのばしている。大宰府編年白磁皿Ⅸ類。口禿の皿と考えられ、13 世紀後半から 14 世紀前半の時期と考えられる（山本 2000）。45 は黒褐色土中から出土した白磁端反

り口縁碗の口縁部片である。口縁端部は屈折し、上端部は水平に面、端部内側には稜をもつ。内面口縁部下には沈線が巡る。12世紀後半の時期が考えられる。46は黒褐色土上の焼土面から出土した白磁玉縁口縁碗の口縁部片である。玉縁の側面・下面は粗いロクロ削りによって稜が残る。12世紀代の時期が考えられる。47は黒褐色中から出土した白磁玉縁口縁碗片である。玉縁の側面・口縁端部は粗いロクロ削りによって稜が残る。また、玉縁下においてもロクロ削り痕が認められる。施釉は玉縁下までで、以下は露胎である。12世紀代の時期が考えられる。

48は黄褐色整地土から出土した白磁壺口縁部である。花瓶の口縁部と考えられる。口縁部は大きく外反し、端部は上方につまみ上げ、外側に面をもつ。18世紀代の国産磁器である。

49～54は旧谷地形出土土器である。49は土師器小皿である。円盤状の底部（粘土板）に短く外方へ開く口縁部が貼付される。端部・内面底部と体部の境は丸い。底部外面にはユビオサエと板ナデ痕が認められる。50は手捏ね成形の京都系土師器小皿である。丸みを帯びて体部は立ち上がり、強いヨコナデによって口縁部は外反する。口縁部は強くヨコナデされ、体部との境に稜が出来ている。赤く焼成された製品である。51は旧谷地形の起点SD2003より出土した土師器甕である。なで肩の体部に短く外反する口縁部をもつ。端部は上部に面をもつ。口縁部はヨコナデ、頸部から体部上半はタテ方向の粗いタタキ、下半はヨコ方向の粗いタタキ調整を施す。内面はハケの後ナデ調整を施す。52は旧谷地形内の黒褐色砂礫から出土している土師器羽釜である。口縁部直下に短い断面方形の鍔もつ。外面は粗いタテハケ調整を施す。時期は9世紀～10世紀代と考えられる。53は土錘である。両端にユビオサエ痕が顕著で、斜めの巻き上げ痕が残る円筒形を呈する。54は須恵器長頸壺の頸・肩部分である。

55は近世の石列の下層（黄褐色から黒褐色土）より出土した須恵器壺高台である。体部との境際に短く踏ん張る貼り付け高台が付く。時期は平安時代と考えられる。

56はSK1002の下層より出土した。旧谷地形に伴うものと考えられる。土師器杯もしくは椀である。粘土板による厚く突出する高台に、緩やかに内湾しつつ立ち上がる体部がつく。底部内面にはユビオサエによる凹凸が顕著、外面は回転ヘラ切り離しを施す。10世紀代である。

1－Ⅱ区出土土器（図版24　写真図版24・25）

57～59は土坑墓SK1004出土の土器である。57・59は破片で出土しており副葬ではなく、混入と考えられる。57は手捏ね成形の土師器小皿である。丸みを帯びた底部から内湾して立ち上がり口縁端部は丸味を帯びる。内面と口縁部外面はヨコナデを施し斜め右へナデあげている。底部外面はナデ調整を施す。58は瓦器椀である。内外面ともに炭素が吸着する。標石直下から完形品で出土している。副葬品である。口径に対し、器高は低めの形態である。底部内面は平たく、体部との境は丸く、体部は外方へ内湾気味に立ち上がり、強いヨコナデによって口縁部は直口する。底部には外側に踏ん張りを見せる輪高台が貼付される。全体に器壁の残りが悪く、詳細な調整は残っていない。内面見込みには斜方向の暗文が施され、体部下半から底部境にかけて横方向暗文が間隔を空けて施されている。口縁部から体部上半はヨコナデが施される。在地産の瓦器椀であろう。しっかりとした高台の形態から12世紀後半と考えられる。59は須恵器捏鉢口縁部片である。直線的に外方へ立ち上がる体部、口縁部端はつまみ上げられ、外側に面と凸帯状の膨らみをもつ。兵庫津遺跡編年東播系須恵器鉢B３類、13世紀前半の時期が考えられる。

60～63は木棺墓SX2003に伴う土器である。60は手捏ね成形の土師器小皿である。ユビオサエ整形による凹凸のある平底から短く内湾気味に口縁部が立ち上がる。外面には強いヨコナデによって底部と

の境に明瞭な段が付く。内面は口縁部と底部の境がなく丸みを帯びる。61はやや小径の瓦器椀口縁部片である。内外面ともに炭素が吸着する。口縁部は強いヨコナデによって若干外反する。体部外面にはユビオサエ痕が残る。62は瓦器椀である。在地産であろう。内面及び口縁部外面の一部に炭素が吸着する。口径に対し、器高はやや低めの歪みの激しい形態である。底部内面は丸い。底部から体部へは内湾気味に立ち上がり、強い2度のヨコナデによって口縁部は外反する。底部には断面三角形の輪高台が貼付される。内面見込みには平行文の暗文が施され、体部下半から口縁部端にかけて横方向暗文が施される。内面口縁部端から外面口縁部はヨコナデが施される。体部外面はユビオサエ後ナデ調整を施している。和泉型Ⅲ－1期に類似し、13世紀前葉と考えられる。63は同安窯系青磁碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、上位で直立気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部を丸く収める。内面見込みと体部には段があり、体部上位には沈線が入る。外面体部には幅の広い5本単位の櫛目文を施す。外面体部下半にはロクロ削りが施され、施釉は内面及び体部中位まで施され以下は露胎である。大宰府条坊跡編年D期、12世紀中頃～後半の時期が考えられる。

64・65はSX2003の東側より出土した。SX2003の削平に伴い遊離した可能性があるためSX2003出土土器に続いて挙げる。ともに人為的に攪乱された茶褐色土より出土している。64は手捏ね成形の土師器小皿である。ユビオサエ整形による凹凸のある平底から短く内湾気味に口縁部が立ち上がる。体部と底部の境目は丸味を帯びる。底部外面にはユビオサエ整形痕が残る。内面はナデ調整、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。65は華南産灰釉（黄釉）陶器四耳壺、大宰府条坊跡編年の陶器耳壺Ⅴ－2類に相当する。64と同じく、SX2003の東側より多数の破片となって出土した。底部は切り離し後に内側を削り込んだ畚高底風の輪高台をもつ。外観は底部から若干外反気味に立ち上がり、ラグビーボール形の体部となる。最大腹径は中位にあり、緩やかに内湾して肩部へと至る。肩部には横形の四耳を貼付し、各耳を巡って波状沈線が1条巡っている。肩部と頸部の境目には2条の沈線が巡り、両者の境を強調している。頸部は内傾し、口縁部は短く外へ屈折し外側に面をもつ。口縁部から体部上半にはロクロナデの痕跡が顕著である。体部下半にはロクロ削り痕が明瞭に残り、高台畳付きには回転糸切り痕が認められる。内面は、頸部・肩部の境は甘く、体部・底部の境はなく丸底となっている。胎土は灰色で精良である。釉は緑灰～黄灰色に発色するが薄く、無釉に近い部分もある。全体に黒ごま様の灰が付着している。また、底部付近は赤灰色に焼成されている。華南産灰釉陶器片は別個体と推定される胴部片が、1－I区の西端から1点出土している。

66～73は溝より出土した土器である。66はSD2005より出土した瓦器椀である。外面及び口縁部内面付近に顕著に炭素が吸着する器壁が厚い個体である。口縁部は強いヨコナデによって若干外反する。また、口縁部内面には横方向のヘラミガキが残る。体部外面にはユビオサエ痕が残る。在地産の瓦器椀と考えられる。67～71はSD2021から出土した土器である。67は浅黄橙色の手捏ね整形の土師器小皿である。外面に粘土紐巻き上げ痕が残る。丸底から内湾気味に立ち上がり口縁部は心持ち開く。内面には口縁部の強いヨコナデによって底部との境にわずかな段が出来ている。底部外面はユビオサエ整形の後ナデ。内面は板状工具によるナデ調整が見られる。また、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。68はSD2021bから出土した浅黄橙色の土師器小皿である。底部は厚く、特に外面にユビオサエによる凹凸が顕著である。短く外方へ開く口縁部が貼付され、強いヨコナデによって底部との境に段をもつ。内面には一方向の仕上げナデを施す。69は土錘である。器壁に残る痕跡から楕円形の粘土を巻いて作製したと考えられる。70は瓦器椀である。内外面ともに口縁部周辺にのみ炭素が吸着する。口径に対し器

高が1/3以下の浅い器形をもつ。底部外面は凹凸が激しく、内面は平らであるが、緩やかに波打つ。底部から体部へは内湾してそのまま立ち上がり口縁端部は丸く収める。底部には粘土紐を内側に向けて伸ばした粗雑な矩形の輪高台が貼付される。内面見込みには粗い平行文の暗文が施され、体部下半には横方向（円圏状）の暗文が施されている。内面口縁部端から外面口縁部はヨコナデが施される。体部外面はユビオサエ後ナデ調整を施している。和泉型、器高の低さから13世紀後葉と考えられる。71は三足脚付瓦質羽釜、口径16.2㎝を測る小型の製品である。内外面ともに炭素が吸着する。断面方形の短い鍔がやや上向きに付く。口縁部は短く内湾気味であり、端部はつままれ、内側へ拡張し上部に面をもつ。口縁部はヨコナデ、内面は鍔以下にやや右上がりのヨコハケを施すが、摩滅のため明瞭ではない。外面は、鍔以下にはユビオサエ整形痕が残り、脚部を貼り付けている。兵庫津遺跡編年羽釜形B系列ⅡA類、14世紀後半の時期が考えられる。

72はSD2022aから出土した瓦器椀である。内外面ともに全面に炭素が吸着する。口径に対し器高が1/3以下の浅い器形である。底部外面は凹凸が激しく、歪みの激しい形態である。底部内面は丸く、底部から体部へは内湾気味に立ち上がり、強いヨコナデによって口縁部は外反し、口縁部下に稜が巡る。底部には断面三角形の輪高台が貼付される。口縁部内外面はヨコナデを施し、以下外面はユビオサエによる調整を施す。内面は体部に円圏状に暗文が巡るが、摩滅が激しく詳細は不明である。和泉型Ⅲ期、13世紀代と考えられる。

73はSD2023より出土した須恵器捏鉢口縁部片である。直線的に外方へ立ち上がる体部、口縁部端はつまみ上げられ、側面に面をもつ。側面は強いロクロナデによって端部下が凹線状に窪み、若干端部は巻き込んだ状態となる。兵庫津遺跡編年東播系須恵器捏鉢B1類、12世紀後半の時期が考えられる。

74～79は包含層出土の土器である。74は須恵器杯Aである。黒褐色土より出土した。口径に対して底径は小さく、杯部が外方へ開いて立ち上がる。口縁端部は尖る。杯部との境は強くロクロナデを施され、底部はやや突出した形状である。杯部は内外面ともにロクロナデ、底部内面はロクロナデ、外面はヘラ切り離しの後ナデ。時期は9世紀代と考えられる。75は橙色の手捏ね成形の土師器小皿である。黒褐色土より出土した。ユビオサエ整形による凹凸のある平底から短く口縁部が立ち上がる。体部と底部の境目は丸味を帯びる。底部外面はユビオサエ整形の後ナデ、内面はナデ調整、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。76は瓦器小皿である。内外面ともに全面に炭素が吸着する。底部外面はユビオサエにより凹凸が激しい。内面は丸味を帯び、口縁部へと立ち上がり、口縁部は丸く収める。口縁部は内外面ともにヨコナデを施し、強いヨコナデによって外面の底部との境には稜が生じている。内面底部から口縁部下半には平行の暗文が施される。77は黒褐色土より出土した瓦器椀である。内外面ともに全面に炭素が吸着する。口径に対し器高が1/3程度のやや深めの器形である。底面は丸く半球形の椀に断面三角形の高台が貼付される。口縁部内外面共にヨコナデ、内面口縁部下から体部にかけては円圏状に、底部には平行に暗文が施される。外面は口縁部下に横方向の暗文が施されるが、以下はユビオサエの後ナデ調整が施される。和泉型Ⅱ期、12世紀代後葉の時期と考えられる。78は龍泉窯青磁劃花文碗口縁部片である。口縁端部は心持ち外反する。大宰府条坊跡編年D期、12世紀中頃～後半の時期が考えられる。79は丹波焼壺口縁部である。短く外反し水平に伸びる。端部はやや尖る。時期は中世前期頃である。

3区出土土器（図版25　写真図版25・26）

80～84は3区SD02出土土器である。80は内外面ともに全面に炭素が吸着する瓦器小皿である。ユビオサエ整形による凹凸のある平底から短く口縁部が外方へ立ち上がる。端部は尖る。口縁部と底部の

境目は丸味を帯びる。摩滅が激しく調整の残りは悪いが、口縁部は内外面ともヨコナデ、外面底部中央には板状工具による圧痕（板目状圧痕）が残る。内面には円圏状にヘラミガキが施されている。81は浅黄橙色の手捏ね成形の土師器小皿である。ユビオサエ整形による凹凸のある平底から短く口縁部が立ち上がる。口縁端部は丸く収める。口縁部と底部の境目は丸味を帯びる。底部外面はユビオサエ整形の後ナデ、内面はナデ調整、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。器壁の厚い製品である。82は橙色の手捏ね成形の土師器小皿である。ユビオサエ整形による凹凸のある平底から短く口縁部が立ち上がる。口縁部と底部の境目は強いヨコナデによって甘い稜をもつ。底部外面はユビオサエ整形の後不充分なナデを行い一部に板状工具の圧痕が残る。内面は一方向のナデ、口縁部は内外面ともにやや強めのヨコナデ調整を施す。器壁の厚い製品である。83は81に類似する土師器小皿である。焼成・胎土は悪く、色調は橙～灰色、径1㎜前後の礫・植物種子（もみヵ）を含む。底部外面はユビオサエ整形、内面はナデ、口縁部はヨコナデを強く施し、内面の底部との間に境を造り出す。84は土師器皿である。口径12.7㎝前後を測るにぶい褐～にぶい橙色の手捏ね成形の土師器皿である。ユビオサエ整形による凹凸のある平底から丸みを帯びて口縁部が立ち上がる。底部外面はユビオサエ整形の後ユビナデを行い、内面は粗いユビナデ、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。器壁が厚く、焼成は甘い。1㎜前後の褐色の礫が顕著な製品である。

85～93は3区の包含層から出土した。85は黒褐砂礫（中世包含層）から出土した。にぶい黄橙色の手捏ね成形の土師器小皿である。扁平な器形をもち、底部と口縁部の境が曖昧に口縁部まで浅く内湾気味に立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に収めるが、箇所によっては肥厚をみせる。口縁部はヨコナデ、内面には仕上げナデ、外面はユビオサエ整形を行う。焼成は堅緻であるが、器面が爆ぜる部分が多く、全体に厚手の製品である。86は茶褐色混礫シルトより出土した。橙色の手捏ね成形の土師器小皿である。ユビオサエ整形による平底から短く口縁部が立ち上がる。口縁端部はつまみ上げ尖り、外傾にヨコナデによる稜をもつ。口縁部と底部の境目は丸味を帯びる。底部外面はユビオサエ整形の後ナデ、内面は乱方向のナデ調整、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。器壁の薄い製品である。87は橙色の土師器小皿である。14・68と類似する。底部は厚く、特に外面にユビオサエによる凹凸が顕著である。短く外方へ開く口縁部が貼付され、強いヨコナデによって底部との境は明瞭である。内面はナデ調整を施す。焼成は甘く、2次焼成を受けた可能性がある。また、内面に粘土紐巻き上げ痕が見受けられる。88は暗褐砂から出土した。内外面に炭素が吸着した土師器小皿である。底部は丸く、口縁部は外反する。端部は丸く収める。調整は摩滅のため不明。炭素が吸着しない部分は橙色のため土師器とするが、瓦器の生焼けの可能性もある。胎土は80と類似する。89は黒褐砂礫（中世包含層）から出土した土師器羽釜である。短い鍔が水平につく。口縁部は短く内湾・内傾し、端部はつままれ外上方に拡張し面をもつ。内外面はヨコナデ調整を施し、鍔下にはユビオサエが見受けられる。15世紀代である。90は茶褐色混礫シルトから出土した博形の土錘である。全長5.0㎝、径約3.0㎝、孔の径約1.1㎝を測る。91は黒褐色土から出土した。内外面全体に炭素が吸着する瓦器椀である。器形は杯状、真っ直ぐラッパ形に開く体部・口縁部をもつ。底部は丸味を持つと考えられるが明確ではない。断面台形の高台が底部と体部の境に付されており、腰が張らず、椀形の丸みを持たない。口縁部内外面はヨコナデ、内面は円圏状にヘラミガキを施す。外面体部はユビオサエ痕が顕著である。在地産であろう。調整・高台の形態から13世紀末頃の時期と推測する。92は内外面ともに全面に炭素が吸着する小型の瓦器椀である。口径に対し器高が1/3を超える深めの器形である。体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる。口縁部は尖る。内外面

共に口縁端部はヨコナデ、口縁部下から体部にかけては内外面ともに横方向（内面は円圏状）にヘラミガキを施す。13世紀代と考えられる。93は褐色土より出土した施釉陶器鉢である。体部は外方に開き口縁部は強いロクロナデによって外反する。端部は・肥厚外側に拡張し、上部に若干丸みを帯びた面をもつ。外面は口縁部下より下にはロクロナデによる凹凸が目立つ。内面口縁端部以下はオリーブ黒に発色した釉薬がかかる。火入れに使われ、近代に下ると考えられる。

２区出土土器（図版25　写真図版26）

94～100は土坑より出土した。94はSX12出土の土師器鍋片である。頸部から体部への屈曲はほとんどなく、受け屑である。体部中位に最大径をもつ個体と考えられる。外面体部には目の細かなやや左上がりの平行タタキを施す。内面はナデ調整を施し、頸部付近にはヨコハケ調整を施す。兵庫津遺跡編年土製煮炊具甕タイプⅣ類に対応し、15世紀前半～中頃と考えられる。95・96はSX26より出土した。95は瓦質擂鉢片である。外面には一部炭素吸着が残る。内外面ともに器壁が剥落・摩滅しており、被熱した可能性が高い。口縁部は外方へ開き、端部は上方へつまみ上げられ、外側に面をもつ。内面には櫛描きの擂目が左上がりに施されている。勘柄編年Ａ－Ⅰ類に属し（勘柄1988）、14世紀後半～15世紀前半と考えられる。96は丹波焼擂鉢である。SX26より出土したが、１－Ⅰ区の黄褐色土（整地土）・灰褐色土からも接合片が出土している。口縁部を欠く、復元底径15.8㎝の擂鉢である。内面にヘラ描きの卸目を施す。卸目は44本前後の本数で密に引かれる。十字の割り付けは明確ではない。外面体部下位にユビオサエによる凹線状の窪みが巡る。97はSX27から出土した土師器羽釜である。短い断面方形の鍔が水平につく。口縁部は短く内傾し、端部はつままれ上下方に拡張し面をもつ。内外面はヨコナデ調整を施し、鍔下には平行タタキが見受けられる。98はSX27から出土した小型の瓦器椀である。内外面ともに全面に炭素が吸着し、更に２次焼成を受けている。口径に対し器高が1/3以下の浅めの器形である。体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる。口縁部は尖る。底部は丸味を持つと考えられるが明確ではない。低い退化した断面三角形の高台が底部と体部の境に付されており、器形は腰が張らない。内外面共に口縁端部はヨコナデ、口縁部下から体部にかけては外面にはユビオサエ痕が認められる。和泉型Ⅲ－４期、13世紀末と考えられる。99はSX28ａから出土した土師器羽釜である。短い断面三角形の鍔が水平につく。口縁部は短く内傾し、端部は上下方に肥厚・拡張し面をもつ。内外面はヨコナデ調整を施し、鍔下には平行タタキが見受けられる。内面は、鍔貼付に伴い窪みをみせる。100はSX31から出土した丹波焼甕である。不接の体部破片も出土している。口縁部は短く外反し、口縁端部内側に深い凹線が巡る。端部は水平に拡張し、上面は丸味を帯びる。外側面は強いロクロナデによって段となる。頸部はなだらかに内傾し口縁部へと至る。釉はかからず、浅黄橙色に焼成される。

101・102は包含層から出土した土器である。101は土師器鍋である。焼成が非常に堅緻であり、無釉陶器といってもよい。なで肩の体部に直立する口縁部がつく。口縁端部は外側へ織り込み三角形の断面形状となっている。体部外面には左周りに平行タタキを施す。内面にはタタキのあて具痕があり、板状工具でナデ消している。兵庫津遺跡編年甕形Ⅳ類、15世紀前半の時期が考えられる。102は土錘である。斜めの巻き上げ痕が残り端部はややすぼまる。

103は確認調査時にＳＸ33から出土した土製品鳩笛である。頭部を欠き、吹き口先端も若干欠ける。また、胴部上面にあけられた孔は中心線からずれており、焼成の甘さを含め粗雑な作りの製品である。

以下は写真のみ掲載した土器である。104は黒褐色土より出土した丹波焼壺肩部の破片である。105は１－Ⅰ区の黄褐色整地土から出土した龍泉窯青磁劃花文碗の体部下端片である。106は１－Ⅱ区

SD2021・SD2022 間のセクションより出土した土師器皿である。ユビオサエ整形による凹凸のある平底から丸みを帯びて口縁部が立ち上がる。84 に似た器形をもつ。

107 ～ 133 はすべて 2 区 SX28（SX28 a・b）から出土した近世から現代にかけての陶磁器である。ゴミとして一括投棄された可能性が高い。107 は現代のティーカップの取っ手部分である。108 はノリタケ製のソーサーであり、107 とセットの可能性がある。108 の高台裏にはノリタケの印があり、その図柄から 1946 年～ 1953 年ころにかけて生産された製品と考えられる。109 は現代の磁器平皿である。110 は八角形の瀬戸製の皿である。昭和初期のものである。111 は隅切りの皿、大正から昭和初期のものである。112 は肥前系染付磁器の大皿である。梅文が描かれ、台形の高台をもつ。18 世紀後半の製品である。113 は昭和時代の染付碗、飯碗である。114・115 はスタンプ文を施す明治時代以降の飯碗である。産地は不明である。116 は明治時代の染付蓋である。濃い呉須を施し、口縁部に口紅（鉄釉）を施す。明治時代の瀬戸製か。117 は釉裏青の鉢である。幕末から明治時代の製品である。118 は現代の瀬戸製小鉢である。119 は菓子鉢である。現代の京焼系陶器である。120 は磁器小碗、草花文を施す端反り染付碗である。19 世紀前半の瀬戸製である。121 は磁器製煎茶用の湯呑みである。側面に「いはにほと」との朱字が書かれている。明治時代以降のものである。122 は肥前系染付の蕎麦猪口である。見込みに五弁蓮花文、外面に矢羽根文を描く。底部は蛇の目高台をもつ。19 世紀前半の製品である。123 は京焼系灰釉陶器蓋である。124 は京焼系陶器椀蓋、赤絵の蓋である。カニが描かれている。明治時代以降の製品である。125 は近現代（昭和時代）の急須である。126 は現代の急須である。127 は京焼系灰釉陶器、酒用の片口鉢である。19 世紀前半代の製品である。128 は現代の花生である。129 ～ 132 は色絵上絵付の磁器、仏飯具（仏具椀）である。明治時代以降の製品である。133 は尊形の陶器製仏花瓶である。19 世紀前半以降の瀬戸美濃製である。

2. 金属製品（図版 26・27　写真図版 27・28）

M 1 ～ M 14 は何れも鉄製品である。

M 1 は 1 － Ⅰ区より出土した刀子である。棟・関・茎の一部が残る。刃部は欠けている。片刃と考えられる。M 2 は 3 区下段耕土直下から黄褐色混礫シルト（整地土）において出土した。短冊状の鉄板の先端がフック状に加工された鍛造品である。鎌などの茎と考えられる。M 3 は 3 区より出土した。板状部分から角が飛び出す形状で、鉈と考えられる。板状部分が身（刃部）、角部分が柄（茎）にあたる。M 4 は 2 区下段より出土した鎌である。身幅が 2 ㎝前後と小型で、刃部の先端は欠損している。M 5 は 2 区西尾根上より出土した環状鉄製品である。内径は 2.4 ㎝ ×1.8 ㎝の楕円形を呈する。鎌や鉈等の柄をかしめるものと考えられる。M 6 は 1 － Ⅱ区木棺墓 SX2003 より出土した。C 字形の鉄製品である。断面形状は扁平であり、一端が空く点は、M 5 とは形状を異にする。鎖の一部あるいは、つり下げ金具様であるが、用途は不明である。M 7 は 3 区黒褐砂礫から出土した鉄製犂先である。鉋弾形の左半部が残存していた。復元には熊本県民俗資料データベース登録の肥後犂を参考としたが、法量・床部の差し込み部分中央に空く孔や上端の斜めカット部分など類似している。耕作時、土壌が右へ反転する犂先である。M 8 は 1 － Ⅰ区調査区端（北側斜面）の旧耕土もしくはその下層の近世盛土（黄褐色整地土）より出土した鉄製品である。板状の鉄板の一端に断面三角形の縁がある。裏面は平坦であるが、全体に加工は粗い。大型の鉄鍋の口縁部の可能性があるが、細片のため不明である。M 9 は 1 － Ⅰ区の黒褐色土より出土した鉄釘である。下端を欠く。頭部を平らに叩き出し、断面が方形の和釘、皆折釘である。M 10 は 1 － Ⅰ区の黒褐色土より出土した鉄釘である。下端を欠く。頭部を鍛造時に曲げる。断面が方形の

和釘、折釘である。M 11は1－Ⅰ区の旧谷地形から出土した鉄釘である。下端を欠く。断面が方形の和釘、頭部を叩き出し、折り曲げた巻頭釘である。M 12は3区北半から出土した鉄釘である。下端を欠く。断面が方形の和釘、頭部を叩き出し、折り曲げた巻頭釘である。M 13は1－Ⅱ区SX2003から出土した鉄釘である。頭部端を欠くが残存部が矩形であることから巻頭釘の可能性が高い。木棺に使用されたと考えられる。M 14は1区北方の水田の近世耕作土より確認調査時（2011234　3T）に出土した不明鉄製品である。一端が矩形に尖るが、刃部はない。

M 15～M 21は銭貨（銅銭）である。

M 15は2区下段（1区南側斜面）より出土した皇宋通宝（北宋銭　1038年初鋳）である。M 16は2区上段より出土した元豊通宝（北宋銭　1078年初鋳）である。

M 17～M 21は寛永通宝である。M 17は2区上段西側斜面より出土した寛永通宝（1期　古寛永　1636～1659年鋳造）である。D群の墓に伴うものと考えられる。M 18は2区上段SX05より出土した寛永通宝（1期　古寛永　1636～1659年鋳造）である。M 19は2区上段表土中より出土した寛永通宝（3期ヵ　新寛永）である。M 20は2区中段暗黄灰色土中より出土した寛永通宝（3期ヵ　新寛永）である。M 21は2区表土中より出土した寛永通宝（3期ヵ　新寛永）である。

M 22・M 23は写真のみ掲載した。

3．石製品・石造品（図版28　写真図版28・29）

S 1は卵形の砂岩円礫である。1－Ⅱ区SD2023より出土した。一端の頂部に打痕が認められる。用途は不明である。

S 2は粘板岩製の砥石である。1－Ⅰ区の南北トレンチ②より出土した。表裏面と短側面1か所が砥面として利用されている。表裏面には深く刃物による線条痕が刻まれている。現状は当初の状態ではなく、3方は折損したものと考えられる。

S 3～S 20は石造品である。何れも墓塔に伴うものである。

S 3～S 6は安置式の一石五輪塔を挙げた。

S 3・S 4は2区上段SX02の上面から出土した安置式の一石五輪塔である。

S 3は空風輪を欠く。水輪は丸味を持たそうとしているが、断面形状は四角く、扁平である。石材は能勢石である。

S 4は水輪がS 3よりも更に扁平であり、断面形状は四角く、丸みがない。全体に掘り込みが浅い窪弾形の形状である。石材は能勢石である。

S 5は2区の調査区南側石組み遺構を構成する安置式の一石五輪塔である。石材は能勢石である。

S 6は2区中段より表面採取された安置式の一石五輪塔である。石材は波豆石である。両者ともS 3・S 4に比べ扁平ではない。共に水輪は丸味を持ち、S 6は球形を指向している。

S 7～S 10は埋め立て式の一石五輪塔である。

S 7は2区上段SX02の上面から出土した。下端は比較的平坦であるが、15㎝ほどは加工が粗く、地中に埋め込んだものと考えられる。水輪は扁平であり、断面形状は丸みに乏しく四角形に近い。石材は能勢石である。

S 8は2区中段表土中から出土した。火輪から地輪は太さが変わらず寸胴である。下端は粗く割り、10㎝ほどは加工が粗く、地中に埋め込んだものと考えられる。水輪は非常に扁平であり、断面形状は丸みに乏しく四角形に近い。石材は波豆石である。

S 9は調査区南側石組み遺構を構成する埋め立て式の一石五輪塔である。下端は粗く割り尖らせ、15cmほどは加工が粗い。地中に埋め込んだものと考えられる。水輪は非常に扁平であり、断面形状は丸みを残すが四角形に近い。石材は能勢石である。宝珠から地輪に向かって徐々に太くなり、最大径を地表部分にもつ。

S 10は調査区南側石組み遺構を構成する埋め立て式の一石五輪塔である。下端は粗く尖らせ、15cmほどは加工が粗く地中に埋め込んだものと考えられる。水輪は非常に扁平であり、断面形状は四角形に近い。石材は能勢石である。宝珠から地輪に向かって徐々に太くなり、最大径を地表部分にもつ。

S 11～S 18は組み立て式五輪塔である。

S 11～S 14は空風輪である。

S 11は2区上段SX02の北側（下方）から出土した空風輪である。基部の突出部が顕著に削り出されている。石材は能勢石である。

S 12は2区上段表土直下から出土した空風輪である。基部の突出部は低い。石材は能勢石である。

S 13は2区上段東側北斜面A－1群周辺から出土した空風輪である。基部の突出部は低い。石材は能勢石である。

S 14は調査区南側石組み遺構を構成する空風輪である。基部の突出部は低い。石材は能勢石である。

S 15は調査区南側石組み遺構を構成する一辺30cm前後の大型の火輪である。空風輪の差し込み孔は1.5cm前後と浅い。石材は六甲花崗岩である。

S 16は調査区南側石組み遺構を構成する大型の水輪である。最大径32cmを中位より心持ち上部にもつ大型の製品である。石材は能勢石である。上下面は平坦に加工されるが据え付けのための突起などの加工はない。

S 17は調査区南側石組み遺構を構成する水輪である。最大径を中位にもつ径20cm前後の製品である。石材は能勢石である。上下面は平坦に加工され、それぞれに低い突起を加工している。

S 18は2区中段東側A－2群周辺からS 20と共に出土した地輪である。上面に浅い水輪の据え付け孔を穿つ。石材は能勢石である。

S 19は2区上段SX02の上面から出土した五輪塔の方形台座である。上面が一部被熱している。

S 20は2区中段東側A－2群周辺からS 18と共に出土した方形の宝篋印塔の基礎もしくは五輪塔の台座である。S 18と重なって検出されており上部にS 18が据えられていた可能性が高い。石材は六甲花崗岩である。

4．木製品（図版29・30　写真図版30）

図示した木製品はすべてSK1002から出土した。これらは水溜め土坑内に簀の子状に組まれていたものW3・W5・W6と石組みを組みなおした際に根太として使用されたと考えられるW4、更に遊離した杭W1・W2がある。

なお、これらの木製品の樹種同定を（株）パレオ・ラボに依頼し、小林克也氏より詳細な報告を受けた。その結果についても紙数の都合上、本節にて併せて記述する。

W1・W2はいずれも建築部材（柱材あるいは棟材）の再利用と考えられる杭である。ともに一端を矢板状に削り、先端を尖らせ、他端を圭頭状に削り出している。ともに長方形のほぞ穴が穿たれている。材の断面形状はミカン割りを行い、三角形を呈している。その形状からは単なる柱ではなく棟・垂木などに使用された可能性も考えられる。樹種はいずれもクリである。

Ｗ３はクリの芯持ち材である。全体に一面を平滑に削り、カマボコ形の断面形状をもつ。また一端は長方形にほぞを造り出している。建築部材（柱材あるいは梁や根太材）と考えられる。

Ｗ４はマツ属の芯持ち丸太、薄く樹皮が残る丸太材である。一端は先端を粗く整えた加工痕があり、他端は折損する。また、枝払いによる刃物痕が残る。

Ｗ５はマツ属の芯持ち丸太材、一端は先端を粗く整えた加工痕があり、他端は折損する。全体に２面を平滑に削る断面形状をもつ。建築部材（柱材あるいは梁や根太材）の可能性がある。

Ｗ６はマツ属の芯持ち丸太、薄く樹皮が残る丸太材である。一端は先端を粗く整えた加工痕があり、他端は折損する。また、粗く全体に加工を加えており、三角形に近い断面形状となっている。

以上６点の木製品の樹種は、マツ属複維管束属３点、クリ３点ずつみられた。（株）パレオ・ラボの報告・考察では、これらの樹種はともに水湿に強いことが報告されており、水溜めに使用するには適材である。また、篠山市初田館、加東市藤田・一ノ谷遺跡では出土杭材に、マツ属複維管束属やクリ材が使用されており、猪渕遺跡においてＷ１・Ｗ２が杭に転用されている点も用材傾向に合致しているといえよう。

（参考文献）

岡田章一ほか「遺構と遺物の検討」『兵庫津遺跡Ⅱ』　2004 年　兵庫県教育委員会

鋤柄俊夫「大阪南部の瓦質土器生産(2)」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』　1989 年　日本中世土器研究会

橋本久和「瓦器椀の編年と年代観」『第 28 回　中世土器研究会　中世考古学と地域・流通－瓦器椀からみる－』　2009 年　日本中世土器研究会

森田千鶴『猪名川町の墓制』町史編集資料１　1985 年　猪名川町史編集室

山本信夫『大宰府条坊ＸＶ－陶磁器分類編－』　2000 年　太宰府市教育委員会

表２　出土遺物観察表Ⅰ

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量（cm）			残存状況			出土地区	出土遺構・層位	時期・産地	備考
					口径	器高	底径	口縁	底	他				
1	22	22	瓦部	小椀	11.8	(3.0)		1/7		体部若干	1－1区4	P2027		
2	22	22	土師部	小皿	(8.25)	1.65	(3.85)	1/6	1/2		1－1区4	P2029		
3	22	22	瓦部	椀		(0.9)	(5.0)		若干		1－1区4	P2028		
4	22	22	陶部	甕	32.3	(64.8)	19.2	ほぼ完形	ほぼ完形		1－1区	SK1001（堆積）	15c 末～16c 丹波	口縁部と底部は不接のため、図上復元
5	22	22	土師部	鍋	(24.0)	(12.4)	(24.2)		1/8		1－1区サブトレ（地土横）	SK1002	13c	
6	22	22	土製品	土錘	長 3.4.7	幅 1.0	厚み 1.1		完形		1－1区サブトレ（地土横）	SK1002		孔の径 0.25 cm
7	22	22	土師部	小皿	(8.2)	(1.65)			1/4		1－1区3～4	SD1004 集石間		（復元土中）
8	22	22	灰釉陶器	皿		(1.1)	(5.4)		ごくわずか		1－1区3～4	SD1004 集石間	16c 美濃	（復元土中）
9	22	22	施釉陶器	椀	(12.9)	(5.0)		わずか		体部 1/10	1－1区3～4	SD1004 集石間	瀬戸美濃	（復元土中）
10	22	22	無釉陶器	鉢体	(23.8)	(10.5)		1/8 以下			1－1区3～4	SD1004 集石間	17c 前半 瀬戸唐津	（復元土中）
11	22	22	陶器	鉢体		(7.3)				体部若干	1－1区	SD1004	16c 信楽	
12	22	22	陶器	鍋	(22.2)	(3.75)		若干			1－1区4 西端	SD1004	丹波	
13	22	23	土師部	小皿	(6.9)	1.5	(3.5)		1/3		1－1区3	集石間①黄褐色盛土中		黒褐のままで
14	22	23	土師部	小皿	(7.2)	1.7	(5.9)	1/8	1/6		1－1区4	黒褐色土		集石群より下
15	22	22	土師部	小皿	(7.9)	1.5	(6.9)	1/4	2/3		1－1区3・4区	黒褐色土（中世）		一部火巾耕土含む
16	22	22	土師部	小皿	(8.3)	1.3	(7.2)	1/2 弱	1/2		1－1区中央	トレンチ２掘土の下層		東西石列より北
17	22	23	土師部	小皿	(8.9)	1.3	(7.5)		1/4		1－1区3	黄褐色整地土		一部黒褐色土（中世）混じる
18	22	23	土師部	小皿	(8.6)	(1.45)		1/6			1－1区2 北側	黄褐色整地土下半		
19	22	22	土師部	小皿	(10.8)	2.0	(6.5)	1/5		杯部 1/2	1－1区2・3	黄褐色整地土	16c 京都系	（口縁土の上）
20	22	23	土師部	羽釜		(5.55)		わずか			1－1区北端	黄褐色粗砂層	13c 後半	（重機掘削）
21	22	23	土師部	鍋	(18.4)	(5.1)		1/4			1－1区3・4 北	黄褐整地層上半	13c 後半	18c 後半の堀等か
22	22	23	土師部	鍋	(23.7)	(6.5)		1/8 以下			1－1区4	黒褐色土（中世）	13c 後半	東西石列より北 2 定不接の破片あり
23	22	23	土師部	鍋	(23.2)	(7.2)		1/4			1－1区4	黒褐色土（中世）	13c 後半	東西石列より北
24	22	23	土師部	鍋	(29.3)	(6.2)		1/12			1－1区4	黒褐色土（中世）	13c 後半	東西石列より北
25	22	23	土師部	鍋	(29.0)	(6.7)		1/10			1－1区4	黒褐色土（中世）		東西石列より北
26	23	23	土製品	土錘	長 3.5.85	幅 0.9	厚み 0.9		完形		1－1区3・4	黒褐色土（中世）		孔の径 0.4 cm 一部火色巾耕土含む
27	23	23	瓦部	椀	(13.5)	4.3	(3.9)	1/8 以下	1/3		1－1区4 北	黒褐色土直上黄褐色整地土の底	13c 前半	
28	23	23	瓦部	椀	(15.7)	4.5	4.45	1/8 以下	完形		1－1区2	（アゼ）	13c 前葉	セクション4
29	23	23	瓦部	椀	(15.4)	(4.8)		1/5			1－1区4	黒褐色土	13c	集石群より下
30	23	23	瓦部	椀	(11.8)	5.1	(5.4)	わずか	1/4		1－1区3・4	黒褐色土（中世）	14c	一部火色巾耕土含む
31	23	23	瓦部	椀	(14.7)	3.9	(6.0)	1/8 以下	1/5		1－1区4	黒褐色土（中世）	13c 和泉型	一部火色巾耕土含む
32	23	23	瓦質土器	羽釜	(26.6)	(5.05)		わずか		鍔若干	1－1区3	黄褐色整地土 火色巾耕土	14c 後半～15c 前半	
33	23	23	瓦	平瓦	(5.4)	(3.95)	2.5			わずか	1－1区3・4	黒褐色土（中世）		一部火色巾耕土含む
34	23	23	須恵器	こね鉢		(5.15)		1/8 以下			1－1区3	黄褐整地層上	15c 前半 東播系	整地は 16c 後半か
35	23	23	須恵器	こね鉢	(24.6)	(6.2)		1/8 以下			1－1区4・3	黒褐色土	15c 前半 東播系	
36	23	23	須恵器	甕	(25.4)	(9.5)		1/8 以下			1－1区3 北側	盛土石積		アゼ4付近
37	23	23	陶器	甕	(19.7)	(7.9)		1/7			1－1区3	黄褐色整地土 火色巾耕土	丹波	
38	23	23	無釉陶器	鉢体		(8.2)				体部 1/8 以下	1－1区2～3	黄褐色整地土	須佐唐津	火色巾耕土が混じる
39	23	24	施釉陶器	皿		(2.5)	(3.9)		2/3		1－1区3・4	石組列	唐津か	近世
40	23	24	青磁	碗	(15.9)	(3.2)		1/12			1－1区2・3	巾耕土中下の黄褐色整地層	13c 龍泉窯	サブトレ2より東側
41	23	24	青磁	碗		(2.5)		若干			1－1区4 西端	SD1004	龍泉窯	
42	23	24	青磁	碗小皿		(1.8)	(5.9)		3/4	高台 1/2	1－1区3	セクショントレンチ⑤黄褐色土（巾耕土より上）	龍泉窯	石垣裏方堆土
43	23	24	青磁	皿		(1.4)	(4.2)		1/3		1－1区3 北側	盛土石積		アゼ4付近
44	23	24	白磁	皿		(1.1)	(6.0)		1/4		1－1区2	黒褐色土～黄褐色整地土	13c 後半～14c 前半	石列の下（近世盛土に伴う）
45	23	24	白磁	碗	(16.8)	(2.6)		わずか			1－1区4	黒褐色土（中世）	12c 後半	
46	23	24	白磁	碗	(16.3)	(3.0)				ごくわずか	1－1区		12c	焼土面　断定方向サブトレンチ
47	23	24	白磁	碗	(17.6)	(3.4)		わずか			1－1区3・4	黒褐色土（中世）		

表３　出土遺物観察表Ⅱ

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量（cm）			残存状況			出土地区	出土遺構・層位	時期・産地	備考
					口径	器高	底径	口縁	底	他				
48	23	24	白磁	壺	(6.9)	(1.7)		1/8			1－Ⅰ区3	黒褐色土の上層黄褐整地土	18c 国産	一部黒褐色土混じる
49	24	24	土師器	小皿	(9.1)	1.4	(7.9)	1/4	1/2 弱		1－Ⅰ区3	旧谷地形		
50	24	24	土師器	小皿	(9.4)	(1.8)		1/8			1－Ⅰ区3	旧谷地形	京都系	
51	24	24	土師器	甕	(14.4)	(6.9)		1/8		体部 1/6	1－Ⅰ区3	SD2003(旧谷地形)		体部の不接片あり
52	24	24	土師器	羽釜	(26.6)	(5.1)		1/6			1－Ⅰ区2	旧谷地形黒褐色土(下半砂礫)	9～10c	砂礫
53	24	24	土製品	土錘	長さ 3.4	幅 0.7	厚み 0.75			完形	1－Ⅰ区3	旧谷地形		孔の径 0.3 cm
54	24	24	須恵器	壺		(4.2)				頸部 1/2	1－Ⅰ区2・3	旧谷地形		
55	24	24	須恵器	壺		(2.3)	?			ごくわずか	1－Ⅰ区2	黒褐～黄褐色整地土	平安時代	石列の下（近世盛土に伴う）
56	24	24	土師器	杯か椀		(3.0)	(8.6)		1/2	体部 1/4	1－Ⅰ区3	旧谷地形	10c	(SK1002) 焼土坑の下
57	24	24	土師器	小皿	(7.3)	1.5	(5.8)	1/3	1/4		1－Ⅱ区	SK1004(土坑墓)		
58	24	24	瓦器	椀	13.8	5.0	6.15			ほぼ完形	1－Ⅱ区	SK1004(土坑墓)	12c 後半	
59	24	24	須恵器	こね鉢	?	(4.6)		わずか			1－Ⅱ区	SK1004(土坑墓)	13c 前半 東播系	
60	24	24	土師器	小皿	(8.4)	1.4	(7.3)	1/4	1/4		1－Ⅱ区	SX2003　取り上げ No.1		
61	24	24	瓦器	椀	(14.2)	(3.7)		1/8 以下			1－Ⅱ区	SX2003　取り上げ No.3		
62	24	24	瓦器	椀	15.5	5.0	4.4	3/4	5/6		1－Ⅱ区	SX2003	13c 前葉 在地産カ	
63	24	24	青磁	碗	(16.1)	(5.3)		1/5			1－Ⅱ区	SX2003　取り上げ No.2	12c 中頃～後半	
64	24	25	土師器	小皿	(7.8)	1.5		1/4	3/4		1－Ⅱ区東端	SX2003 東側　茶褐色土		人為的盛土
65	24	巻頭2 25	灰釉陶器	壺	(9.8)	21.5	(8.4)	わずか	1/3		1－Ⅱ区東端	SX2003 東側　茶褐色土	華南産	人為的盛土
66	24	25	瓦器	椀	(14.2)	(3.15)		1/8			1－Ⅱ区	SD2005		
67	24	25	土師器	小皿	(7.9)	1.8	(6.0)	1/6	1/3		1－Ⅱ区東	SD2021　アゼより南		
68	24	25	土師器	小皿	(8.5)	1.6	(7.6)			1/2	1－Ⅱ区東	SD2021b、SD2022b アゼの間		殆どが SD2021
69	24	25	土製品	土錘	長さ 3.7	幅 0.9	厚み 0.9			完形	1－Ⅱ区東	SD2021　アゼより南		孔の径 0.3 cm
70	24	25	瓦器	椀	(13.3)	4.0	(5.6)	1/5	1/4		1－Ⅱ区東	SD2021　アゼより南		
71	24	25	瓦器	鍋(三足)	(16.2)	(5.4)		1/8			1－Ⅱ区東	SD2021　アゼより南		
72	24	25	瓦器	椀	(16.4)	5.0	4.9	3/4	ほぼ完形		1－Ⅱ区	SD2022a		
73	24	25	須恵器	こね鉢		(3.5)		わずか			1－Ⅱ区	SD2023		石器有り
74	24	25	須恵器	杯A	(13.3)	3.2	(8.2)	1/8 以下	1/8 以下		1－Ⅱ区	黒褐色土		人力掘削
75	24	25	土師器	小皿	(7.8)	1.5	(7.6)	1/3	1/3 弱		1－Ⅱ区1東半	遺構面まで　黒褐色土		
76	24	25	瓦器	小皿	(9.3)	1.9	(7.8)			1/2 弱	1－Ⅱ区1東半	遺構面まで　黒褐色土		
77	24	25	瓦器	椀	(13.9)	4.85	(4.7)	1/8 以下	1/2		1－Ⅱ区1東半	遺構面まで　黒褐色土	12c 後葉	
78	24	25	青磁	碗		(3.0)		わずか			2区下段東側		12c 中頃～後半	検出面まで
79	24	25	陶器	壺	(13.9)	(2.8)		1/8 以下			2区下段東側		中世前期 丹波	検出面まで
80	25	26	瓦器	小皿	8.0	1.3	6.2	7/8	ほぼ完形		3区下段	SD02		
81	25	26	土師器	小皿	(8.0)	1.6	(7.8)	1/2 弱	1/2		3区下段(中段)	SD02		
82	25	26	土師器	小皿	8.0	1.6	6.9	1/2	7/8		3区下段	SD02		
83	25	26	土師器	小皿	8.4	1.5	7.1			ほぼ完存	3区下段	SD02		
84	25	26	土師器	皿	(12.7)	2.7	(8.8)	1/8	1/4		3区下段	SD02		
85	25	26	土師器	小皿	(7.6)	1.4		2/5	1/2		3区	黒褐砂礫		鉄器あり
86	25	25	土師器	小皿	(7.8)	1.5	(7.2)			1/3	3区下段	茶褐色泥礫ｼﾙﾄ		
87	25	26	土師器	小皿	8.4	1.4	7.3	1/2	ほぼ完存		3区下段	面精査		
88	25	26	土師器	小皿	(8.2)	2.0		1/8 以下			3区	暗褐砂		
89	25	25	土師器	羽釜	(23.0)	(3.95)		1/8 以下			3区	黒褐砂礫		鉄器あり
90	25	25	土製品	土錘	長さ 5.0	幅 3.0	厚み 2.9			ほぼ完形	3区下段	茶褐色泥礫ｼﾙﾄ		孔の径約 1.1 cm
91	25	25	瓦器	椀	(13.2)	4.2	(5.0)	1/8	1/8		3区下段東半	黒褐色土	在地産	
92	25	25	瓦器	椀	(11.2)	(3.7)		1/4			3区下段	面精査	13c	
93	25		施釉陶器	鉢	(22.2)	(4.7)		1/8 以下			3区下段北端落ち	中世包含層(褐色土)	近代	火入れ
94	25	26	土師器	鍋		(9.75)				体部 1/8 以下	2区中段	SX12		
95	25	26	瓦器	擂鉢		(5.95)		1/8 以下			2区	SX26		
96	25	26	陶器	擂鉢		(10.3)	(15.8)		1/5		2区	SX26	丹波	
97	25	26	土師器	羽釜		(3.3)		わずか			2区	山裾部　石組 SX27		

表４　出土遺物観察表Ⅲ

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量（ｃｍ）			残存状況			出土地区	出土遺構・層位	時期・産地	備考
					口径	器高	底径	口縁	底	他				
98	25	26	瓦器	椀	(13.2)	(3.8)		1/6			2区	山裾部　石組 SX27		
99	25	26	土師器	羽釜		(4.25)		わずか			2区	SX28 上層 a(円形部分)		
100	25	26	陶器	甕		(8.4)		1/8 以下			2区	SX31	丹波	破片あり
101	25	26	土師器	鍋	(19.6)	(5.95)		1/7			2区中段東半			
102	25	26	土師器	土錘	長さ 3.9	幅 1.1	厚み 1.1			ほぼ完形	2区中段東半			孔の径 0.3 cm
103	25	26	土製品	鳩笛	長さ 5.8	幅 2.2	厚み 2.4			頭部は欠損	2区（4T）	SX33		埋戻し埋土
104		23	陶器	壺							1－Ⅰ区 3・4	黒褐色土（中世）	丹波	一部灰色旧耕土含む 写真のみ
105		24	青磁	碗							1－Ⅰ区 2・3	SD2003	龍泉窯	写真のみ
106		25	土師器	皿							1－Ⅱ区東	SD2021c、SD2022c		写真のみ
107		26	磁器	ティーカップ							2区	SX28	現代	写真のみ
108		26	磁器	ソーサー							2区	SX28	ノリタケ 現代	写真のみ
109		26	磁器	平皿							2区	SX28	現代	写真のみ
110		26	磁器	皿							2区	SX28	昭和初期 瀬戸	写真のみ
111		26	磁器	角皿							2区	SX28	大正か昭和初期	写真のみ
112		26	磁器	大皿							2区	SX28	18c 後半 肥前系	写真のみ
113		26	磁器	飯碗							2区	SX28	昭和	写真のみ
114		26	磁器	飯碗							2区	SX28	明治以降 産地不明	写真のみ
115		26	磁器	飯碗							2区	SX28	明治以降 産地不明	写真のみ
116		26	磁器	蓋							2区	SX28	明治 瀬戸ヵ	写真のみ
117		26	磁器	小鉢							2区	SX28	幕末～明治 釉裏青	写真のみ
118		26	磁器	小鉢							2区	SX28	現代　瀬戸	写真のみ
119		26	陶器	菓子鉢							2区	SX28	現代 京焼系	写真のみ
120		26	磁器	小碗							2区	SX28	19c 前半 瀬戸美濃	写真のみ
121		26	磁器	煎茶用湯呑							2区	SX28	明治以降	写真のみ
122		26	磁器	蕎麦猪口							2区	SX28	19c 前半 肥前系	写真のみ
123		26	陶器	蓋							2区	SX28	京焼灰釉	写真のみ
124		26	陶器	蓋							2区	SX28	明治以降 京焼系赤絵	写真のみ
125		26	磁器	急須							2区	SX28	近現代（昭和）	写真のみ
126		26	磁器	急須							2区	SX28	現代	写真のみ
127		26	陶器	酒用片口							2区	SX28	19c 前半 京焼系	写真のみ
128		26	磁器	花生							2区	SX28	現代	写真のみ
129		26	磁器	仏飯具							2区	SX28	明治以降	写真のみ
130		26	磁器	仏飯具							2区	SX28	明治以降	写真のみ
131		26	磁器	仏飯具							2区	SX28	明治以降	写真のみ
132		26	磁器	仏飯具							2区	SX28	明治以降	写真のみ
133		26	陶器	仏花瓶（尊形）							2区	SX28	19c 前半以降　瀬戸美濃	写真のみ

金属製品				器種	法量（ｃｍ）				残存状況	出土地区	出土遺構・層位	時期・産地	備考
					長さ	幅	厚み	重量(g)					
M1	26	27	鉄製品	刀子	(4.05)	1.0 1.32	0.35 0.53	5.9	刃部欠失	1－Ⅰ区			
M2	26	27	鉄製品	鎌	(4.3)	1.27 0.68	0.45 0.5	6.7	茎部残存	3区下段	耕土直下～黄褐色混礫シルト		
M3	26	27	鉄製品	鉈カ	(10.18)	3.02 2.5	0.7 1.1	50.5	刃部欠失	3区下段			
M4	26	27	鉄製品	鎌	(9.85)	1.91 1.55 1.6	0.35 0.3	22.6	刃部先端欠損	2区下段			
M5	26	27	鉄製品	鉄鏃	3.05	2.5	0.85	6.9	完形	2区 西尾根上	表土掘削時		
M6	26	27	鉄製品	鋲	3.21	0.6	0.47	3.8	完形	1－Ⅱ区	SX2003（北東）		
M7	26	27	鉄製品	犂先	(17.75)	(8.85)	0.4	287.0	一部残存	3区	黒褐砂礫		
M8	26	27	鉄製品	不明	(3.95)	2.4	0.7	5.2	細片残存	1－Ⅰ区 4 北側斜面	灰色旧耕土およびその下の黄褐色整地層		
M9	26	27	鉄製品	釘	(4.05)	0.2	0.65	6.3	下部欠損	1－Ⅰ区 4	黒褐色土（中世）		
M10	26	27	鉄製品	釘	(3.5)	0.49	0.45	1.6	下部欠損	1－Ⅰ区 4	黒褐色土（中世）		
M11	26	27	鉄製品	釘	(2.92)	0.4	0.48	2.2	下部欠損	1－Ⅰ区	旧谷地形		
M12	26	27	鉄製品	釘	(3.85)	0.4	0.4	2.2	下部欠損	3区下段	人力掘削		

表５　出土遺物観察表Ⅳ

金属製品				器種	法量（cm）				残存状況	出土地区	出土遺構・層位	時期・産地	備考
					長さ	幅	厚み	重量(g)					
M13	26	27	鉄製品	釘	(5.65)	0.58	0.59	3.3	頭部欠失	1－Ⅱ区	SX2003(南東)		
M14	26	27	鉄製品	不明	7.55	0.75 1.45	0.38 0.55	13.9		3T西半	淡(褐)灰色土 遺構面まで		
M15	27	28	銅製品	銭	2.45	(2.4)	0.13 0.15	2.5	一部欠失	2区下段	人力掘削	北宋1038年 初鋳	皇宋通寶
M16	27	28	銅製品	銭	2.4	2.4	0.13 0.12	3.2	完形	2区上段	表土	北宋1078年 初鋳	元豊通寶
M17	27	28	銅製品	銭	2.45	2.45	0.13 0.1	2.7	完形	2区上段	西側斜面	1期古寛永 1636～1659 年	寛永通宝
M18	27	28	銅製品	銭	2.5	2.5	0.15 0.15	3.4	完形	2区上段	SX05	1期古寛永 1636～1659 年	寛永通宝
M19	27	28	銅製品	銭	2.4	2.4	0.11 0.08	2.1	完形	2区上段	表土	3期新寛永 カ	寛永通宝
M20	27	28	銅製品	銭	(2.3)	(2.25)	0.1 0.12	2.1	一部欠失	2区中段	暗黄灰色土	3期新寛永 カ	寛永通宝
M21	27	28	銅製品	銭	2.23	2.2	0.1 0.1	1.8	完形	2区	表土	3期新寛永 カ	寛永通宝
M22		27	鉄製品	不明	(3.5)	0.49		4.0	完形	2区	SX28b		写真のみ
M23		27		鉄滓	(2.92)	0.4		11.0	完形	1－Ⅱ区東	SD2021アゼより南		写真のみ

石製品・石造品				器種	法量（cm）				残存状況	出土地区	出土遺構・層位	石材・型式	備考
					長さ	幅	厚み	重量(g)					
S1	28	28	石器	礫カ	5.58	3.98	3.63	107.0	完形	1－Ⅱ区	SD2023	砂岩	
S2	28	28	石器	砥石	7.05	6.3	1.8	121.8		1－Ⅰ区	南北トレンチ②	粘板岩	
S3	28	29	石造品	一石五輪 塔	35.8	16.4	15.1		火水地輪残存	2区上段	SX02上面	能勢石	
S4	28	29	石造品	一石五輪 塔	45.2	16.4	12.9 10.4		ほぼ完形	2区上段	SX02上面	能勢石	
S5	28	29	石造品	一石五輪 塔	47.1	15.7	15.4 10.9		ほぼ完形	2区南側	南側石組み遺構	能勢石	
S6	28	29	石造品	一石五輪 塔	40.4	14.2	13.3 9.0		ほぼ完形	2区中段	表土	波豆石	
S7	28	29	石造品	一石五輪 塔	49.1	14.9	12.8 8.6		空風火水輪と地 輪3/4残存	2区上段	SX02上面	能勢石 埋め立て式	
S8	28	29	石造品	一石五輪 塔	49.2	14.4	14.1 8.9		ほぼ完形	2区中段	表土	波豆石 埋め立て式	
S9	28	29	石造品	一石五輪 塔	52.1	14.7	12.3 8.9		ほぼ完形	2区南側	南側石組み遺構	能勢石 埋め立て式	
S10	28	29	石造品	一石五輪 塔	52.7	14.3	10.8 9.3		空風火水輪と地 輪3/4残存	2区南側	南側石組み遺構	能勢石 埋め立て式	
S11	28	29	石造品	五輪塔 空風輪	22.8	13.6	12.9		ほぼ完形	2区上段	SX02北側	能勢石	
S12	28	29	石造品	五輪塔 空風輪	19.1	13.6	13.2		若干欠損	2区上段	表土直下	能勢石	
S13	28	29	石造品	五輪塔 空風輪	16.2	11.4	11.2		ほぼ完形	2区上段東側	北斜面	能勢石	
S14	28	29	石造品	五輪塔 空風輪	15.8	11.4	10.7		完形	2区南側	南側石組み遺構	能勢石	
S15	28	29	石造品	五輪塔 火輪	19.3	30.5			ほぼ完形	2区南側	南側石組み遺構	六甲花崗岩	
S16	28	29	石造品	五輪塔 水輪	24.5	31.4	32.0		ほぼ完形	2区南側	南側石組み遺構	能勢石	
S17	28	29	石造品	五輪塔 水輪	16.7	20.1	20.6		ほぼ完形	2区南側	南側石組み遺構	能勢石	
S18	28	29	石造品	五輪塔 地輪	17.2	23.3			ほぼ完形	2区中段	東側	能勢石	
S19	28	29	石造品	台座	24.3	24.0	8.8		ほぼ完形	2区上段	SX02上面	波豆石	
S20	28	29	石造品	台座（基 礎）	26.7	26.4	11.9		ほぼ完形	2区中段	東側	六甲花崗岩	

木製品				器種	法量（cm）			残存状況	出土地区	出土遺構・層位	樹種	備考
					長さ	幅	厚み					
W1	29	30	木製品	杭	112.5	11.9 4.4	7.0 5.8	再利用	1－Ⅰ区	水溜SK1002　床面	クリ	貫通する孔あり・ミカン割り
W2	29	30	木製品	杭	97.6	7.3 12.1 3.1	8.1 7.8 6.4	再利用	1－Ⅰ区	水溜SK1002　床面	クリ	貫通する孔あり・ミカン割り
W3	29	30	木製品	建築部材	137.4	7.7 6.65	5.82 6.2	一端に加工	1－Ⅰ区	水溜SK1002　床面	クリ	芯持丸木
W4	30	30	木製品	丸太材	150.8	10.8 10.6	7.6	一方の先端一部残存	1－Ⅰ区	水溜SK1002　床面	マツ属複維 管束亜属	芯持丸木
W5	30	30	木製品	丸太材	144.8	10.5 10.05	9.3	一方の先端残存	1－Ⅰ区	水溜SK1002　床面	マツ属複維 管束亜属	芯持丸木
W6	30	30	木製品	丸太材	77.8	7.7 9.15	6.85 6.9	一方の先端残存	1－Ⅰ区	水溜SK1002　床面	マツ属複維 管束亜属	芯持丸木

第３章　猪渕遺跡の地形環境

青　木　哲　哉（立命館大学非常勤講師）

１．調査区付近の地形

本遺跡の調査区（１区～３区）は猪名川の支流である猪渕川沿いに位置する。調査区付近の猪渕川沿いには山地に挟まれた狭長な平野がみられ、そこには完新世段丘、現氾濫原、及び支流性扇状地が認められる。１区と３区北東半部は支流性扇状地に、また２区と３区南西半部はその背後（南西側）にみられる山地斜面の下部に位置する。２区と３区の境界付近には山地を刻む小谷が存在し、支流性扇状地はそこから北東へ発達したものである。

１区と３区北東半部の支流性扇状地には、埋没旧中州と埋没旧河道が確認される。１－Ⅰ区には、東西に延びる埋没旧河道とそれを挟む埋没旧中州が分布する。埋没旧中州上では13世紀の掘立柱建物跡と中世末から江戸時代前期の水溜遺構などが検出され、埋没旧河道上には９～10世紀の小規模な流路跡が認められる。

１－Ⅱ区では、３つの埋没旧中州の間を２本の埋没旧河道が南西－北東方向に延びる。埋没旧中州上では、13世紀の掘立柱建物跡や木棺墓などが検出されている。一方、２区と３区南西半部の山地斜面は70%前後の急傾斜である。そこには、中世末から江戸時代の墓が多数分布する。

２．支流性扇状地における堆積物　（第１図・写真図版21）

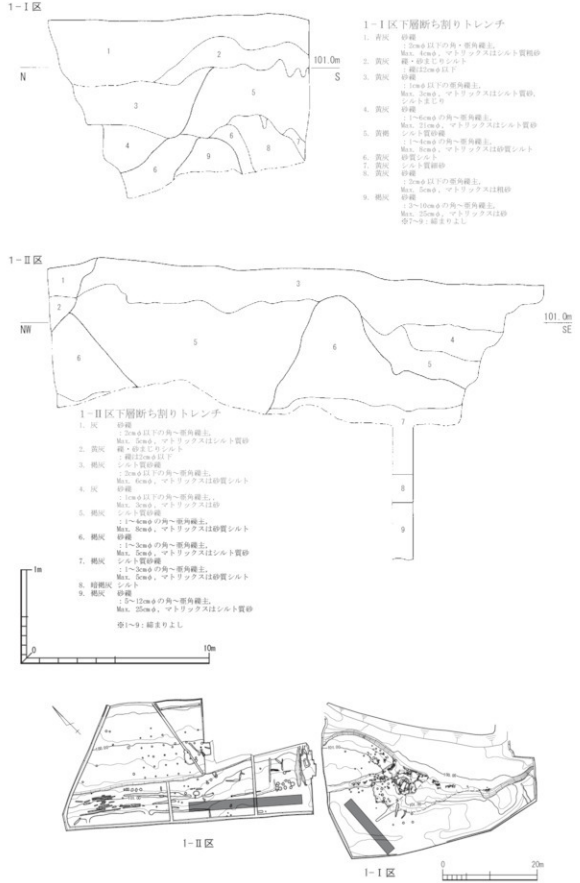
支流性扇状地では、下位から①褐灰色の砂礫、②暗褐灰色のシルト、③褐灰色の砂礫、④黄灰色の礫・砂混じりシルト、⑤青灰色や褐灰色の砂礫、⑥黒褐色のシルト、⑦灰色のシルト、及び⑧現耕土が認められる。褐灰色の砂礫（堆積物①）は比較的大きい径５～12cmの角礫～亜角礫を主体とし、その一部がトレンチ断面で観察される。他方、褐灰色の砂礫（堆積物③）は、１区のほぼ全域に分布し、主に径１～５cmの角礫～亜角礫からなる。この砂礫は支流性扇状地の旧中州堆積物にあたる。これは砂礫やシルトなど（堆積物④～⑦）によって数十cmの厚さで覆われ、そのうち黒褐色のシルト（堆積物⑥）と灰色のシルト（堆積物⑦）にはそれぞれ13世紀ならびに江戸時代の遺物が含まれる。

１－Ⅰ区と１－Ⅱ区に分布する旧河道はともに褐灰色の砂礫（堆積物③）を切る。また、両調査区の境界付近には青灰色や褐灰色の砂礫（堆積物⑤）を切る旧河道がみられる。これらは、２区と３区の境界付近に分布する小谷から連続するもので、１区背後の山地を流下する小規模な支流跡に該当する。旧河道はいずれも径１～３cmの礫を主体とする褐灰色の砂礫やシルト質砂礫に埋積されている。

３．調査区の地形環境

１区と３区北東半部の支流性扇状地は、南西側の山地を刻む小谷から砂礫（堆積物③）がもたらされて発達したものである。その際、支流性扇状地では複数の中州と流路が形成され、流路は砂礫によって埋積された。さらにそこでは、砂礫やシルトなど（堆積物④～⑥）が洪水に伴って堆積し、微地形は９～10世紀に浅く埋没した。こうして形成された埋没旧中州上は、わずかに高く、比較的高燥な環境であった。そのため、１区の埋没旧中州上では13世紀に掘立柱建物や木棺墓がつくられた。

支流性扇状地では、13世紀から中世末までの間にシルト（堆積物⑦）の堆積が洪水によってなされ、その後は洪水の発生しない安定した環境となった。このような環境の下、中世末から江戸時代前期には１－Ⅰ区の埋没旧中州上で人間が再び活動した。また、南西側の山地斜面でも顕著な地形変化がみられず、中世末から江戸時代に２区と３区南西半部の山地斜面が墓域として利用されたのである。



第１図　下層断ち割りトレンチ

第4章　まとめ

1．平安時代前期の遺構・遺物：1－Ⅰ区の西端より東へ開く旧谷地形を検出し、9世紀～10世紀代の遺物の出土をみた。上層に13世紀代の遺物包含層が被覆することから、中世に至るころまでに谷部が埋没していたことは明らかである。山裾部において平安時代前・中期の遺物が確認できたことは、中世前期の屋敷地に先立ち、当地点に居住者があり、猪渕谷の開発が平安時代前期から中期に遡ることを示唆しており興味深い。調査区の南側には2区の山裾が迫っていることから推して、近世に削平を受けた1－Ⅰ区西半部に平安時代の小規模な生活址が存在した可能性が考えられる。

平安時代の遺構・遺物は、猪渕遺跡の東方に広がる広根遺跡においても見つかっている。広根遺跡では中世前期の集落跡が、山裾から猪渕川に向かって広がる比較的なだらかな扇状地上に点在している。中世前期の集落遺跡は、多田院御家人の存在と関連付けて考察することが可能であるが、広根遺跡A－3地区・F－1地区では山裾際に形成された極狭い支流性扇状地から平安時代中期の掘立柱建物跡や土坑群が見つかっている。また、広根遺跡Ⅰ－6地区では、山裾から流れ出る旧河道から同時期の墨書土器や灰釉陶器が出土している。これらの事実は、扇状地上に点在する中世前期の集落遺跡よりも更に立地条件の悪い地点に平安時代の遺跡が点在することを示している。猪渕遺跡においても中世前期の屋敷地よりも更に奥まった場所に占地している点は、中世前期には旧谷部が埋没していることからも明らかな様に、中世前期には安定する扇状地が、平安時代にはまだ安定していなかったためであろう。

上記の平安時代の集落遺跡からは墨書土器や灰釉陶器、緑釉陶器が出土しており、猪名川内陸部の土地開発に伴って出現した初期の開発拠点であった可能性が考えられる。その中の一つが猪渕遺跡であったと考えられる。同様の集落の出現は丹波地域においても認められており（田ノ口遺跡・土井遺跡・平野遺跡）、新名神高速道路に伴う北摂地域の調査では、神戸市北区日下部遺跡や大阪府茨木市千堂寺西遺跡においても検出されている。各地で山裾に住居を営み低湿地の開発を行っていたと考えられる。これらの小規模集落の出現については広根遺跡の分析を通じて更に明らかになるものと考えられる。

2．中世前期の屋敷地について：当該地には中世前期の屋敷地が営まれたと考えられる。1－Ⅱ区では南と東側を溝と沢筋に、北・西側を猪渕川と尾根の張り出しによって限られた空間に、母屋と考えられる大型の掘立柱建物SB2001が1棟存在し、山側に屋敷畠、東側に屋敷墓と考えられる土葬墓2基を検出した。また、沢筋を挟む1－Ⅰ区では小規模な掘立柱建物SB2002が存在している。

屋敷地の範囲は東西・南北ともに50ｍ前後と考えられ、方半町の規模をもっていたと考えられる。畠・墓といった建物周りの様相がとらえられた点は今回の調査成果の一つである。また、沢筋を越えた東側のSB2002は付属屋ととらえられ、屋敷地の外側にも若干の施設があったものと考えられる。

屋敷地からは主に13世紀代の遺物が出土しており、12世紀に遡りうる遺物は伝世が考えられる輸入陶磁器を除けば土坑墓SK1004の瓦器椀などごく少ない。屋敷地の時期と平安時代の開発の間には断絶があったと考えられる。また、華南産陶器は中世集落の中でも丹波市田ノ口遺跡や上郡町竹万宮ノ前遺跡など比較的規模の大きな遺跡から出土している。猪名川町では広根遺跡から出土している。おそらく尼崎市大物などの港湾から猪名川を遡りもたらされたと考えられ、総じて集落規模が小さい猪渕遺跡においても、華南産陶器が手に入りやすい状況があったのだろう。但し、猪渕遺跡は建物数が少なく、日照時間が短い北向きの立地条件である反面、方半町の屋敷地をもち、掘立柱建物SB2001の床面積は82.56㎡と大きい。SB2001は広瀬和雄や橘田正徳の研究を参考にするならば（広瀬1986・橘田1991）、

有力名主層の建物ととらえても遜色なく、屋敷墓の存在からも小規模農民クラスの屋敷地ではない。猪渕遺跡周辺は、源満仲を祖とする多田源氏が開発した多田荘の一部であり、今回発掘された屋敷地についても、鎌倉時代に入って急速に進んだ多田荘の開発や経営に関わった人々の住居と考えられ、それは小規模な農民ではなく有力農民（名主やそれに準ずる層）の屋敷であった可能性は高い。華南産陶器についても威信財といった視点からの分析が必要であろう。

3．中近世墓地に伴う遺構・遺物：元々字高山に所在する墓地（詣り墓）として当地が認識されていたことや、散乱する一石五輪塔の存在から、墓地遺跡が存在したことを疑う余地はない。調査区の更に高所においても五輪塔、石仏、一石五輪塔が見つかっており、広範囲に広がることが判明している。

今回の調査では、２区・３区合わせて 68 基の土坑・焼土坑を検出している。その幾つかが墓あるいは火葬址であることは明らかである。以下に検出した土坑・焼土坑を一覧表として挙げた。土坑は形状から大きく、円形・（隅丸）方形・（隅丸）長方形・楕円形及び不定形に分類することができ、それぞれ埋葬形態の違いを表していると考えられるが、加えて墓でないものが混在している可能性も高い。

円形土坑は２区では SX02・SX03・SX17・SX19・SX21・SX28・SX31・SX43 がある。おおよそ径 90 ㎝から 130 ㎝を測り、筒形に掘り下げられ、底面が平たく深さも 100 ㎝前後と深いものが多い。この中で上部に集石の残る SX21 は人骨が出土しており、座棺土葬墓（早桶）である。また、SX02・SX03 は円形土坑上に一石五輪塔が散在しており、早桶を主体部とする土葬墓である可能性は高い。これらの例から他の円形土坑も座棺土葬墓（早桶）の可能性が考えられる。早桶は県下では 14 世紀代には使用されるが、近世に入って普及する。SX02・SX03 は一石五輪塔の存在から中世末～近世と考えておく。

方形土坑は２区では SX04・SX08 下層・SX12・SX35・SX36 があり、一辺 100 ㎝～ 140 ㎝前後のものが多く、深さは 32 ㎝～ 60 ㎝と円形土坑よりも浅い。土坑から遺物・人骨の出土がなく、性格・時期は確定できないが、対岸の親音寺墓地跡や県内の近世墓地の事例から、方形の座棺（箱棺）であると思われる。兵庫県下では早桶が概ね箱棺に先行するようであるが、具体的な時期は不明である。

２区の SX09・SX16・SX18・SX20・SX39・SX42 は長方形を指向しており、SX09・SX20 では土坑底に腐植土が溜まることから木棺墓あるいは土坑墓の可能性が考えられる。長方形土坑は長 120 ㎝から 150 ㎝を測り、幅は全長の 2/3 程度である。深さは 20 ㎝から 30 ㎝と浅い。人骨・土器・棺釘の出土がなく確定できないが、墓地遺跡内に纏まって存在することから土葬墓（寝棺の木棺墓あるいは土坑墓）の可能性が高い。中世の埋葬姿勢の多くは伸展屈葬から時期が下るにつれ、横臥屈葬あるいは仰臥屈葬姿勢となり、棺が寸詰まりになることが指摘されている（山口県 2002）。概ね中世後期以降寸詰まりの埋葬施設が増加することから、今回の土坑群についても中世後期以降の埋葬施設である可能性は高い。長方形土坑に近い規模の長楕円形土坑 SX23・SX24 についても同様に土坑墓の可能性が考えられる。

SX01 は唯一火葬骨を伴う焼土坑で、火葬址もしくは火葬墓（火葬土坑墓）と判別できる唯一例である。但し、遺物がなく時期は不明である。SX11・SX34 も火葬址の可能性があるが、焼骨は認められなかった。E 群の焼土坑もまた焼骨が出土しておらず、火葬墓・火葬址と確定することは出来なかった。

さて、２区では出土量は少ないが、上段～下段の主に東側の斜面に堆積する黒褐色土・砂礫、中段の暗褐砂礫及び下段の SX26 からは土師器皿・鍋・羽釜片、瓦器椀、丹波焼壺片など中世の土器が一定量出土している。土器の時期は 13 世紀～ 15 世紀代の時期にわたる。また、上段～下段にかけて 17 世紀代の唐津焼皿、19 世紀代の肥前系染付広東碗・瀬戸窯製染付碗など近世前期から近代にかけての陶磁器も出土している。このことから２区斜面が中世前期から近代にかけて長く使用されていたことが想定さ

表６　中近世墓地土坑一覧（２区）

地区	支群	小支群	遺構名	立地	種　別	形状	長さ	幅	深さ	底面の状況	土坑埋土(主に下層)	遺物	時期	備考
2区	A群	A－1	SX01	尾根東斜面	火葬址	楕円形	80cm	50cm	14cm	丸底	黒褐細砂	火葬骨		
		A－1	SX02	尾根上	土葬墓	円形	径80cm～90cm		90cm	丸底	黄褐極細砂		中世末～近世初頭	上部に一石五輪塔・早桶ヵ
		A－1	SX03	尾根上	土葬墓	（楕）円形	70cm	60cm	15cm	凹凸	褐粗砂混じりシルト質極細砂		中世末～近世初頭	上部に一石五輪塔
		A－1	SX04	尾根上		方形か長方形	110～150cm	110cm	15cm	平坦	にぶい黄褐シルト質極細砂			
		A－1	SX05	尾根上		菱形	130cm	85cm	20cm	浅いU字形	黒褐シルト質極細砂		近世以降	古寛永通宝
		A－1	SX06	尾根上		不定形	250cm	120cm以上	20cm	浅い皿形	暗褐粗砂混じり極細砂			
		A－1	SX07	尾根上	ピットヵ	涙滴形	60cm	40cm	10cm	U字形	褐シルト質極細砂			
		A－2	SX21	尾根上	土葬墓	円形	130cm		95cm	平坦	褐シルト質極細砂	土葬骨		集石　早桶ヵ
		A－2	SX13	尾根上		（楕）円形	80cm	70cm	13cm	浅い皿形	褐細砂			
		A－2	SX37	尾根上		楕円形	250cm	120cm	10cm	浅い皿形				
		A－2	SX14	尾根上		楕円形	140cm	100cm	10cm	浅い皿形				
	B群	B－1	SX08上層	尾根西斜面		俵形	76cm	62cm	25cm	箱形	にぶい黄褐シルト質極細砂			土坑底に焼土ヵ
		B－1	SX08下層	尾根西斜面		隅丸方形	120cm	114cm	12cm					
		B－1	SX10上層	尾根西斜面		おむすび形	68cm	54cm	50cm	箱形	黄褐極細砂			
		B－1	SX10下層	尾根西斜面		隅丸長方形	105～130cm	60cm	6cm					
		B－1	SX38	尾根西斜面		楕円形	70cm	60cm	18cm	U字形				
		B－1	SX39	尾根西斜面	土葬墓	隅丸長方形	130～165cm	108cm	20cm	浅いU字形				土坑墓ヵ
		B－2	SX09	尾根西斜面	土葬墓	隅丸長方形	140～150cm	100～110cm	45cm	箱形	オリーブ褐シルト質細砂・極細砂			土坑底に腐植土・木棺墓
		B－2	SX40	尾根西斜面		涙滴形	100cm	64cm	10cm	浅いU字形				
		B－2	SX41	尾根西斜面		卵形	70cm	54cm	48cm	U字形				
		B－2	SX42	尾根西斜面	土葬墓ヵ	隅丸長方形	120～135cm	80cm	50cm	浅い皿形				土坑墓ヵ
		B－2	SX43	尾根西斜面	土葬墓ヵ	俵形	100cm	85cm	30cm	平坦				座棺土葬墓ヵ
		B－3	SX12	尾根西斜面	土葬墓ヵ	隅丸方形ヵ	160cm	148cm	20cm	浅い皿形	オリーブ褐細砂			底面は傾斜に沿って傾く
		B－4	SX15	尾根西斜面		おむすび形	70cm	54cm	6cm	浅い皿形				
		B－4	SX16	尾根西斜面	土葬墓ヵ	隅丸長方形	120cm	100cm	22cm	船底形	黒褐極細砂			土坑墓ヵ
		B－4	SX17	尾根西斜面		楕円形	68cm	62cm	10cm	浅い皿形				
		B－4	SX18	尾根西斜面	土葬墓ヵ	隅丸長方形	130cm	80cm	8cm	箱形・平坦	暗褐細砂			土坑墓ヵ
		B－4	SX44	尾根西斜面		不整円形	40cm	38cm	12cm	U字形				
		B－4	SX19	尾根西斜面	土葬墓ヵ	カマボコ形	122cm	115cm	16cm		オリーブ褐シルト質極細砂			中央に86×84cmの窪み、座棺ヵ
		B－4	SX20	尾根西斜面	土葬墓ヵ	隅丸長方形	135cm	108cm	22cm	箱形・平坦	黒褐細砂			土坑墓もしくは木棺墓ヵ
	C群	C－1	SX23	尾根間谷底	土葬墓ヵ	長楕円形	130cm	68cm	6cm	浅い皿形・平坦	黄褐細砂～極細砂			土坑墓ヵ
		C－1	SX45	尾根間谷底		不整円形	62cm	56cm	20cm	U字形				
		C－1	SX22	尾根間谷底		おむすび形	65cm	46cm	8cm	浅い皿形				
		C－1	SX24	尾根間谷底	土葬墓ヵ	長楕円形	150cm	80cm	31cm	U字形・2段				土坑墓ヵ
		C－1	SX25	尾根間谷底		楕円形	122cm	95cm	8cm	浅い皿形				
		C－2	SX11	尾根間谷底	焼土坑	不整台形	116cm	90cm	10cm	浅い皿形	炭・焼土			火葬址ヵ
		C－2	SX29	尾根間谷底		不整な卵形	194cm	142cm	20cm	V字形				倒木ヵ
	D群	D－1	SX36	尾根斜面西	土葬墓ヵ	隅丸方形	125cm	105cm	45cm	箱形				方形棺ヵ
		D－1	SX35	尾根最上位	土葬墓ヵ	隅丸台形	140cm	120cm	32cm	箱形				方形棺ヵ
		D－1	SX34	尾根上	火葬址ヵ	円形ヵ	(150cm)	(60cm)	30cm	浅い皿形	被熱の可能性			
		D－1	SX33	尾根上	土葬墓	不整米粒形	160cm	115cm	80cm	箱形		鳩笛103	近世	
		D－1	SX32	尾根上	土葬墓ヵ	隅丸方形	140cm	126cm	60cm	箱形				方形棺ヵ
		D－2	SX26	尾根上		方形石組み	290cm	170cm				94・95		区画の石組み
		D－3	SX28a	尾根先端	ゴミ穴ヵ	俵形	94cm	76cm	50cm	箱形		近代の陶磁器・99	近現代	集石土坑、ゴミ穴ヵ
		D－3	SX28b	尾根先端	土葬墓	円形	120cm		130cm	筒形・平坦	褐灰細砂			座棺土葬墓ヵ
		D－3	SX30	尾根先端		不整楕円形	65cm	45cm						上部に自然石
		D－3	SX31	尾根先端	土葬墓ヵ	不整円形	100cm	85cm	110cm	深いU字形		100		上面に集石・座棺（早桶）ヵ

れる。また、１－Ⅰ区の石列裏込め（黄褐色土）からは17世紀代の唐津・須佐唐津焼と共に中世の土師器鍋・瓦器椀が出土している。２区あるいは１－Ⅰ区南半の斜面を掘り崩し、黄褐色土を北側へ押し出した可能性が高く、掘り崩した部分に中世前期～近世前期の土器が存在していたことを示している。

表７　中近世墓地跡土坑一覧（３区）

地区	支群	小支群	遺構名	立地	種　別	形状	長さ	幅	深さ	底面の状況	土坑埋土（主に下層）	遺物	時期	備考
３区	E群	E－1	SX03	東向き斜面	焼土坑ヵ	土坑群	310 cm 以上	200 cm 以上			炭化物・黒褐極細砂			
		E－1	SX14	東向き斜面	土葬墓ヵ	不整円・方形	135～140 cm		70 cm	筒形・平坦				円もしくは方形棺墓ヵ
		E－1	SX04	東向き斜面		不整隅丸方形	78 cm	60 cm	15 cm	丸底	黒褐細砂			
		E－1	SX05	東向き斜面		勾玉形	130 cm	70 cm 前後	15 cm	皿形				底面は傾斜に沿って傾く
		E－1	SX02	東向き斜面		不整楕円形	160 cm	84 cm	85 cm	箱形				
		E－1	SX21	東向き斜面		不整楕円形	115 cm	65 cm 以上	5 cm	浅い皿形				
		E－2	SX06	東向き斜面	焼土坑	円形	125 cm		5 cm	浅い皿形	焼土			火葬址ヵ
		E－2	SX07	東向き斜面	焼土坑	楕円形	130 cm	110 cm	5 cm	浅い皿形	オリーブ褐細砂・炭・被熱面			火葬址ヵ
		E－3	SX08	東向き斜面		不整円・多角	140 cm	120 cm 以上	20 cm	浅い皿形	黄褐シルト質極細砂			
		E－3	SX01	東向き斜面	焼土坑	円形	45 cm		5 cm	浅い皿形	オリーブ褐細砂・焼土			
		E－4	SX13	東向き斜面	土葬墓ヵ	円形	径 75 cm～78 cm		15 cm	浅い箱形・平坦	黄褐極細砂・細砂			上面に板石・早桶ヵ
		E－4	SX15	東向き斜面		不整卵形	140 cm	120 cm 前後	25 cm	U字形	オリーブ褐極細砂			
		E－4	SX16	東向き斜面	焼土坑	不整宝珠形	112 cm	100 cm 前後		U字形	黄褐粗砂混じりシルト質極細砂・被熱			
		E－5	SX09	東向き斜面		不整円形	径 75 cm		17 cm	U字形	黒褐細砂			
		E－5	SX10	東向き斜面		不整円形	径 50 cm		17 cm	U字形	褐細砂			
		E－5	SX11	東向き斜面		長楕円形	（94 cm）	（43 cm）	30 cm	浅い皿形	褐シルト質細砂			
		E－5	SX11	東向き斜面		不整楕円形	90 cm	75 cm	12 cm	浅いU字形	黄褐小礫			
		E－6	SX17	北向き緩斜面		不整円形	径 50 cm		10 cm	浅いU字形	炭化物・黒褐細砂			被熱はない。
		E－6	SX18	北向き緩斜面	焼土坑	長楕円形	294 cm	106 cm	14 cm	皿形	炭化物・黒中～細砂・被熱	肥前系染付瓦質羽釜	18c	
		E－6	SX19	北向き緩斜面		洋梨形	105 cm	100 cm	15 cm	浅いU字形	炭化物・黒中～細砂			
		E－6	SX22	北向き緩斜面	焼土坑	不整長方形	170 cm	95 cm			炭層・被熱			

以上、出土遺物から推測した場合、13 世紀代から中世全般にかけて、２区斜面あるいはその上部が利用されていることがわかる。中段は斜面を大きく開削し、スペースを造りだし土坑群を形成しているが、土坑の多くが下段側斜面寄りで見つかっていることから、土坑群形成以降に中段が開削され、南寄りの土坑は消滅したとも考えられる。そして、中段の開削土が１－Ⅰ区の整地に使用されていると考えるならば、元々存在した中段の斜面には中世の遺構が存在した可能性がある。また、上段より上部に一石五輪塔・五輪塔・石仏が点在することから推して、２区よりも更に斜面上方にも中世墓地が存在する可能性が考えられる。SX01 は上方にある中世火葬墓地の一角であった可能性も考えられよう。

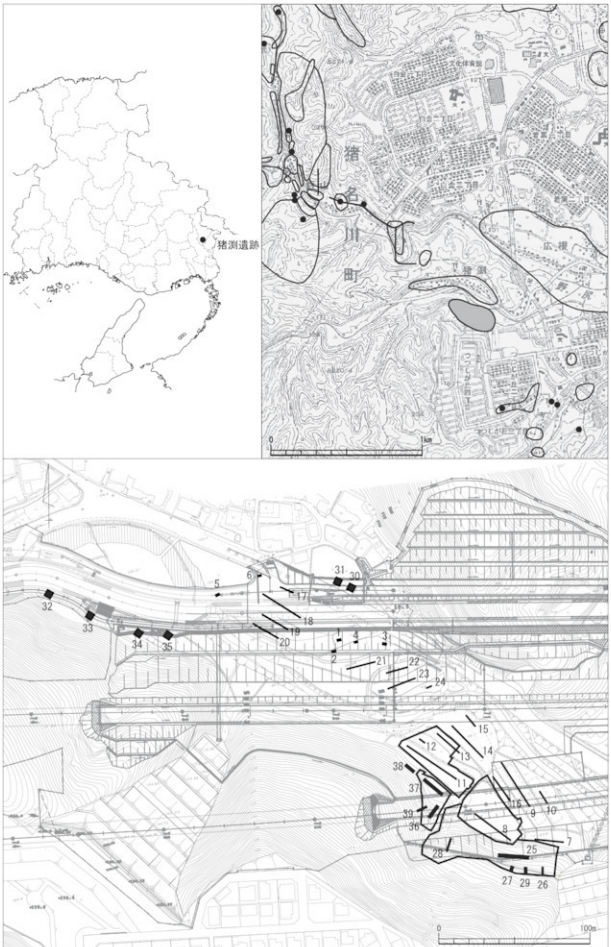
今回の調査では中世墓地の存在・火葬址・円形土坑・方形土坑・長方形土坑の性格・時期など確定できない点が多く残った。新名神高速道路建設工事に伴い調査を実施した観音寺墓地跡は対岸にある寺院・墓地遺跡である。ここからは中世～近現代の土葬墓・火葬墓が多数出土しており、尾根上の中世火葬墓地から麓の近代土葬墓地へと順次時期が新しくなってゆく。また、一石五輪塔を上面にもつ早桶や副葬品をもつ箱棺、寸詰まりの木棺が検出されている。観音寺墓地跡の分析を通して明らかになる部分も多々あると考えられる。改めて猪渕遺跡の土坑群の評価を行うこととしたい。

（参考文献）

橘田正徳「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』　1991 年　日本中世土器研究会

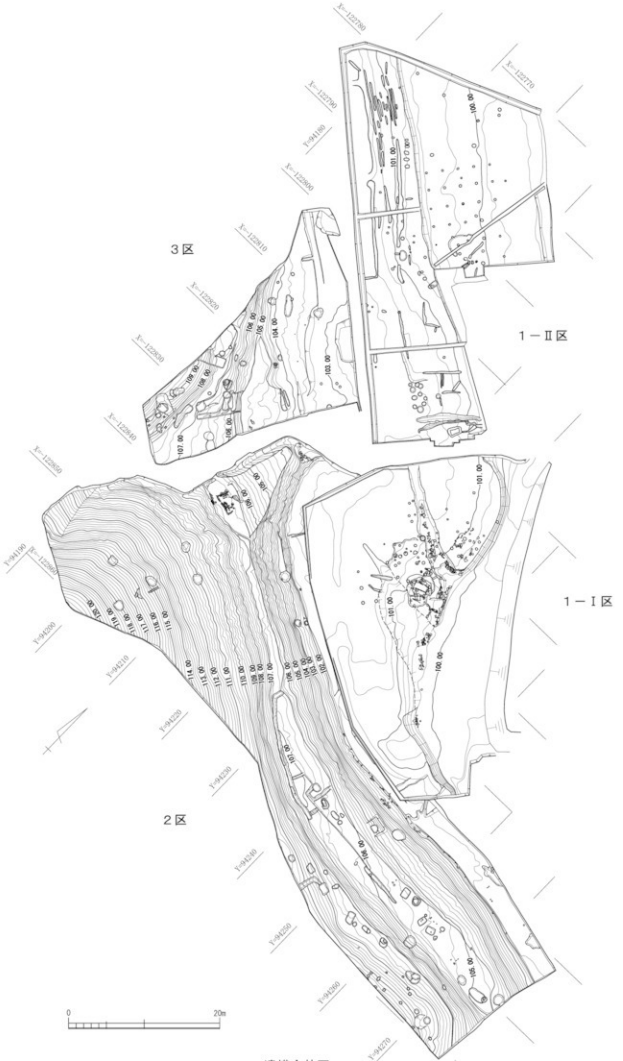
広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座日本考古学６　変化と画期』　1986 年　岩波書店

（財）山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター『向田遺跡Ⅱ』　2002 年

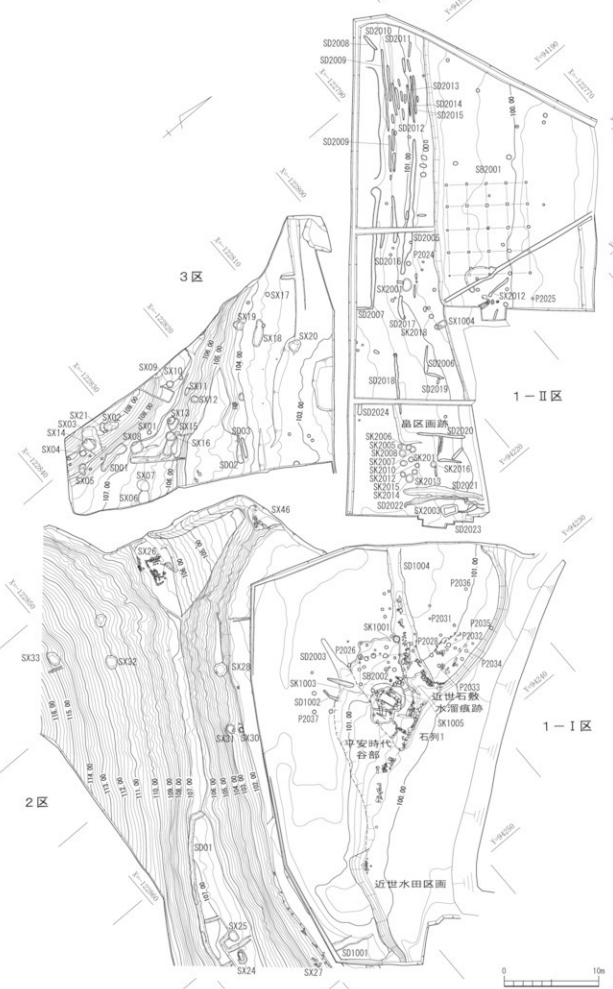


調査地点位置図

図版 2

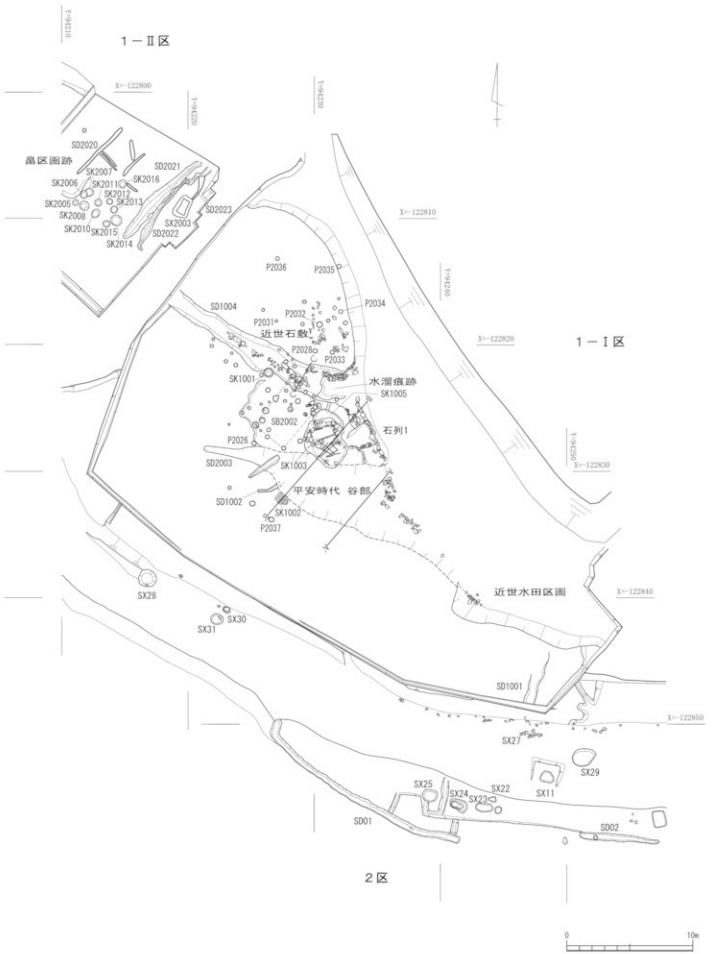


遺構全体図



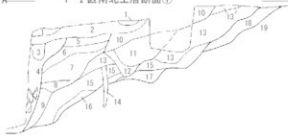
遺構平面図詳細図Ⅰ（中世集落）

図版4



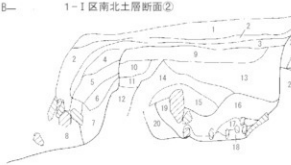
1－Ⅰ区　古代～中世集落

A——　1－Ⅰ区南北土層断面①　101.6m　A'

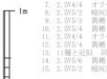


1. 2.5Y6/3　にぶい黄　小礫（φ5mm）混じり中～粗砂（整地土）
2. 2.5Y6/2　灰黄　粗砂混じりシルト質褐細砂（旧耕土）
3. 2.5Y4/4　オリーブ褐　小礫（φ5mm）混じり細～褐細砂
4. 2.5Y6/2　灰黄　小礫混じりシルト質褐細砂（畝土）
5. 2.5Y4/4　オリーブ褐　小礫（φ5mm）混じり褐細砂（若干土壌化した整地土）
6. 2.5Y5/3　黄褐　小礫（φ5mm）混じり褐細砂（若干土壌化した整地土）
7. 2.5Y4/4　オリーブ褐　小礫（φ5mm）混じり褐細砂（畝土）
8. 2.5Y5/2　暗灰黄　小礫（φ5～1cm）混じり中～粗砂（畝土）
9. 2.5Y4/4　オリーブ褐　小礫（φ～5mm）混じり細～中砂
10. 2.5Y5/2　暗灰黄　小礫（φ5mm）混じり褐細砂
11. 2.5Y5/3　黄褐　小礫（φ5mm）混じり中～細砂（畝土ヵ）
12. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐　小礫（φ5mm）混じり中～細砂（畝土）
13. 2.5Y4/3　オリーブ褐　小礫（φ5mm）混じり褐細砂
17. 土壌化している
14. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐　粗砂混じり褐細砂（ピットヵ）
15. 2.5Y4/3　オリーブ褐　小礫混じり細砂（黒褐色土・中世包含層）
16. 2.5Y6/3　黄褐　小礫（φ5mm）混じり中～粗砂（黒褐色土最下面）
17. 2.5Y6/3　にぶい黄　シルト混じり細礫（旧谷埋形）
18. 2.5Y4/6　オリーブ褐　小礫（φ5mm）混じりシルト質褐細砂（ベース）
19. 2.5Y6/4　にぶい黄　シルト混じり小礫（φ1cm）（地山）

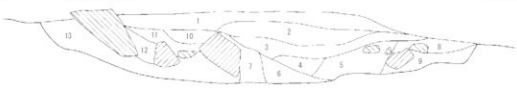
B——　1－Ⅰ区南北土層断面②　101.6m　B'



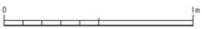
1. 2.5Y6/3　にぶい黄　小礫混じり中～粗砂（整地土　断面①層）
2. 2.5Y6/2　灰黄　粗砂混じりシルト質褐細砂（旧耕土　断面①層）
3. 2.5Y4/4　オリーブ褐　小礫（φ5mm）混じり褐細砂（若干土壌化した整地土）
4. 2.5Y4/3　オリーブ褐　細礫（φ3mm）混じり細～中砂（土壌化した整地土）
5. 2.5Y5/3　黄褐　粗砂混じり褐細砂（畝土）
6. 2.5Y5/4　黄褐　粗砂混じり細～中砂（畝土）
7. 2.5Y4/4　オリーブ褐　粗砂混じり細～中砂（畝土）
8. 2.5Y5/2　暗灰黄　礫混じり（φ～1cm）粗砂
9. 2.5Y5/3　黄褐　小礫（φ5mm）混じり褐細砂（土壌化した整地土）
10. 2.5Y5/4　黄褐　小礫（φ5mm）混じり細～中砂
11. 2.5Y4/4　オリーブ褐　小礫（φ5mm）混じり褐細砂
12. 2.5Y5/4　黄褐　小礫（φ5mm）混じりシルト質褐細砂
13. 11層と近似　同一層ヵ
14. 2.5Y5/6　黄褐　小礫（φ2mm）混じり褐細砂
15. 2.5Y5/2　暗灰黄　小礫（φ5mm）混じりシルト質褐細砂（SK1003埋積土）
16. 10G7/1　緑灰　小礫（φ5mm）混じりシルト質粗砂（SK1003埋土　グライ化する）
17. 7.5Y4/1　灰　小礫（φ5mm）混じりシルト質褐細砂（SK1003埋土　グライ化する）
18. 2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混じりシルト（固結質ローム　SK1003埋土）
19. 10YR4/3　にぶい黄褐　小礫（φ1cm）混じりシルト質褐細砂（SK1003最古埋土）
20. SK1003埋土
21. 2.5Y5/2　暗灰黄　小礫（φ5mm）混じり褐細砂
22. 2.5Y4/2　暗灰黄　小礫（φ5mm）混じり褐細砂（土壌化する）
23. 2.5Y4/2　暗灰黄　小礫（φ5mm）混じり褐細砂（整地土やや土壌化する）
24. 2.5Y4/3　オリーブ褐　小礫混じり褐細砂（黒褐色土　中世包含層）
25. 2.5Y4/3　オリーブ褐　小礫混じり褐細砂（黒褐色土　中世包含層）
26. 2.5Y4/2　暗灰黄　小礫（φ5mm）混じり褐細砂（黒褐色土下半）
27. 2.5Y6/3　にぶい黄　シルト混じり小礫（φ2～5mm）（旧谷埋形）
28. 2.5Y4/6　オリーブ褐　小礫（φ5mm）混じりシルト質褐細砂（ベース）
29. 2.5Y6/6　明黄褐　シルト質褐細砂（ベース）
30. 2.5Y6/4　にぶい黄　シルト混じり小礫（φ1cm）（地山）



C——　SD1004土層断面　101.3m　C'

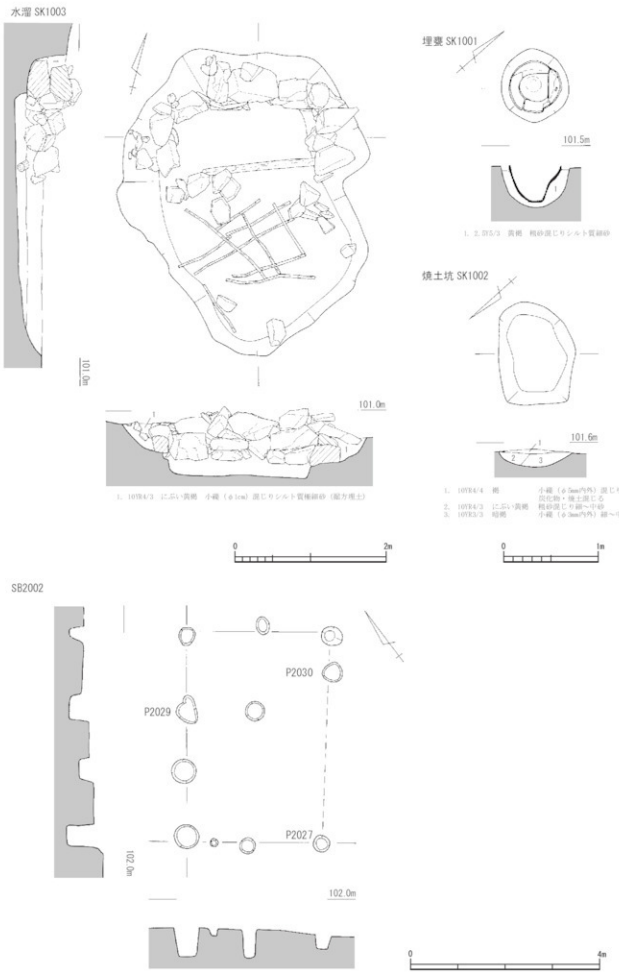


1. 2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混じり細～中砂
2. 5Y5/1　灰　小礫（φ3mm）混じり細～中砂
3. 2.5Y5/1　黄灰　シルト質粗砂混じり中砂
4. 2.5Y5/1　黄灰　シルト質褐細砂混じり粗砂
5. 2.5Y5/1　黄灰　粗砂混じりシルト質褐細砂（マンガン沈着）
6. 5Y5/1　灰　中礫（φ3cm内外）混じり粗～細砂
7. 5Y6/1　灰　粗砂混じりシルト
8. 5Y6/2　灰オリーブ　小礫（φ5mm内外）混じりシルト質褐細砂
9. 5Y5/1　灰　シルト質小礫（φ5mm内外）細～中砂
10. 2.5Y5/4　黄褐　粗砂混じり細～中砂
11. 2.5Y6/1　黄灰　粗砂混じりシルト質褐細砂
12. 2.5Y5/2　灰オリーブ　粗砂混じりシルト
13. 2.5Y5/2　暗灰黄　小礫（φ3mm）混じりシルト質細～中砂

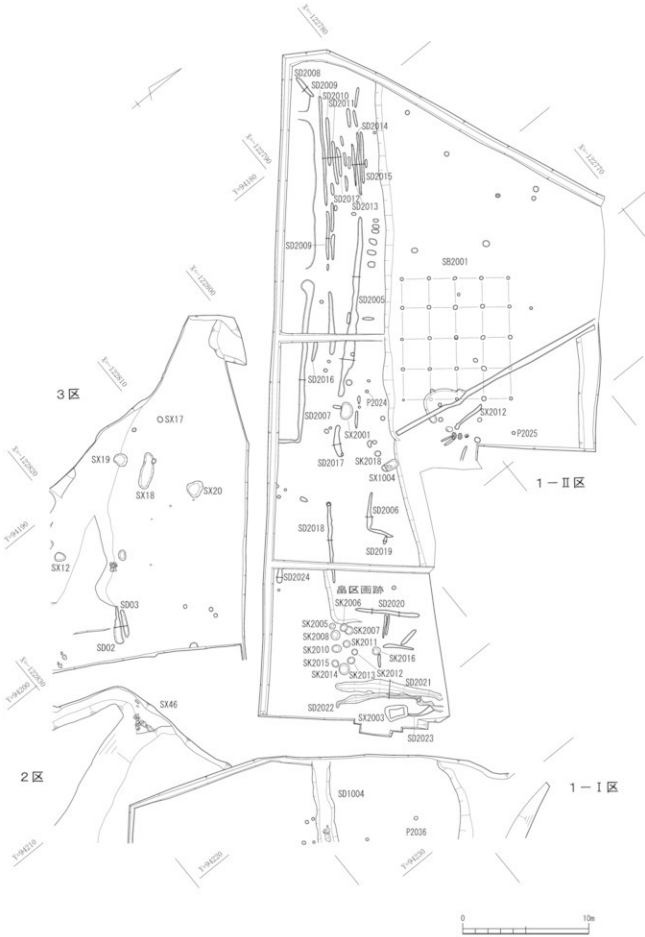


1－Ⅰ区　各土層断面

図版 6

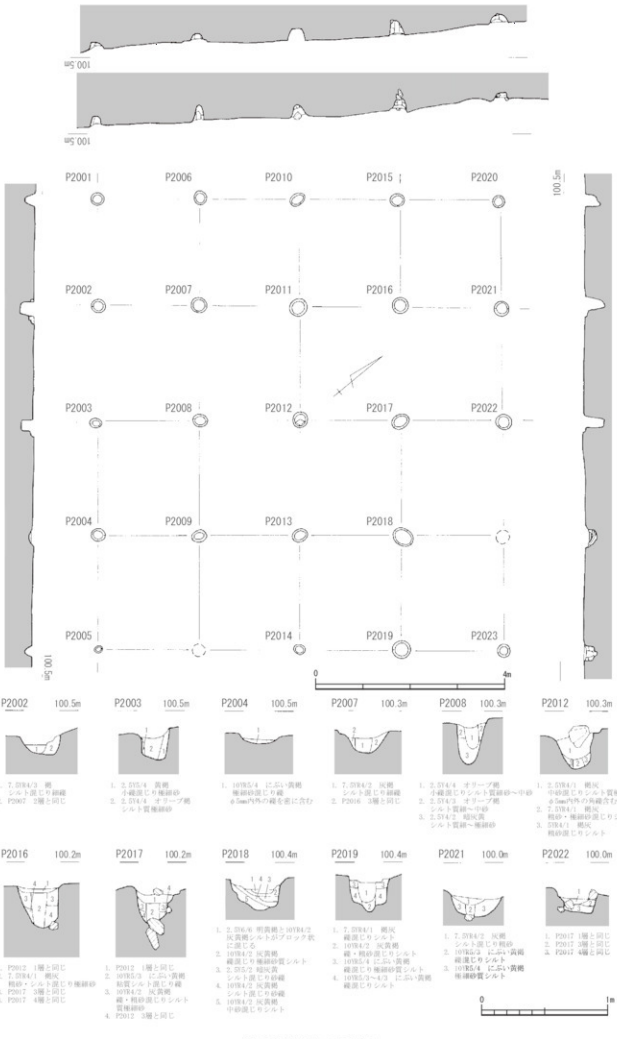


1－Ⅰ区　水溜遺構・埋甕・焼土坑・掘立柱建物跡



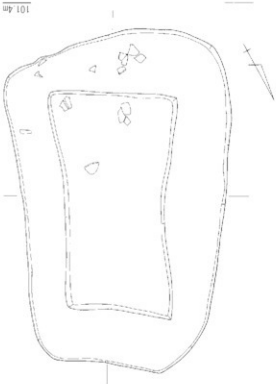
1－Ⅱ区　中世前期の屋敷地

図版 8

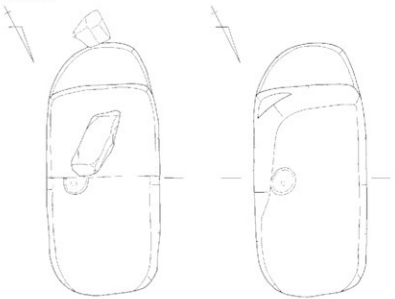


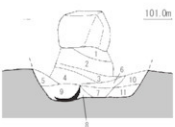
掘立柱建物跡ＳＢ2001

木棺墓SX2003



土坑墓SX1004

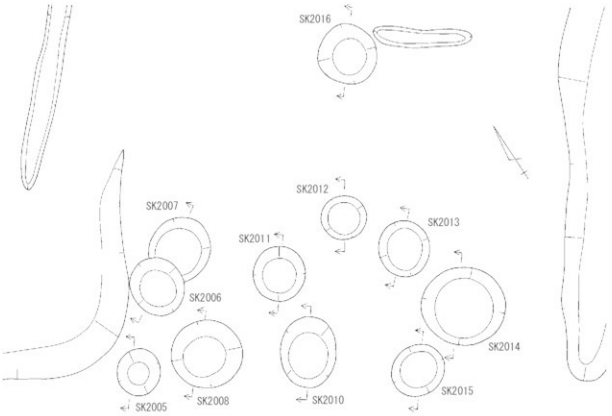


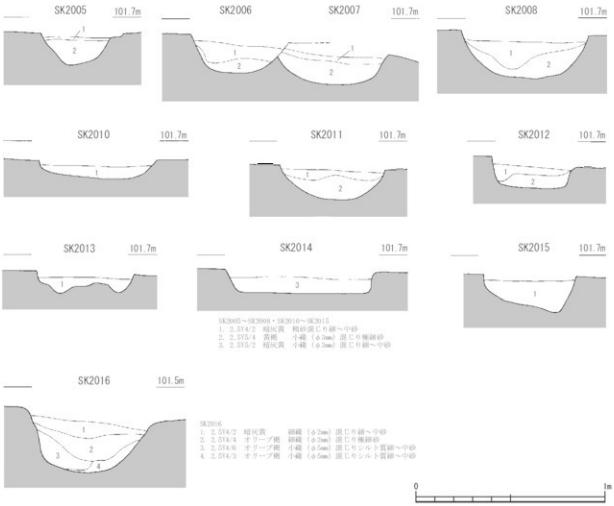


1. 10YR4/3 にぶい黄褐 小礫（φ2mm）混じり細～極細砂
2. 10YR4/4 褐 粗砂混じり細～中砂
3. 10YR3/4 暗褐 小礫（φ1cm）混じり極細砂
4. 10YR4/4 褐 小礫（φ5mm）混じりシルト質極細砂
5. 10YR3/4 暗褐 小礫（φ5mm）混じりシルト質極細砂
6. 10YR4/4 褐 粗砂混じりシルト質極細砂
7. 10YR4/3 にぶい黄褐 小礫（φ5mm）混じりシルト質極細砂
8. 10YR5/4 にぶい黄褐 小礫（φ5mm）混じりシルト質～極細砂
9. 10YR4/3 にぶい黄褐 小礫（φ3mm）混じりシルト質極細砂
10. 10YR5/4 にぶい黄褐 小礫（φ5mm）混じりシルト質細～中砂
11. 10YR4/6 褐 小礫（φ3mm）・粗砂混じりシルト質極細砂

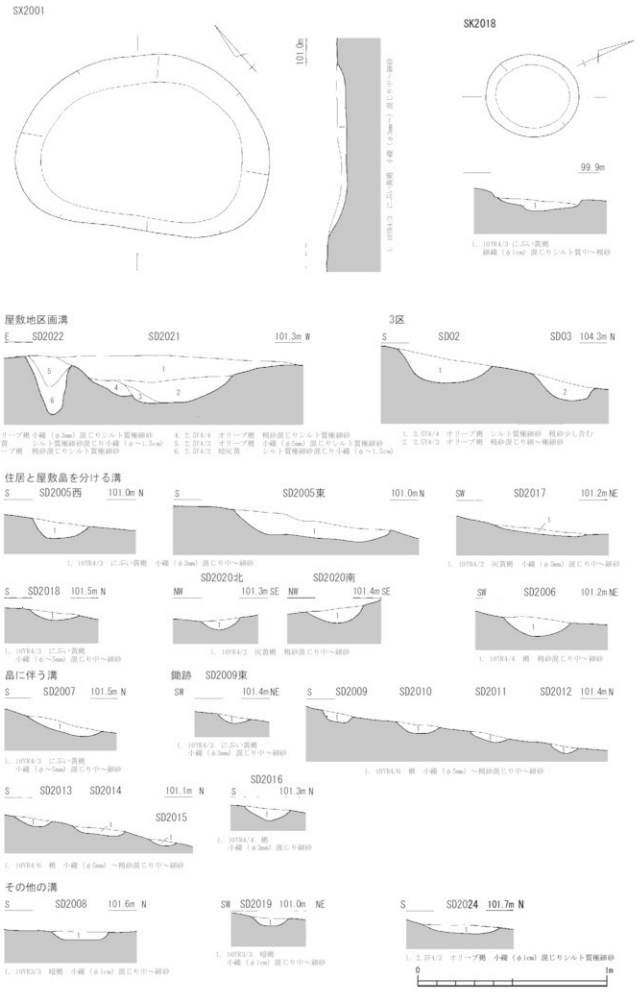
木棺墓ＳＸ2003・土坑墓ＳＸ1004

図版 10

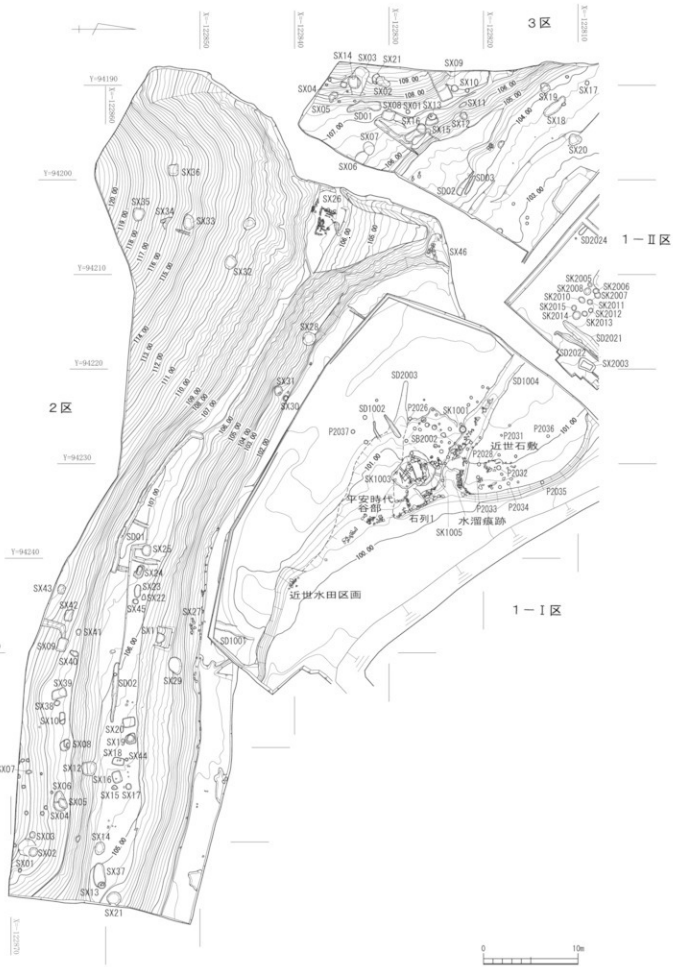

SK2016
SK2007
SK2012
SK2013
SK2011
SK2006
SK2014
SK2015
SK2005
SK2008
SK2010
0
2m


SK2005 101.7m
SK2006 SK2007 101.7m
SK2008 101.7m
SK2010 101.7m
SK2011 101.7m
SK2012 101.7m
SK2013 101.7m
SK2014 101.7m
SK2015 101.7m
SK2005～SK2008・SK2010～SK2015
1. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混じり細～中砂
2. 2.5Y5/4 黄褐 小礫（φ2mm）混じり極細砂
3. 2.5Y5/2 暗灰黄 小礫（φ2mm）混じり細～中砂
SK2016 101.5m
SK2016
1. 2.5Y4/2 暗灰黄 細礫（φ2mm）混じり細～中砂
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐 細礫（φ2mm）混じり極細砂
3. 2.5Y4/6 オリーブ褐 小礫（φ5mm）混じりシルト質細～中砂
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐 小礫（φ5mm）混じりシルト質細～中砂
0
1m

1－Ⅱ区　土坑群

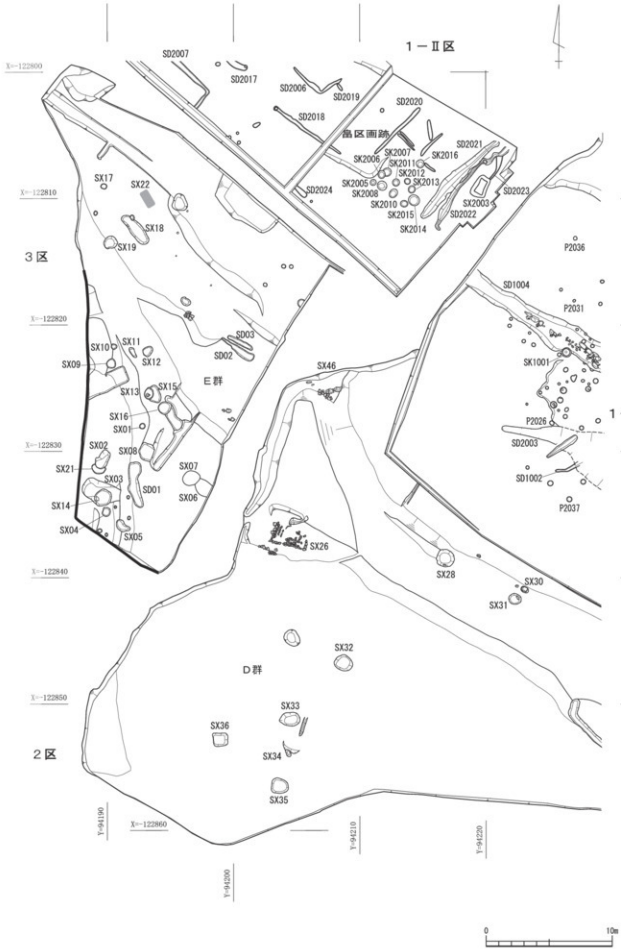

SX2001
101.0m
1. 10YR4/2 にぶい黄橙 小礫（φ3mm～）混じり中～細砂
SK2018
99.9m
1. 10YR4/3 にぶい黄橙
細礫（φ1cm）混じりシルト質中～粗砂
屋敷地区画溝
E SD2022 SD2021 101.3m W
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 小礫（φ3mm）混じりシルト質極細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂混じり小礫（φ～1.5cm）
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂混じりシルト質極細砂
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐 粗砂混じりシルト質極細砂
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐 小礫（φ5mm）混じりシルト質極細砂
6. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂混じり小礫（φ～1.5cm）
3区
S SD02 SD03 104.3m N
1. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト質極細砂 粗砂少し含む
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂混じり細～極細砂
住居と屋敷畠を分ける溝
S SD2005西 101.0m N
1. 10YR4/3 にぶい黄褐 小礫（φ3mm）混じり中～細砂
S SD2005東 101.0m N
SW SD2017 101.2m NE
1. 10YR4/2 灰黄褐 小礫（φ5mm）混じり中～細砂
SD2020北
SD2020南
S SD2018 101.5m N
1. 10YR4/3 にぶい黄褐
小礫（φ～5mm）混じり中～細砂
NW 101.3m SE
NW 101.4m SE
1. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混じり中～細砂
SW SD2006 101.2m NE
1. 10YR4/4 褐 粗砂混じり中～細砂
畠に伴う溝
鋤跡 SD2009東
S SD2007 101.5m N
1. 10YR4/3 にぶい黄褐
小礫（φ～5mm）混じり中～細砂
SW 101.4m NE
1. 10YR4/3 にぶい黄褐
小礫（φ3mm）混じり中～細砂
S SD2009 SD2010 SD2011 SD2012 101.4m N
1. 10YR4/6 褐 小礫（φ5mm）～粗砂混じり中～細砂
S SD2013 SD2014 101.1m N
SD2015
SD2016
S 101.3m N
1. 10YR4/4 褐
小礫（φ3mm）混じり細砂
1. 10YR4/6 褐 小礫（φ5mm）～粗砂混じり中～細砂
その他の溝
S SD2008 101.6m N
1. 10YR3/3 暗褐 小礫（φ1cm）混じり中～細砂
SW SD2019 101.0m NE
1. 10YR3/3 暗褐
小礫（φ1cm）混じり細砂
S SD2024 101.7m N
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 小礫（φ1cm）混じりシルト質極細砂
0 1m

1－Ⅱ区・3区 土坑・溝


3区
1－Ⅱ区
2区
1－Ⅰ区
近世水田区画
平安時代谷部
石列1
水溜痕跡
近世石敷
SB2002
SK1003
SK1005
SD1001
SD2003
SD1004
SD1002
SD2037
SD2024
SD2021
SD2027
SK2003
SK2005
SK2006
SK2008
SK2007
SK2010
SK2011
SK2015
SK2012
SK2014
SK2013
P2025
SK1007
P2031
P2036
P2028
P2032
P2033
P2034
P2035
SX01
SX02
SX03
SX04
SX05
SX06
SX07
SX08
SX09
SX10
SX11
SX12
SX13
SX14
SX15
SX16
SX17
SX18
SX19
SX20
SX21
SX22
SX23
SX24
SX25
SX26
SX27
SX28
SX29
SX30
SX31
SX32
SX33
SX34
SX35
SX36
SX37
SX38
SX39
SX40
SX41
SX42
SX43
SX44
SX45
SX46
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SD31
SD32
SD33
SD34
SD35
SD36
SD37
SD38
SD39
SD40

X=122860
X=122940
Y=94220
Y=94230
X=122860
Y=94240
Y=94250
Y=94260
Y=94270
X=122870
D群
SX31
SX30
P2037
平安時代 谷部
調査区南側石組み遺構
SD01
SX25
SX24
SX23
C群
SX22
SX45
SX43
SX42
SX41
SX27
SD1001
近世水田区画
SX11
SX09
SX40
SX29
SD02
SX39
SX38
B群
SX10
SX20
1－Ⅰ区
SX19
SX08
SX18
SX07
SX12
SX16
SX06
SX15
SX17
2区
SX05
SX04
SX03
SX02
SX14
SX01
SX37
A群
SX13
SX21
0
10m

中近世墓　A～C群

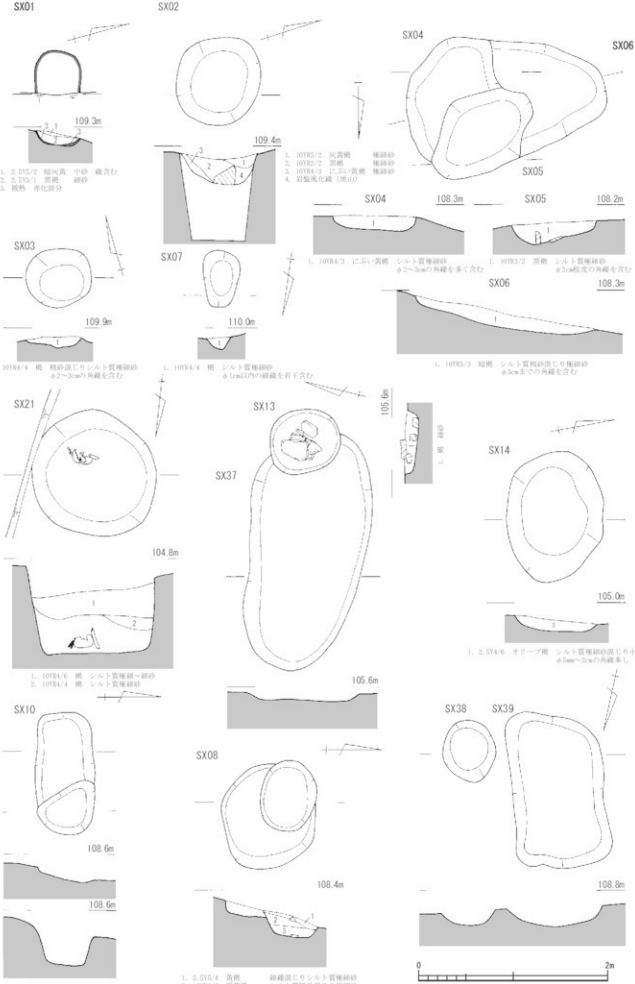

1－Ⅱ区
1－Ⅰ区
2区
3区
D群
E群
畠区画跡
SD2007
SD2017
SD2006
SD2019
SD2020
SD2018
SD2021
SK2007
SK2016
SK2006
SK2011
SK2012
SK2005
SK2013
SK2008
SD2024
SD2023
SK2010
SK2003
SK2015
SD2022
SK2014
SX17
SX22
SX18
SX19
P2036
SD1004
P2031
SK1001
SD03
SD02
SX46
SX10
SX11
SX09
SX12
SX13
SX15
SX16
SX01
P2026
SD2003
SX02
SX08
SX21
SX07
SX03
SD01
SD1002
SX14
SX06
P2037
SX04
SX05
SX26
SX28
SX30
SX31
SX32
SX33
SX36
SX34
SX35
X=-122800
X=-122810
X=-122820
X=-122830
X=-122840
X=-122850
X=-122860
Y=-94190
Y=-94200
Y=-94210
Y=-94220
0
10m

中近世墓　D・E群

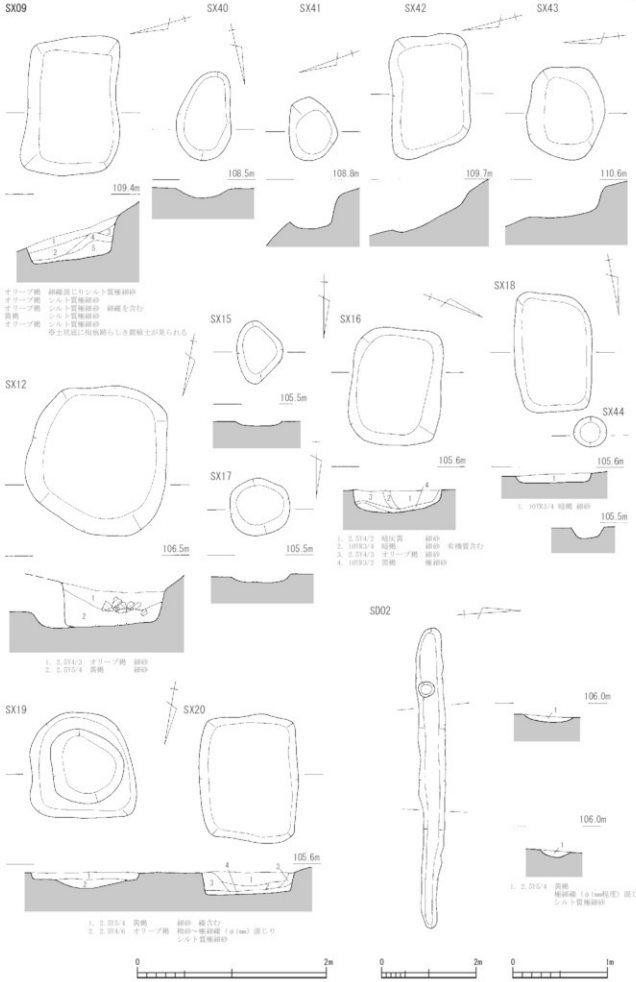
1. 表土
2. 2.5Y5/3　黄褐　　細砂混じりシルト質極細砂
3. 2.5Y5/4　黄褐　　シルト質極細砂　φ5mm～1cmの角礫を含む
4. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質粗砂混じり極細砂　φ2～5mmの角礫を含む
5. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂　φ2～5mmの角礫を含む
6. 10YR5/4　にぶい黄褐　粗砂混じりシルト質極細砂
7. 10YR4/2　灰黄褐　　シルト質細～極細砂　φ5mm～1cmの角礫を多く含む
8. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質細～極細砂　φ3～5mmの角礫を少し含む
9. 10YR4/2　灰黄褐　　粗砂混じり細～極細砂（撹乱）
10. 2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト質粗砂混じり極細砂
11. 2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト質粗砂混じり極細砂　φ3～5mmの角礫を少し含む

3区　南壁土層断面図

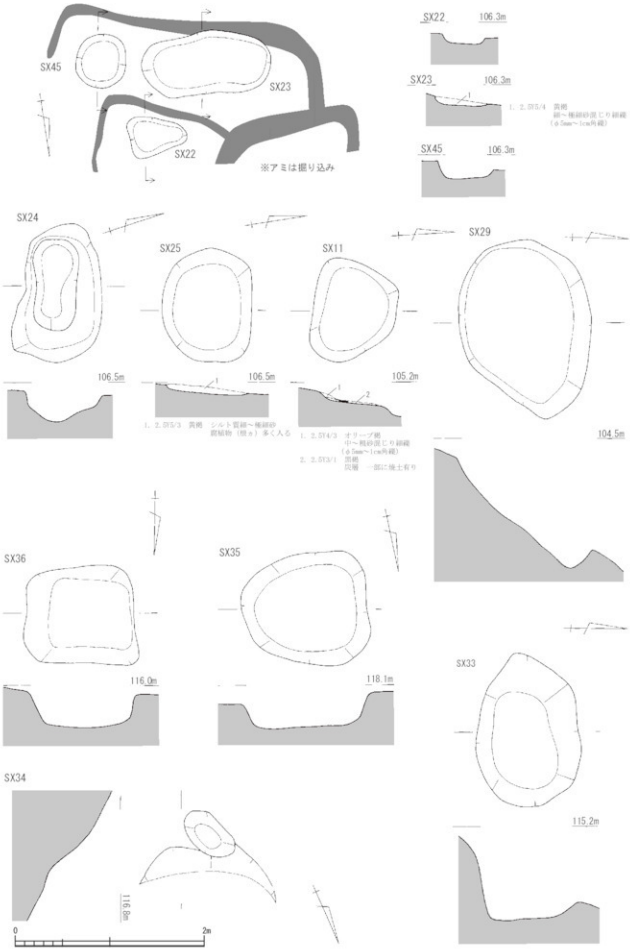
図版 16



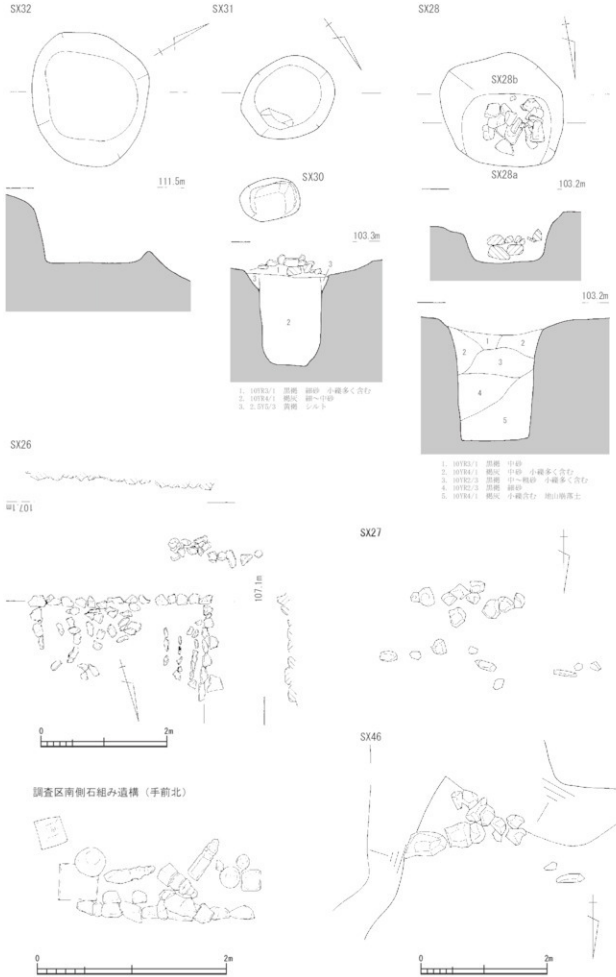
2区　中近世墓Ⅰ


SX09
SX40
SX41
SX42
SX43
109.4m
108.5m
108.8m
109.7m
110.6m
1. 2.5Y4/6 オリーブ褐 細縦混じりシルト質極細砂
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂 細縦を含む
4. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細砂
5. 2.5Y5/5 オリーブ褐 シルト質極細砂
※土坑底に粒板鱗らしき部植土が見られる
SX15
SX16
SX18
SX12
SX17
SX44
105.5m
105.6m
105.6m
105.5m
106.5m
105.5m
1. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂
2. 10YR3/4 暗褐 細砂 有機質含む
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂
4. 10YR3/2 黒褐 極細砂
1. 10YR3/4 暗褐 細砂
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂
2. 2.5Y5/4 黄褐 細砂
SD02
SX19
SX20
106.0m
106.0m
105.6m
1. 2.5Y5/4 黄褐 極細縦（φ1mm程度）混じり シルト質極細砂
1. 2.5Y5/4 黄褐 細砂 縦含む
2. 2.5Y4/6 オリーブ褐 粒砂～極細縦（φ1mm）混じり シルト質極細砂
0
2m
0
2m
0
1m

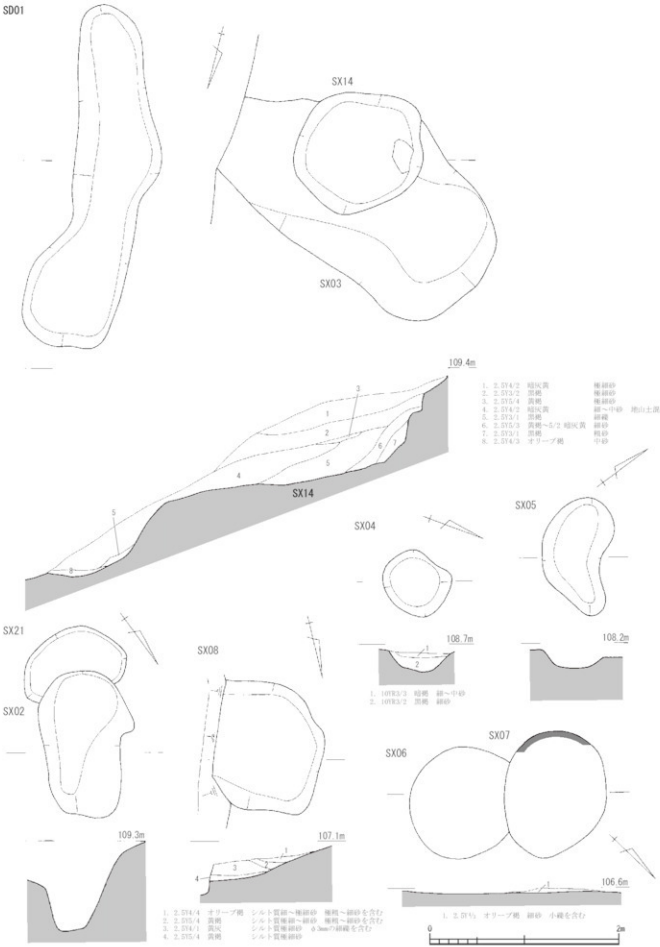
２区　中近世墓Ⅱ


SX45
SX23
SX22
※アミは掘り込み
SX22
106.3m
SX23
106.3m
1．2.5Y5/4 黄褐
細～極細砂混じり細礫
(φ5mm～1cm内礫)
SX45
106.3m
SX24
SX25
SX11
SX29
106.5m
106.5m
105.2m
1．2.5Y5/3 黄褐 シルト質細～極細砂
腐植物（根ヶ）多く入る
1．2.5Y4/3 オリーブ褐
中～粗砂混じり細礫
(φ5mm～1cm内礫)
2．2.5Y3/1 黒褐
炭層 一部に焼土有り
104.5m
SX36
SX35
116.0m
118.1m
SX33
SX34
115.2m
116.0m
0
2m

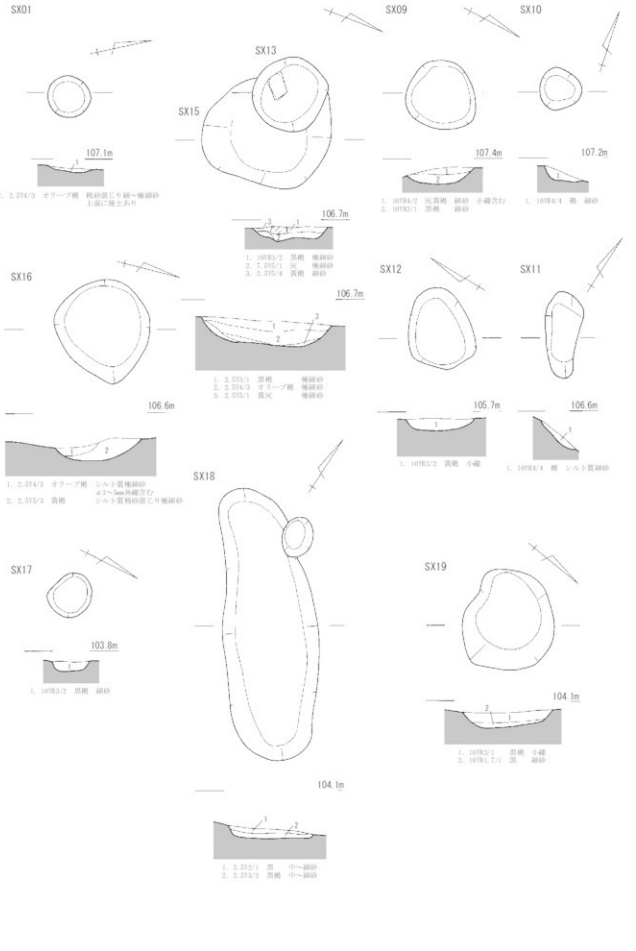
2区　中近世墓Ⅲ


SX32
SX31
SX28
SX28b
SX28a
111.5m
SX30
103.3m
103.2m
103.2m
1. 10YR3/1 黒褐 細砂 小礫多く含む
2. 10YR4/1 褐灰 細～中砂
3. 2.5Y5/3 黄褐 シルト
1. 10YR3/1 黒褐 中砂
2. 10YR4/1 褐灰 中砂 小礫多く含む
3. 10YR2/3 黒褐 中～粗砂 小礫多く含む
4. 10YR2/3 黒褐 細砂
5. 10YR4/1 褐灰 小礫含む 地山崩落土
SX26
107.1m
SX27
107.1m
0
2m
SX46
調査区南側石組み遺構（手前北）
0
2m
0
2m

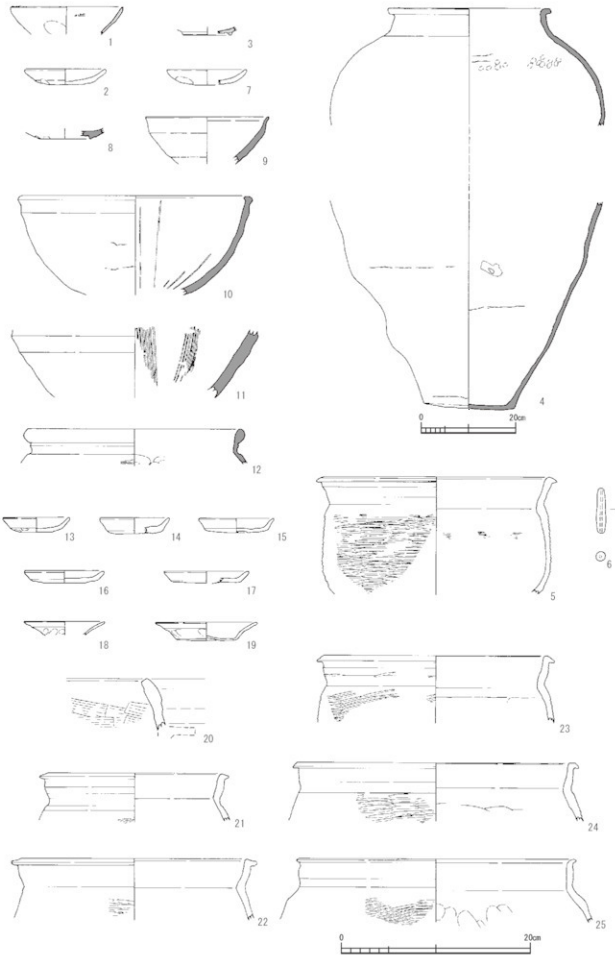
図版 20


SD01
SX14
SX03
109.4m
1. 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂
2. 2.5Y3/2 黒褐 極細砂
3. 2.5Y5/4 黄褐 極細砂
4. 2.5Y4/2 暗灰黄 細～中砂 地山土混じる
5. 2.5Y3/1 黒褐 細礫
6. 2.5Y5/3 黄褐～5/2 暗灰黄 細砂
7. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂
8. 2.5Y4/3 オリーブ褐 中砂
SX14
SX04
SX05
108.7m
1. 10YR3/3 暗褐 細～中砂
2. 10YR3/2 黒褐 細砂
108.2m
SX21
SX02
SX08
SX07
SX06
109.3m
107.1m
1. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト質細～極細砂 極粗～細砂を含む
2. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細～細砂 極粗～細砂を含む
3. 2.5Y4/1 黄灰 シルト質極細砂 φ3mm/7細礫を含む
4. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細砂
106.6m
1. 2.5Y5/3 オリーブ褐 細砂 小礫を含む
0
2m

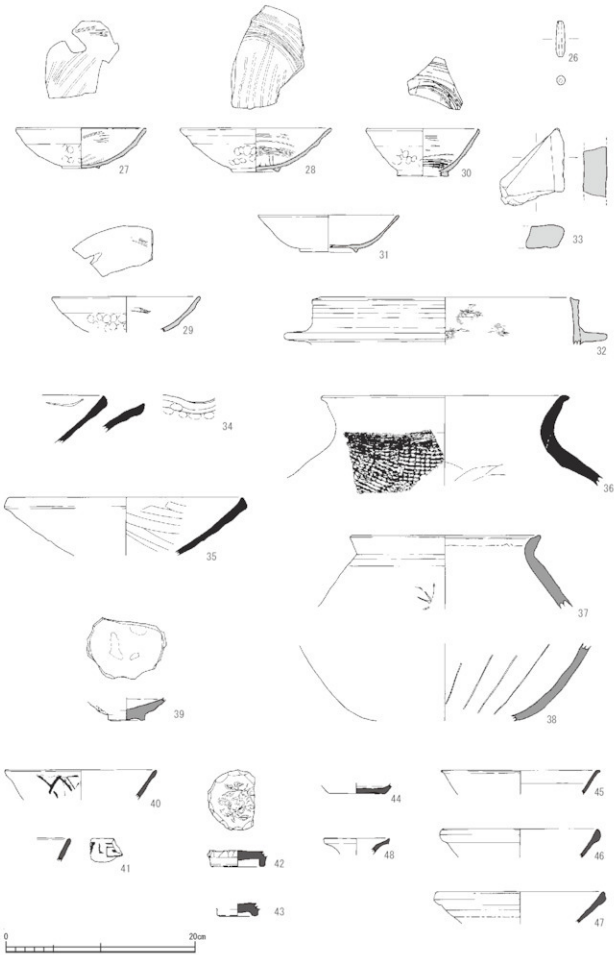
3区 土坑Ⅰ


SX01
107.1m
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂混じり細～極細砂
上面に焼土あり
SX13
SX15
106.7m
1. 10YR3/2 黒褐 極細砂
2. 2.5Y5/1 灰 極細砂
3. 2.5Y5/4 黄褐 細砂
SX09
107.4m
1. 10YR4/2 灰黄褐 細砂 小礫含む
2. 10YR3/1 黒褐 細砂
SX10
107.2m
1. 10YR4/4 褐 細砂
SX16
106.7m
1. 2.5Y3/1 黒褐 極細砂
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐 極細砂
3. 2.5Y5/1 黄灰 極細砂
106.6m
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂
φ3～5mm小礫含む
2. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質粗砂混じり極細砂
SX12
105.7m
1. 10YR3/2 黄褐 小礫
SX11
106.6m
1. 10YR4/4 褐 シルト質細砂
SX18
104.1m
1. 2.5Y2/1 黒 中～細砂
2. 2.5Y3/2 黒褐 中～細砂
SX17
103.8m
1. 10YR3/2 黒褐 細砂
SX19
104.1m
1. 10YR3/1 黒褐 小礫
2. 10YR1.7/1 黒 細砂
0
2m

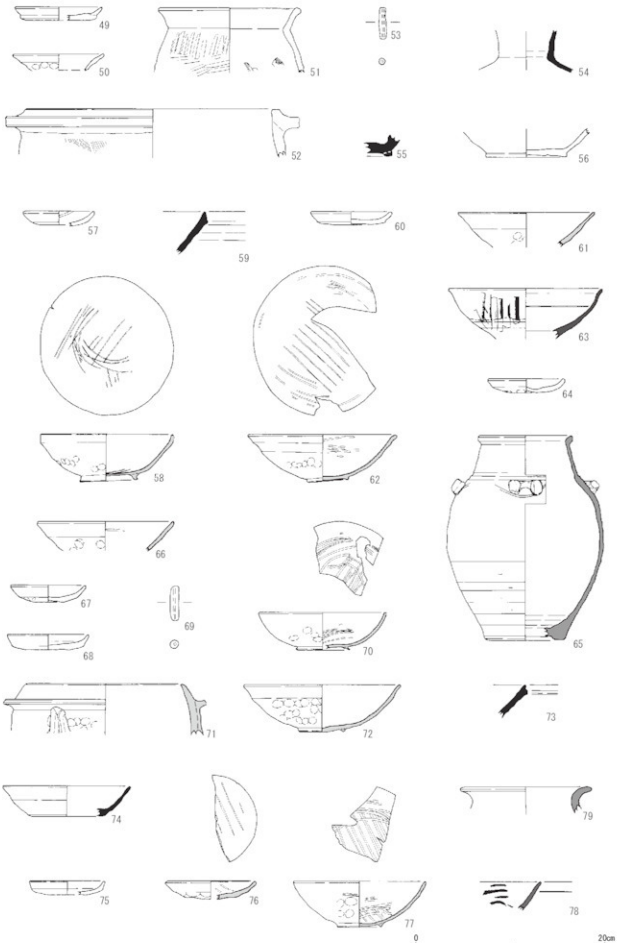
3区 土坑Ⅱ


1
2
3
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
4
0
20cm
5
6
23
24
25
0
20cm

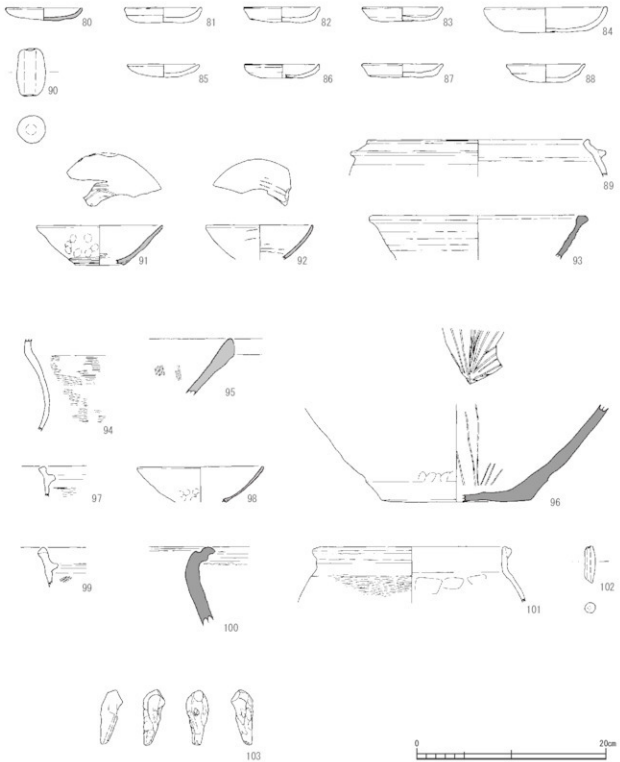
出土土器 I

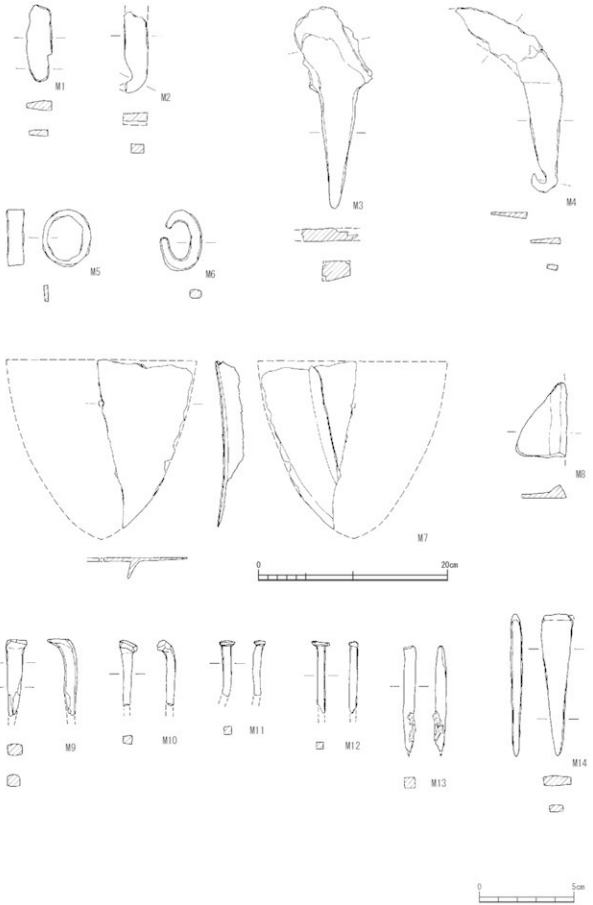

26
27
28
30
33
31
29
32
34
36
35
37
39
38
40
44
45
41
42
48
46
43
47
0
20cm

出土土器Ⅱ


49
50
51
53
54
52
55
56
57
59
60
61
63
64
58
62
66
65
67
69
68
70
71
72
73
74
79
75
76
77
78
0
20cm

出土土器Ⅲ


80
81
82
83
84
90
85
86
87
88
89
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
0
20cm


M1
M2
M3
M4
M5
M6
M7
M8
0
20cm
M9
M10
M11
M12
M13
M14
0
5cm

M15

M16

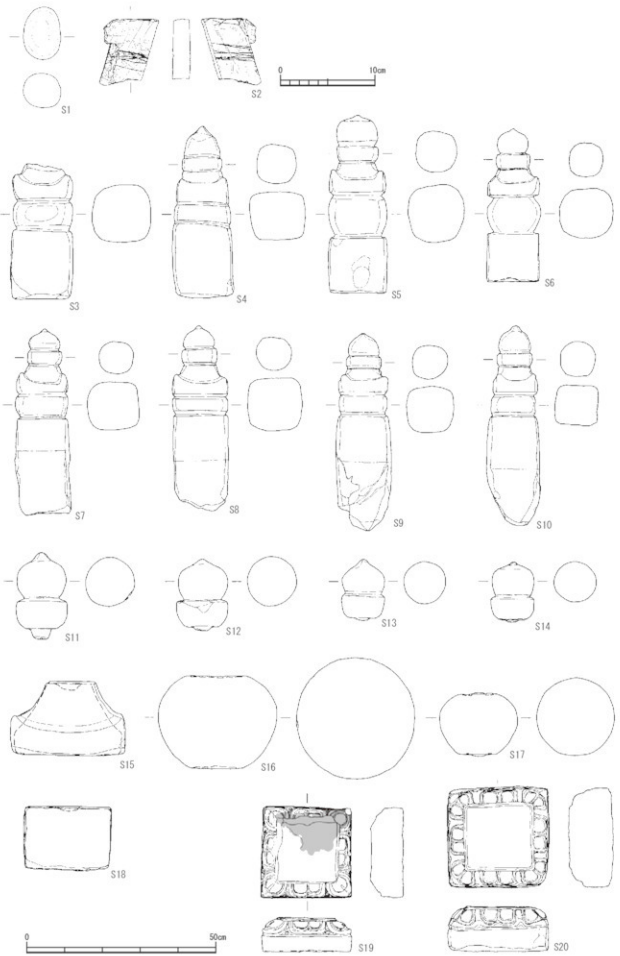
M17

M18

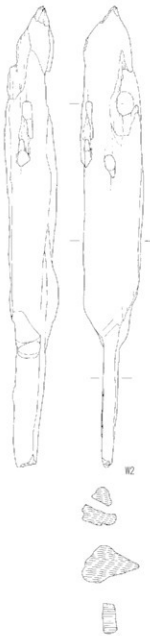
M19

M20

M21

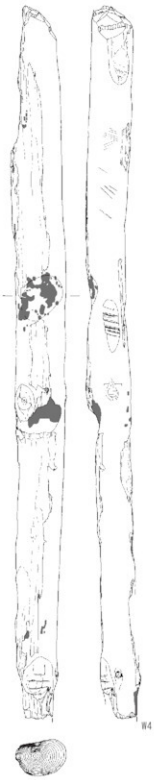

S1
S2
0
10cm
S3
S4
S5
S6
S7
S8
S9
S10
S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
0
50cm

W1


W2

W3

0
20cm

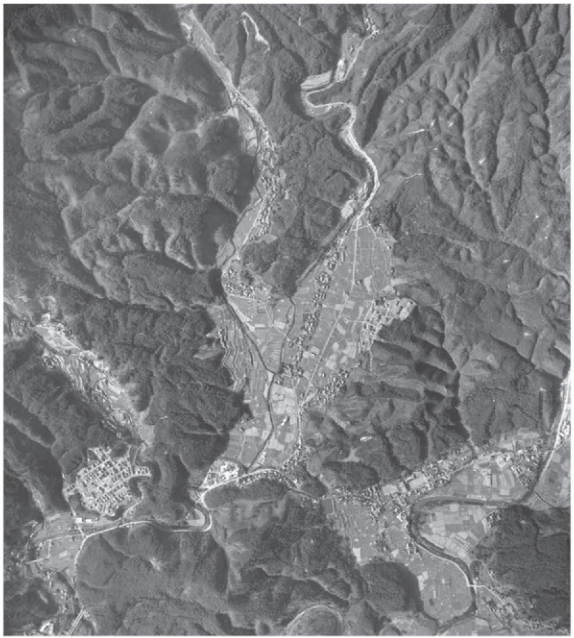

W4

W5

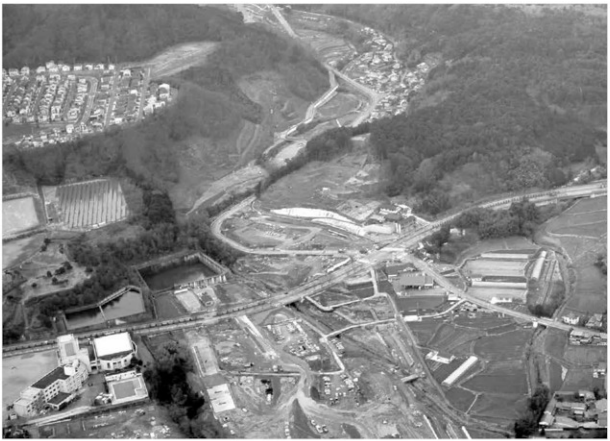
W6

0
20cm

航空写真（国土地理院）



遺跡遠景　空中写真Ⅰ



猪渕遺跡　遠景（東から）

猪渕遺跡　遠景（東から）

遺跡全景　空中写真Ⅱ

猪渕遺跡　全景（北から）

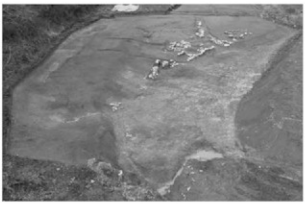
猪渕遺跡　全景（北から）

1区　全景

1区全景（東から）

1区全景（北東から）

1区全景（西から）



1－Ⅰ区全景（東から）

1－Ⅰ区全景（北から）

1－Ⅰ区全景（北西から）

1－Ⅰ区中央部（北から）

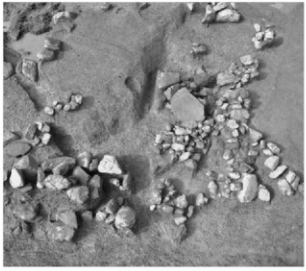
1－Ⅰ区　土層・遺構Ⅰ

南北アゼ①（西から）

南北アゼ②（西から）

溝 SD1004 土層（東から）

掘立柱建物跡 SB2002 全景（北東から）



溝 SD1004 集石部状況

平安時代谷部・SD2003（東から）

1－Ⅰ区　遺構Ⅱ

水溜遺構 SK1003 全景（南東から）

SK1003 集石下層（南東から）

SK1003 石組み状況（南東から）

SK1003 完掘状況（西から）

SK1003 部分断面（西から）

SK1001 埋甕（南から）

焼土坑 SK1002（南から）

1－Ⅱ区　全景・掘立柱建物跡 SB2001

全景（南東から）

西半（東から）

西半（北西から）

掘立柱建物跡 SB2001
（北から）

1－Ⅱ区　SB2001 柱穴

柱穴 P2002（西から）

柱穴 P2003（西から）

柱穴 P2007（西から）

柱穴 P2011（西から）

柱穴 P2012（西から）

柱穴 P2016（西から）

柱穴 P2017（西から）

柱穴 P2018（西から）

柱穴 P2019（西から）

柱穴 P2021（西から）

柱穴 P2022（西から）

1－Ⅱ区　土葬墓

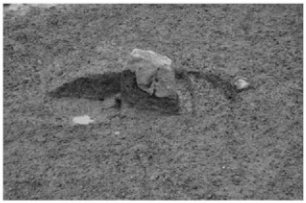
木棺墓 SX2003（北から）

木棺墓 SX2003 完掘状況（北から）

土坑墓 SK1004（北から）

土坑墓 SK1004（北東から）

土坑墓 SK1004 標石検出状況（北から）



土坑墓 SK1004 標石の状況（西から）

土坑墓 SK1004 標石の状況（北から）

土坑墓 SK1004 瓦器椀出土状況（北から）

1－Ⅱ区　土坑群

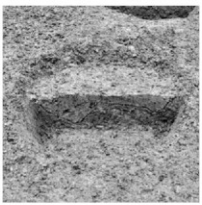
土坑 SK2005（東から）

土坑 SK2006・SK2007（東から）

土坑 SK2010（東から）

土坑 SK2011（東から）

土坑 SK2012（東から）



土坑 SK2013（東から）

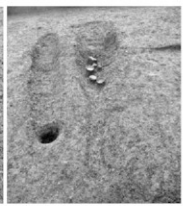
土坑 SK2014（東から）

SK2015（東から）

1－Ⅱ区・3区　区画溝・土坑

1－Ⅱ区　区画溝・土坑群周辺（南東から）

1－Ⅱ区　区画溝 SD2022・SD2021（北から）

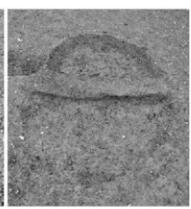


3区区画溝 SD02・SD03（西から）

3区区画溝 SD02・SD03（東から）

3区区画溝 SD02 土器出土状況（南から）

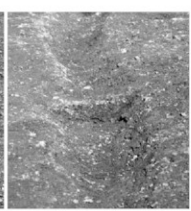
1－Ⅱ区　土坑 SK2018（東から）



1－Ⅱ区　SX2001（東から）

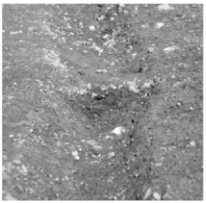
1－Ⅱ区　溝 SD2005 東側断面(東から)

1－Ⅱ区　溝 SD2007（東から）



1－Ⅱ区　溝 SD2020 南側断面（南から）

1－Ⅱ区　溝・畠跡・鋤跡



溝 SD2020 北側断面（南から）

溝 SD2008（北東から）

溝 SD2019（東から）

畠跡（西から）

畠跡（南西から）

鋤跡 SD2009・SD2010・SD2011・SD2012（東から）

鋤跡 SD2013・SD2014・SD2015（東から）

鋤跡 SD2016（東から）

2区　全景

全景（北西から）

西尾根全景（北から）

上段・中段全景（北から）

上段・中段全景（西から）

上段全景（東から）

上段近景（東から）

２区　遺構Ⅰ

上段 SX01・SX02（北から）

SX01 火葬骨出土状況（東から）

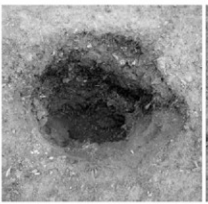
SX01 断面（東から）

上段東側 SX02 石造物出土状況（東から）

SX02 石造物出土状況（西から）

SX02（手前）・SX03（左奥）（東から）

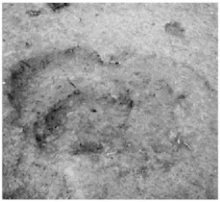
SX02 断面（東から）



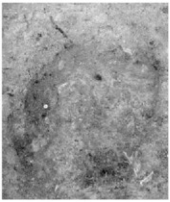
SX02（北から）

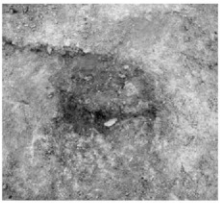
SX03（北から）

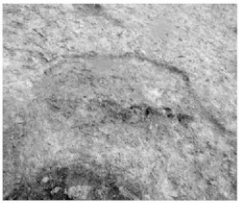
2区　遺構Ⅱ


SX04（左）・SX05（中央）（北から）

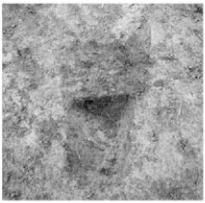
SX04 断面（北から）


SX05 銭出土状況（北から）


SX05 断面（北から）


SX06 断面（北から）

SX07（北から）


SX07 断面（北から）

SX21（南から）

SX21 人骨出土状況（南から）

SX13（北から）

SX14 アゼ（東から）

SX08（東から）

２区　遺構Ⅲ

SX08（東から）

SX10（東から）

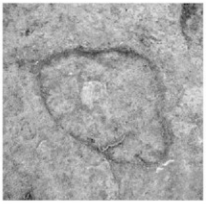
SX09（西から）

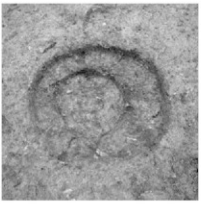
SX09 断面（西から）

SX09 確認調査時断面（西から）

SX12 土器出土状況（北から）

SX12 上層（北から）

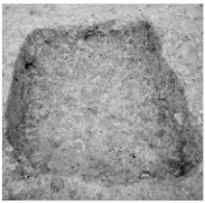

SX15（北から）


SX17（北から）

SX16 アゼ（東から）

SX18（北から）

SX19 断面（北から）



SX20 完掘状況（北から）

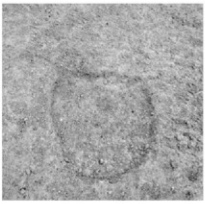
SX20 断面（北から）

SX20 検出状況（北から）

SD02 東側アゼ（東から）

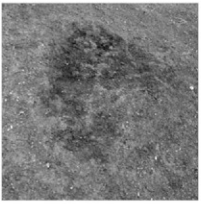
SX22・SX23 検出状況（北東から）

SX22 断面（東から）

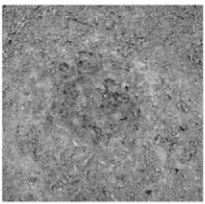


SX23 断面（東から）

SX25 断面（東から）

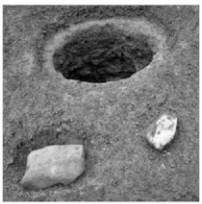


SX11 完掘状況（東から）



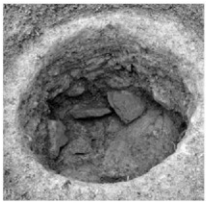
SX34（北から）

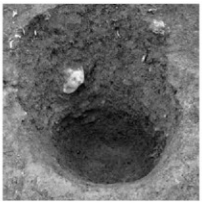
SX33 確認調査時断面（東から）



SX30・SX31（北から）

２区　遺構Ⅴ


SX31（北から）


SX28（北から）

SX28（西から）

SX26（北から）

SX26（東から）

SX27（北から）

南側石組み遺構（北から）

南側石組み遺構（東から）

南側石組み遺構（北から）

南側石組み遺構（北から）

SX46（南から）

SX46（西から）

3区　全景・遺構Ⅰ

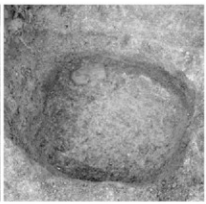
全景（北東から）

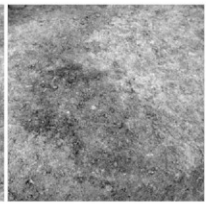
全景（南東から）

全景（南から）

SX03・SD01（北西から）

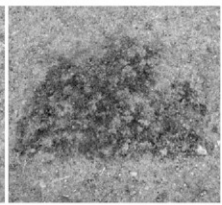
SX03・SX14（東から）


SX14（東から）

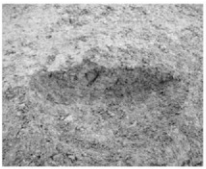

SX14 検出状況（東から）

SX08 断面（北から）

SX04 断面（東から）

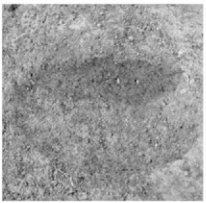

SX07 炭検出状況（北から）

３区　遺構Ⅱ


SX01 断面（北から）

SX13 断面（北から）

SX15 断面（北から）


SX09 断面（北から）

SX10 断面（東から）

SX16（北から）

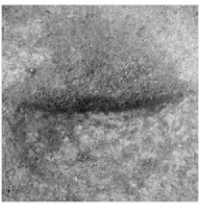
SX12（北から）

SX11（東から）

SX17（北から）

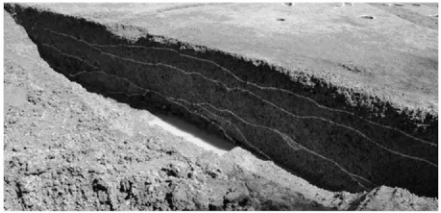
SX18（手前）・SX19（奥）（北から）

SX18（東から）


SX19（北から）

下層断ち割りトレンチ

1－Ⅰ区トレンチ１（東から）

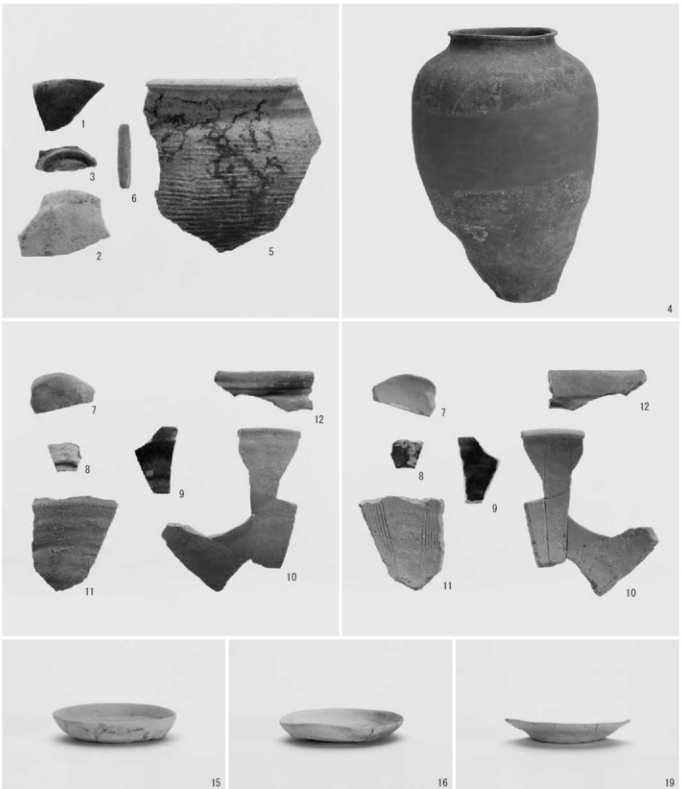


1－Ⅰ区トレンチ１北断面
（南東から）

1－Ⅱ区トレンチ２東半
（北東から）

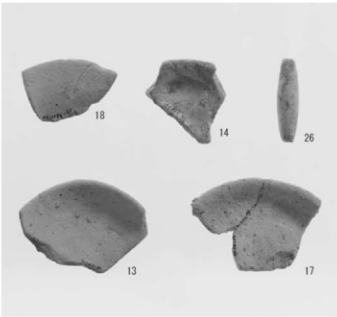
1－Ⅱ区トレンチ２西半
（北東から）

出土土器 I

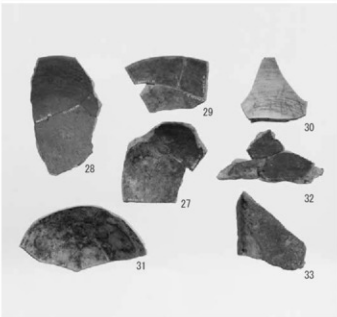


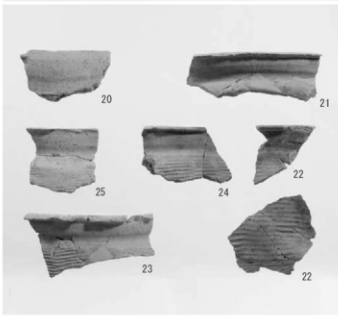
出土土器 II

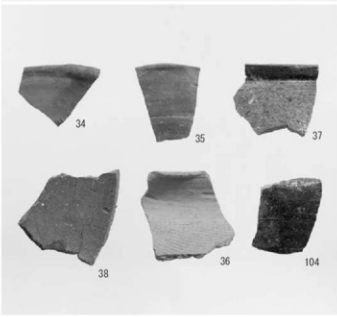
18
14
26
13
17


18
14
26
13
17

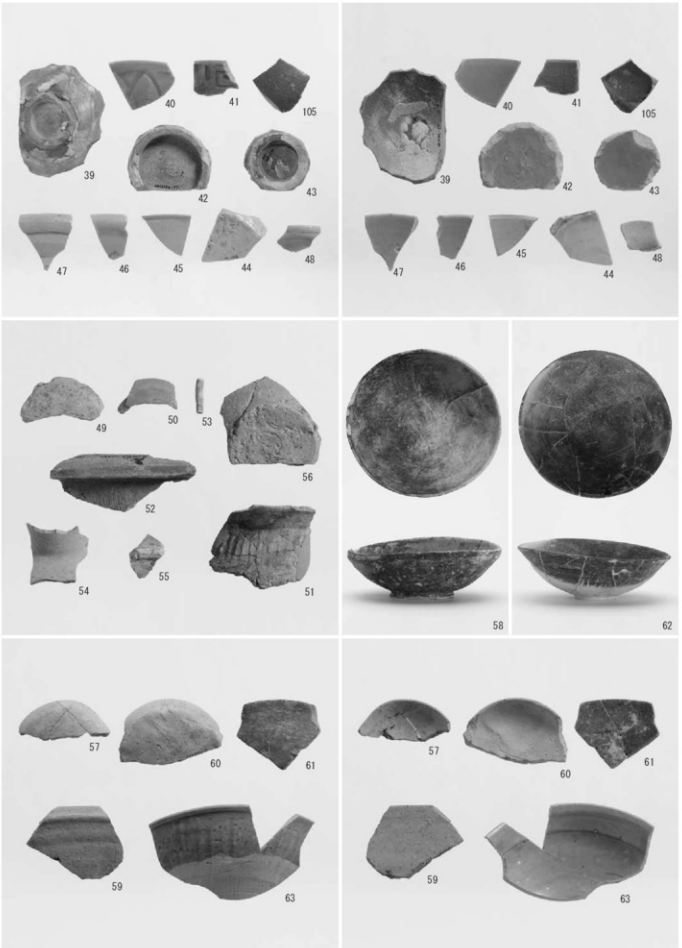
29
30
28
32
27
31
33


29
30
28
27
32
31
33


20
21
25
24
22
23
22


34
35
37
38
36
104

出土土器Ⅲ

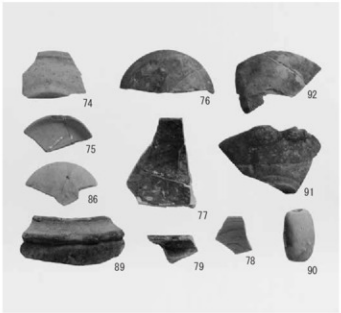

39
40
41
105
42
43
47
46
45
44
48
39
40
41
105
42
43
47
46
45
44
48
49
50
53
56
52
54
55
51
58
62
57
60
61
59
63
57
60
61
59
63

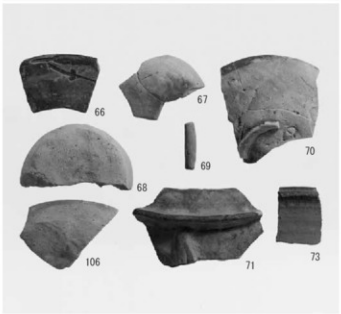
出土土器Ⅳ

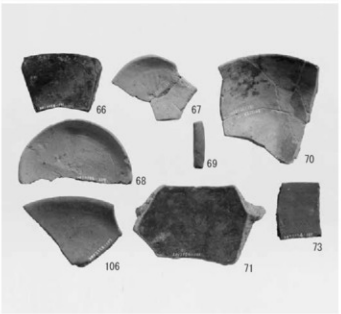
64

72

65







出土土器Ⅴ

81

82

83

85

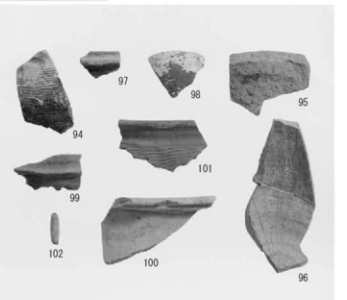
87

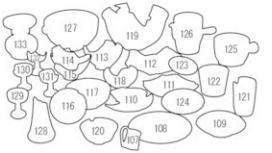
88

80

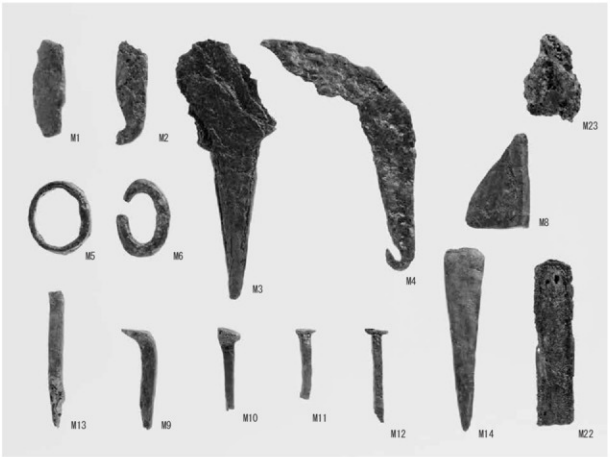
84

103

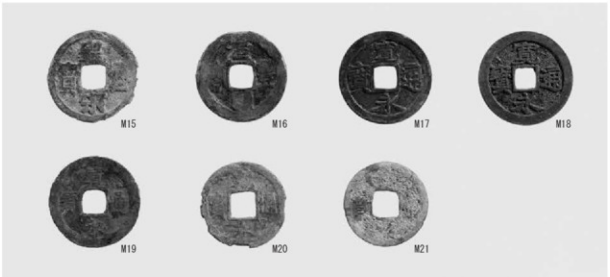


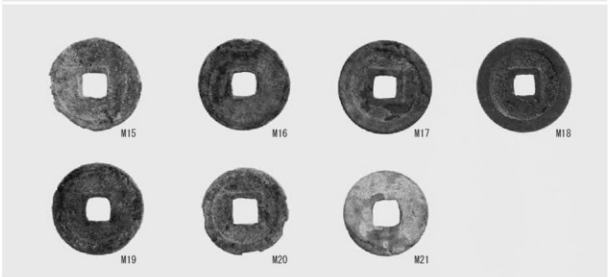


金属製品 I



金属製品Ⅱ・石製品





S 1

S 2

石造品

S3

S4

S5

S6

S7

S8

S9

S10

S11

S12

S13

S14

S15

S16

S17

S18

S19

S20

木製品

W1

W2

W3

W4

W5

W6

報告書抄録

ふりがな	いぶちいせき
書名	猪渕遺跡
副書名	新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第485冊
編著者名	西口圭介
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）　℡079－437－5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650－8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号　℡078－362－3784
発行年月日	平成28（2016）年3月28日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　℡079－437－5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
猪渕遺跡	川辺郡猪名川町猪渕	28301	210081	34°53′17″	135°21′52″	20111110～20120309（2011234・2011257）	428㎡	記録保存調査
				34°53′20″	135°21′50″	20121206～20130315（2012154）	1,808㎡	
				34°53′18″	135°21′50″	20121206～20130315（2012155）	72㎡	
				34°53′17″	135°21′52″	20131201～20140114（2013119）	1,302㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
猪渕遺跡	集落 墓地 旧谷地形	平安時代	流路（旧谷地形・溝）	須恵器杯・須恵器細頸壺・土師器甕	猪渕周辺の初期土地開発に関わる事象
		鎌倉時代	掘立柱建物2棟・木棺墓1基・土坑墓1基・畠跡	華南産灰釉陶器四耳壺・瓦器椀	中世前期の屋敷地
		中世末～江戸時代	火葬址・土葬墓群	五輪塔残欠・一石五輪塔・銭貨	猪渕地区の中近世墓地

要約

猪渕遺跡は中世前期の屋敷地と南側斜面に展開する中近世墓地跡から構成される遺跡である。今回の調査では、屋敷地に伴う建物・墓・畠を調査し、華南産灰釉陶器四耳壺・瓦器椀などの遺物が出土した。また、墓地跡からは火葬址・土葬墓群を調査し、一石五輪塔などの石造品、蔵骨器として使われた可能性のある土師器鍋などの遺物の出土をみた。また、本地点からは平安時代の流路・土器を検出しており、本地点の開発が平安時代中頃にさかのぼることが判明した。

兵庫県文化財調査報告　第485冊

猪名川町

猪渕遺跡

―新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成28年（2016）3月28日　発行

編　集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
（兵庫県立考古博物館内）
発　行：兵庫県教育委員会
〒650－8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
印　刷：富士高速印刷株式会社
〒679－4232　兵庫県姫路市林田町上伊勢962－3